養すると共に豫め經營方針を樹て、然も此の難局に當る準備を整へた、會社の方は事情を具して退社を中出たが氏の如き優良なる模範社員の退社を惜しみて諫止せられ、在社の儘事業に從事し愈確實の見込が付いてから止めたらとの破格の待遇を以て愉されたけれども、氏は深く之れを謝し、又當時會社は政府に買收せられる事となり、氏に於ても種々の特典と利益があつたが一旦決心したる氏は之れ等に目をも吳れず斷然退社した。

而して愈々巴組門司出張所を引受ける就て左記の條件を叔父さんに申出てた、

一、巴組門司出張所を一萬圓にて讓り受けること、但し其金額は二百圓宛五十ヶ月償還の事

一、他の親戚と共に連署の公正證書を作成する事

然るに只で貰ひ得る巴組出張所を壹萬圓にて讓り受け（壹萬圓も當時としては決して安い値ではなかつた）而も公正證書を以て引受けたる一事を見ても氏が他日大をなす素質の一端が窺はれる、氏は店員を解雇し庶務を整理して經營方法を立て直し、腹心の小壯店員二三と同心一體となつて活躍を初めた。

當時佐賀の百六銀行に抵當流れとなつて、もてあまされてゐた九州丸といふ二千噸級の貨物船を定期傭船し自から第一線に立つて之れが運用に務めた、未だ海運の實務に暗かつた氏は自ら九州丸に乘込み安東縣や支那の沿岸等に航行し積荷の荷捌を初め、荷主の接衝其他種々の事務を取扱つて專念實務の研鑽と業務の發展とに努めた、無論店員も一致協力寢食を忘れて店務に從事した、斯くて衰退を極め、閉店の已む無き迄に至らんとした。巴組門司出張所も歩一歩と成績を擧げ這般の苦境を挽回し玆に全く面目を一新した。

◇奮鬪から奮鬪

九州丸の運航は氏の一つの試鍊であつた。而して氏は充分の確信を以て店運の開拓に努め業務の擴張を圖り、海運業に緣の深い石炭販賣を兼營し之れ又相當の成績を納めた。

門司は名にし負ふ九州の表玄關で、筑豐產の石炭輸出港であると同時に北九州に於ける商工業の中心、文化の魁の地である。氏の活舞臺としては强ち不充分ではなかつた。後氏は其の販賣せる石炭の採堀される木屋瀨炭礦に關係した、巴組の店は十四五人の店員を擁して氏の令弟に任せて置いても差支ない程の基礎が出來て居たので愈此の炭鑛の經營に專心沒頭することゝなり大正二年五月

出資者たる八田氏の懇請を容れて木屋瀬炭礦の事務取締役に就任した、木屋瀬炭礦は日露戰爭後の好景氣の反動以來經營難に陷つて居た。

氏は當初每朝は四時に會社に出勤し自ら現場に於て荒くれ坑夫と共に働いた。沒常識なる坑夫の操縦には血の惨む様な苦鬪を續け、又此の不況にある炭礦を經營するには筆舌を以て到底表現することの出來ない苦心があつた、しかし氏は少しも屈することなく、孜々營々資金の調達と坑夫の懐柔とに努め、一切の私心を捨て粉骨碎心之れに當つた、同時に其當時三井が石炭の一手販賣をして居た横島炭鑛も同様の窮狀であつたのを併せて經營することになつた。

木屋瀬、横島兩炭鑛とも氏の苦心經營の結果漸く立て直つた。資金難、經營難は一掃され、兎も角收支の採算も確實となつた、而して氏の手腕・力量は彌が上にも認められ其經營の堅實さは充分信用を以つて迎へられた。

歐洲戰爭が初まつて間もない大正五年に此の二つ炭鑛卽ち木屋瀬炭鑛は山本唯三郎氏に百萬圓で賣却し、横島炭鑛は七拾五萬圓で安川敬一郎氏に賣却した。

苦心經營漸くにして地平線上に築き上げた炭鑛を而も二つとも何故に賣却したが、之れは氏の凡人でない點であつて其の頭腦の鋭敏さを物語るものである。

歐洲大戰の影響を受け我が國經濟界は未曾有の好況時代を現出した、海運の有望に着眼した、氏は九州丸の外二、三千噸級の貨物船四五隻を買ひ入れて自營し、外に傭船の二十隻も運航し營業の大擴張をやつた、總てトン〳〵拍子に效を納め莫大な運賃收入を獲得し、又汽船の賣買並に仲介等相當の收益を納め一廉の船成金として門司財界に謳歌せらるゝに至つた、けれども烱眼なる氏は戰後の反動來を見越して、大正九年財界のパニック以前に既に營業上の手仕舞をやつて居たといふから、斯の恐慌來に際して何等の損害もなかつた。

炭鑛整理に成功した氏は、商賣違ひな銀行整理もやつて居る。それは前に述べた手を擴げ過ぎて多額の損害を招き、又其の經營にかゝはる貯蓄銀行が明治四十四、五年以來苦境に陷り非常に經營困難となつて居た。そこで八田氏は氏の手腕に信頼して懇願して來られた。氏は八田氏に同情して東奔西走し出來得る限り援助を與へ、當時の日本銀行總裁三島彌太郎子爵に數度會見し、救濟方を哀願し資金の融通を請ひ、一方債權者を集めて懇談的に其善後策を講ずる等最善を盡したが銀行は取付けを喰ひ遂に閉鎖するの止むなきに至つた。

八田氏は銀行閉鎖の責を負ひ、其の殘餘財産全部を提供して整理一切を氏に委囑したのである、債權者の中には有名な高利貸も居た。そこで氏は貪慾飽くなき高利貸の爪牙を豫防する爲め、一方又小額預金者に對する償還を念慮し逸早く八田氏の殘餘財産を自分の名義に書き替へ自分も亦二十萬圓からの現金を融通するなど最善を盡したが遂に一部頑冥貪慾な彼等の爲め銀行は破産の止むなきに至つた。

しかし氏の盡した人道的行爲は實に貴重なものであつて、氏も又此の苦しい經驗は決して無駄ではないと述懷して居る。

◇躍進から躍進

大正七年には門司市會議員に選擧せられ翌八年には、鐵道運送取扱人の公認制度を主唱し、鐵道の公認制度採用せらるゝに及んで、氏は門司鐵道局管內公認運送店組合聯合を組織し之れが會長に選任せられ、續いて全國公認運送店組合の最高機關たる中央會の理事となり會長となつた、門司商業會議所議員門司海運業組合長下關海運業組合組長に就任し大正十一年には門司商業會議所會頭に就任した。其他門司港貿易商工界に盡し、築港事業に又學校建設等公共的に貢献した功績は擧げて數ふるに過ぎない。

氏は夙に小運送の改善を主唱し、運送具並に運送方法の改良、海陸連絡輸送の活用、小運送料金の低下等に就き深く研究を重ね第一線に立つて高唱した。之等の問題解決は延いて國民生活に資する事大なるものがあるとの意見を以て、此の改善案をパンフレットとし商業會議所聯合會を通じて其の意見を發表した。而して大正十三年三月鐵道省の小荷物制度調査會を起すに當り擧げられて氏は委員となり、多年研究主唱せられたる小運送の改善に對する諸問題に付き意見を開陳し、一方運輸業の向上を計ると共に社會一般に輸送智識の普及に努め大いに衝動を與ふる所があつた。

◇內國通運へ

大正十二年氏は囑望を負ふて內國通運に入つた。內國通運は遠く江戸時代免許飛脚問屋を母體として明治五年に陸運元會社の名稱で資本金五萬圓を以て設立され、明治八年前島驛遞頭の創意で內國通運株式會社と改めたものである。その經營は現重役吉村佐平氏の先々代吉村甚兵衞氏の中心事

國際通運社長　中野金次郎氏

業であつて、代々吉村家の本陣であつた。然るに日露戰爭後吉村氏は其の持株の一部を手放しゝた爲め多くの株が市場に浮動して自然中心勢力を失ひ悪德株屋や會社稼の連中に乘ぜらるゝ所となつた。

通運過去十年間の紛擾は未だ財界に新しい記憶である。此の長き內訌の爲め社員も安んじて誠實に仕事も出來ず、全國の取引店も堪り兼ねて革正運動を起し、一方急進派は國際運輸を起して會社の勢力範圍に喰ひ入つて來た。今や古き歷史を有する內國通運も憂慮すべき深淵に陷らんとし、善良なる當時者並に利害關係深き全國取引店の焦慮も一方ではなかつた。十二年四月當時監査役をして居た氏は先輩三上豐夷氏並に吉村佐平氏の懇望を受けて同社の徹底的改革と紛爭絕滅を期して猛然として起つたのである。

氏は先づ紊亂せる會社の內容調査を初め、極秘の裡に約二ケ月を費して整理の具體案を得、臨時株主總會を開催して斷然重役の改選を行ひ大正十二年七月專務取締役に就任した。玆に於て內憂外患久敷に亘つた內國通運の低迷せる暗雲を取除くことが出來た。しかし未だ之れを以て了りとすることは出來ない。氏は內部の改造と同時に全國取引店の連絡統一に努めた。又或る時は社員を一堂に集め訓諭を與へ、或は又鐵道協會々議室に廣池博士を招いて最高道德の講話を聽かしめ、社內の士氣を鼓舞する等精神的に訓育し、又全國を馳け廻りて取引店の融和を說き、運送上の連絡統一を唱へ、取引の圓滑を計る等一意社礎の安定に努力した。大正十三年三月三上社長の引退の後を承けて社長に就任し、爾來朝鮮に臺灣に業務の大發展を圖つた。其他日本郵船、近海郵船、朝鮮郵船等と提携する等拮据精勵大いに努めた結果玆に全く安定し業績日々に揚り面目一新昔日と其の觀を異にする迄發展した。

◇國際通運設立

大正十五年六月、時勢の進運に鑑み鐵道省は運送取扱改善の聲明を發し一驛一店制を主唱して業界の合同統一を慫慂された。玆に於て內國通運、國際運輸、明治運輸の三社先づ合同し、合同運送株式會社を創立し之れに、中外運送、中央計算所、大同運送、朝日海陸運輸、共三運輸、日本運送、八坂九商計算、北海道中央運送社等各地有力なる同業者悉く併合し、玆に中心勢力たる元締が出來上つた譯である。氏は男爵中島久萬吉氏の後を承けて推されて社長に就任し國際通運株式會社と社

國際通運社長　中野金次郎氏

名を變更した。

全國各驛運送業者も幾多の迂餘曲折を經て各々合同を完成し、悉く中央の國際通運との代理契約全く成り完全なる運送網は敷かれた。鐵道の一驛一店制主義の聲明發表以來三年、此の間の惡戰苦闘は到底筆舌の盡す所ではない。

◇所謂奮闘秘話

尙此の外に世人に餘り知られて居ない偉大なる功績がある。

彼の大正十二年九月一日關東大震災の當時其の獻身的な活動は正に特筆に値ひするものがある。

氏は當時社用を帶びて北海道方面へ旅行中であつたが、此の大震災の報に接するや急遽歸京し、目も當てられない帝都の慘情を見て暗然として且つ胸中何物か期する所あり急ぎ丸の內の社に歸り詳細に實情を聽き直ちに芝浦に赴いた。芝浦の埠頭には救恤品か山積されて居るのみならず救恤品を滿載した大小の汽船は物資の陸揚をなすことも出來ず數十隻淀泊して居る。陸軍の參謀本部の手で軍隊や在鄕軍人等を指揮して配給品の整理をやつて居るが、あとから〳〵と來る荷物の山には手も付けられない位である。命令一下軍隊的に活動はして居るが仕事の順序、運搬の方法等に前後があつて宛ら戰場の如き大混雜を極めて居る。此の有樣を見た氏は、罹災民の飢餓と困苦とは日一日と度を增して居る際、救恤品の配給は寸時も忽に出來ない大問題であること、義俠心一閃奉公の念に燃えた氏は一部の反對意見を廢して山なす物資の配給作業を引受けた。

木材、衣類、米味噌等而も亂雜極まる品物の山をどうして片付けるのか、あまりに大膽無謀な引受けをしたものだと危むものもあつた。しかし運送作業の經驗を以て此の場合全く商賣意識を離れ公共的に盡すことが天の使命であると考へたのである。

大震火災の餘燼尙滅せず加ふるに東京、橫濱附近に於ける小運送機關は殆んど全滅の狀態であつた。大膽無謀な引受だと危むのも當然の事である。氏は社員を督勵し、或ひは地方に人を派し先づ自動車、馬車、荷車等あらゆる小運送具を集め晝夜兼行寢食を忘れ、自らも其の第一線に立つて奮闘した。それと同時に當局でも芝浦に救護事務局を設け市の內外に配給事務所を置いた。氏は又芝浦にバラックを建て運轉手、車馬等を此處に住はせ、救護事務局と相計り、安心と敏速を期する爲

國際通運社長　中野金次郎氏

め自動車、馬車に救護事務局の赤い旗を立てさせ大々的に配給に努めた。當時罹災者が溫かに衣食を受ける事の出來たのは全く斯うした氏の盡力に負ふ所が尠くないのである。

當時夫人は令息の病氣を養つて鎌倉に靜養中であつた。母子は抱き合つて家の下敷となり壓し潰されたが漸く屋根の破れ目より匐ひ出して幸に九死に一生を得た狀態であつた。にも不拘氏が此の夫人令息に會つたのは罹災後四ケ月目であつたと云ふ。如何に氏が私心を忘れて公共的に盡された方かゞ窺はれる。

◇氏の現在

去る二月東京商工會議所議員改選に際し、運送業者を代表して此際立候補してはといふ話があつたが、氏は今進んで立候補することはまだ多少考へる餘地があるものとして、全然立候補の意志は無かつたが、東京市内八驛の合同運送會社の代表者の幹部が業界の爲め此際一臂の力を添ふる意味に於て是非共と切に氏の出馬を要望して來た。そこで氏も豫て自分か立唱し來れる小運送改善問題に對し自己の責任の重大なるを感じ、尙殘されたる諸問題解決の爲め立候補する事となつた。開票の結果第二位の成績を以て當選した此も一面氏の人望を裏書するものである。

氏はすべてに於て熱誠の人であると共に信念の士である。今や日本の運輸王と謳はれ中央財界の新人として衆望厚く、年齡漸く四十八尙前途幾多の春秋あり、氏の活動や期して待つべきものがあらう。最後に氏の關係する事業は頗る多い。其の重なるものを擧げると、

國際通運株式會社々長　大北火災海上運送保險株式會社々長　運送相互保證株式會社々長　汐留驛運送株式會社取締役會長　合資會社巴組社長　門司土地株式會社取締役　上毛電氣鐵道株式會社取締役　關門汽船株式會社監査役　大日本自動車保險株式會社監査役　鐵道省小運送制度調査委員　農林省馬政委員　帝國鐵道協會評議員　港灣協會常議員　帝國運送協會特別會員　道路改良會評議員　日本交通協會常務理事　日本工業俱樂部評議員　東京商工會議所常議員

以上の如くで、とても名刺一枚には書けない程ある、氏を郵船ビルの四階社長室に訪へば語る『自己の榮達のためと思へば事業は出來ない、事業がよくなるか、惡くなるかは唯自分の努力如何である。事業の發展は卽ち國家の利益だ。事業の爲めには常に自己をすてる』。と又、『計は密なるを要

國際通運社長　中野金次郎氏

す』と。密とは緻密と秘密に通ずるであらう。實に好い金言である。

願はくば、運輸統一、海陸合同と胸中にある念が實現の一日も早かれん事を祈るものである。

外國商館の丁稚から九州月賦賣の王になつた

吳服商　村上榮吉氏

◇小天地から飛び出して長崎へ

福博吳服商中の三人物に卸商の木梨久太郎、廉賣松屋の宮村吉藏と月賦販賣の村上榮吉の諸氏がかぞへられてゐる。木梨氏は溫厚なる君士人的な人格者宮村氏は奇拔で而も熱でゆく。村上氏は花をすてて實をとる。而も恬淡商賣人らしくない商人。軍人タイプなどの世評を受けてゐる。三氏は夫々相異なる性格を有してゐる。然も交情厚くお互目の中に入つても痛くない友人同志であるから面白い。伊豫の田舍町に身を起して九州第一の都福博の一流實業家として人も許し又自らも信ずる村上榮吉氏の過去を今ここに紹介するは實に意義あるものと信ずる。

村上榮吉氏は愛媛縣越智郡櫻井町の產。明治十三年三月十三日嚴父虎一氏の次男に生れた。生家

は國産漆器をあきなひ、可成り手廣く取引をしてゐた。氏は同地の高等小學に學び夜は塾にかよひ漢學の素讀を習ひ、無事平穏な少年期を送つてゐる。然し十九歳の時嚴父は商賣上の事情により店の整理をなすのやむなきに至つた。大きな店舗をしまつて小さな住居に引込むことは何不自由なく育つた榮吉氏の耐ゆる處でなかつた。男子が事をなさんとする場合活動の舞臺は大なるを要す。猫額大の伊豫の小天地で又何をかなさんと、心に堅く決する所があつた。

氏が選んだのは長崎の大浦である。未だ當時長崎は外國船の輻輳した時代でその繁華はこの上もなかつた。異國情緒のこまやかな町に燃ゆる成功慾を抱いて四十二番のオーカー商會にターリマンとして二年間の月日を送つた。荷物の受渡しの間暇にポケットにしのばした單語帳をひつぱり出しては會話の稽古に餘念がなかつた。然しやがて徴兵檢査が來て加へて脚氣を患ひ久方振りに郷里の土を踏んだ。甲種合格、籤のがれで三年の兵役は免かれた。

◇月賦販賣法を發見す

明治三十三年氏の店員生活が始まつてゐる。郷里の漆器商に田坂善四郎といふ人があつた。隨分嚴格な人で店員も長く續いた人がないらしい。田坂では店を唐津に置いて九州一圓と取引をしてゐた。榮吉氏もこの店に入つたのである。榮吉氏は九州の商業の中心地はどうしても博多の他にない唐津は土地偏在であるこ主人に建言して、店舗を博多に開かしめた。間もなく日露の戰役が終つて世は底なしの不況におそはれた。商人は商品を庫の中にうならしてゐるが、金に換ふる術を知らない。眼前に唯破産があるのみである。長い間皆ある限りの智腦をしぼつた。

然し良案は浮ばない時に榮吉氏の連日の思案につかれた頭に天來の妙音の如くひゞいたのは月賦販賣であつた。さうだこれより他に商品を金に換ゆる方法はない。氏ははたと膝を打つた。直に主人こ相談してこの販賣を開始した。計略見事にあたつて在庫品はどん〳〵と賣さばかれた。一同始めて安堵の胸をなでおろした。今日中流以下の購買層の利用する便利なこの販賣法は實は當時榮吉氏の智腦により考案されたのである。即ち月賣販買の濫觴は實にこの時にある。

心ある男子は隷屬の地位に長く滿足するものでない。腕に充分の自信のついた氏は我思ふ樣に充分驥足をのばしたくなつた。明治三十七年に半獨立でやはり漆器の月賦販賣を試み手を九州一圓及び中國にひろげた。これ氏の二十六歳の時である。然し明治四十四年頃漆器販賣に行づまりが來た。

村上氏は思つた。漆器は家具である。或る程度に達すれば飽和點があるこれでは花々しい商賣は出來ぬ。取引は日用品でなくてはならぬ。途中人間生活に衣類は實に大切である。今後この方面に活動の天地を求めねばならぬ。斯くして氏は主家に說いて呉服類の月賦販賣をなさしめた。これが村上氏今日あるの原因である。即ち明治四十五年一月愈々呉服商を開始したのである。

◇漆器から呉服へ商賣替へ

景氣は波調をゑがいて循環する。大戰終熄後我國に最も深刻なる不景氣におそはれた。富山縣の一漁村の女の米騷動が全國的に波及したのもこの時代である。村上氏も經營難に陷らざるを得なかつた。大正六年正月愈々半獨立から純粹の獨立に至つた。然し資本金はなく而も商賣の性質上貸つけはせねばならぬ。氏が人知れぬ苦心したのはこの頃である。然し月賦販賣と云ふ時宜に適した方法を取つて村上氏の商賣は、順風を受けた帆船の如くとん〱拍子で進んだ。そして基礎は確立しもはや何者にも動じない資產が出來た。

大正九年は財界恐慌の時である。一流の店舗が枕をならべて破產した。株や思惑をやつた連中は大痛手を被つた。然し一週間に二十時間の睡眠しかとれず而もその二十時間を多く汽車の二等車の座席に利用した樣な超人的な活動を續けてゐた氏は思惑や株をやるひまがなかつた。物價は原價の二分の一三分の一に低落した然し幸ひ氏は商品の損だけですんだ。而もその位でぐらつく村上商店ではなかつた。

烱眼な氏はこの時尙中流以下が富裕な生活をなす資力があり、貸つける商品代を回收する充分の可能性を有する事を見拔いた。氏は銀行や同業者友人の忠告に耳を傾けず、極力買ひに出た。決して賣らない。買ひ一方である。男になるか。失敗するかの分岐點に立つて、氏は乾坤一擲の大芝居をうつたのである。銀行もやがて村上商店の集金の成績にかんがみて氏の行動の合理的なのを理解して資金を廻した。果然賣價は一躍して二倍に暴騰した。世人は村上は百萬圓の黃金を利したと稱して一驚したのである。

大正十一年來世に再び不況の風が荒れはじめた。利益は資本金の利潤にもあたらぬ。むしろその位の收入なら株を持つてゐてもある。村上氏も商賣を中止しやうと幾度か思ひ立つた。然しつら〱考へて見るに、村上商店の今日あるは自分一個の力のみではない。店員の努力に負ふ所が多い

今もし自分が廢業するとすれば今迄自分の店につくしてくれた、店員は、その家族と共に百餘名路頭にまよはねばならないではないか。と思ひなほした。又木梨、宮村の二友人も極力商賣を持續する樣にすゝめて、切に決心を飜さしめた。

氏はこゝに於て商務を持續し店の運用資本を十萬圓に限定して。之を超過する事なからしめ、純益金中より資本金の一割以下をその利子として引さり、殘額を店員と折半するの新しい店員優遇法を講じ店と家を全然きりはなして家族は西職人町の淸楚な住宅にすむ事にした。現在村上商店の月賦販賣網は九州一圓に渡り三十有餘の店員は四方に活動してゐる。

◇其の後事業

氏は自らが商人タイプでない事を認めてゐる。友人も氏を許するに豫備將校の言を以てする。自らは店頭にあつて上手に商賣をやらないが、上手に商賣をする店員を上手に使用する事が巧である。店員敎育法も他と趣きを異にして、指導すると云ふのでなく自らの信ずる所を行はしめて過ちに忠言を與ふるのみである。獨立自營を標語としていつ迄たつても命令の入用な店員に養生する事をさけて、指揮官になれる樣に敎育するのである。上西町の店には氏の漆器商時代からの店員の堀端市太郎氏がある。長男の修猷館出身の健兒君は家にあらず。他の店員と共に店に起居してゐる。大阪高商出の氏の甥の村上虎次郎君以下中等以上の敎育を受けた七名の靑年がゐる。夫人との間に三男四女あり和風常に家にみち家運益々さかえてゐる。

氏は閒暇を得れば書畫骨董の類の趣味三昧にふける。同好者と常盤館などに軸の持寄會をひらいては、俗塵をあらいおとしてゐる。又事の表面に立つをこのまない。自ら欲すれば容易に得らるゝ公職も氏はこれを極力避けた。然し友人のためには資力も體も時間もおしまず所謂帷幄の中に計をめぐらし相去る百里にして敵を倒す秘策をねる事がある。而も慈善公共事業には、隨分思ひきつて財產をなげ出すのである。極く最近の一例をあぐれば、一昨年鄕里櫻井町の小學校新築に際して、四千五百坪の敷地を買收して寄附した。この篤行に對して賢きあたりより紺綬褒章を授かるの光榮に浴した。而もこの敷地寄附の理由に、氏の全人格が彷彿してゐる。伊豫は山が多い。猫額大の土地は增加しゆく、人々を養ふに由ない。どうしても鄕里を出て活舞臺を廣く他に求めねばならぬ。外國ならいざ知らず我日本國中は隣家にひとしいこの思想は小學時代に於て根本から養成する必要

がある。他郷にあつて大事業をなしつゝある氏が、敷地を寄附したとあるとその一つの活きた例證を與へる事になり、郷里の子弟に對して刺戟劑になる。以前氏は錦を着て故郷に歸りその晩年を少年時にしたしんだ山川の中に送らうと考へてゐた。然し第二の故郷博多の方が友人知己が多い。其の愛着の爲に伊豫に歸る事を斷念した故に祖先の地に報恩の道を講じた。

又氏の子孫は、その祖父の父の生れた地をおとづれる事があらう。其時故郷に祖先を追憶する記念物がない時どんなに寂しい思ひを抱くだらう。然し學校敷地が氏の手によつて寄附されてゐる事を知ればその祖先の出所が明かになり又祖先もこんな事をしたんだと發奮する材料にもならう。この三つが學校敷地寄附の原因になつてゐるのである。

◇成功の原因

村上榮吉氏の今日ある理由として吾人は三つの原因を又擧げる事が出來る。その第一は意志の强い事、第二活動力の旺盛であつた事、第三營業に多分のオリヂナルな所があつたこと。氏は二十八歳にして結婚生活に入つた。氏はすきな酒を斷然と絕つて十一年間一滴も唇にあてなかつた。禁酒は言ひやすく實行又至難なるは人のよく知る所である。こゝに氏の意力の强さがほの見ゆる。氏は月賦販賣の故を以て常に四方に動いて座席あたゝまる暇がなく、大賣出し時など一週間二十時間の割の睡眠を取つたに過ぎなかつた。店員は主人は一體どこで眠るのだといぶかり、母堂などは餘り體を虐使するなと泣いて諫めた事があつた。氏は然し睡眠時間の二十時間は汽車の二等室のクツシヨンに横になつてゐたのである。隣の人に博多についたら起してくれと頼んでぐつすり寢込んでゐた。こゝに氏の活動的半面がのぞかれる。

吾人は此處に事業成功に何物が必要であるか氏の過去に學ぶ處が多い。最後に氏の今後が益々平穩に益々隆昌せん事を祈るのみである。

鍬を捨てゝ行商を續けて成功した

博多織商　上野熊太郎氏

◇田舍から福岡市へ

大山も要するに一握りの砂礫の堆積に外ならぬ。成功を又一日の勤勉の積り積つたものゝ外ではないのだ。勤勉が生んだ立志傳中の人上野熊太郎氏はこの好適例である。

氏は筑紫郡筑紫村下見に明治十六年九月一日生れた。嚴父の熊吉氏は大工職であつたが、片手間に又農業や農家相手に商業を營んでゐた。長男の熊太郎氏は尋常小學を中途にして、止して父を助けて家業の手助をしてゐた。

明治二十六年、博多で一旗あげさせんと熊吉氏は一家を引連れて、福岡市内に移住した。家では荒物煙草店を開業した氏は十歳を出るそこ〳〵で、家の助けに、當時の博多の習しの樣に豆腐の行商に出た雨の日も風の日も、雪降りにも氏は一日として休んだことなく、日々營々として行商にいそしんだのである。

◇轉々として住所をかはる

一家は萬町角の大丸屋の家（家賃壹圓五十錢）にゐた。やがて明治三十二年には、麹屋町に月十五圓の貸家を見出し煙草小賣をしたが、持續が出來ず、一年ばかりで、倉所町白水嘉助氏の隣りに移轉してゐる。勿論家は煙草店を出して居り、熊太郎氏は相變らず煙草の行商に出た。熊吉氏は對馬に出張して、諸色雜貨の註文を取つてゐた。

明治三十五年一家は下對馬小路に移轉したのである。

其の後家業は順調に進んだ。

然し丁度日露戰役が始まつてゐる。氏は召集されて滿洲の野に轉戰した。

戰はすんだが戰後に財界の大不況が襲つて來た。熊吉氏は煙草商の利益少なきを見て、斷然方向轉換を試み、明治四十一年九月下新川端町に店を張つて、博多織商を創業した。これ今日の上野博

多織店の始めである。

茲に於て、移轉毎に苦心してゐた一家は漸く安住の本據を見出したのである。

◇一歩一歩

熊吉氏が博多織商を開いた後も、熊太郎氏は煙草行商を續けてゐた。明治四十二年遂に父子合併して博多織商に精進する事になつた。が熊太郎氏は尙、行商である。勿論今回は博多織である。福岡市を中心として日歸りの出來る範圍を、かけめぐつた。然し熊吉氏が死去されるし、店は漸次繁昌して、最早店をあけて外に出る事が出來なくなつた。

氏が行商の成績を見ると氏の年毎の苦勞の程が察せられる。

卽ち十五の年は五百貳十圓を賣上げ六十五圓の利益を得、二十一の時は二千四百圓賣上げて二百五十圓の利益を得、二十六歳の折は、九千百七十圓の賣上げ、六百四十五圓の利益をあげてゐる。

この行商は氏が兵役に服した時と、出征した期間を除いて嚴密に一日と休んでゐないのである。その精勵振りは實に驚嘆に値する。

◇店頭に坐る

氏は愈々店主となつた。此の間彼は積極主義卽ち漸進主義、時間勞力經濟、薄利多賣主義を商店經營方針として、着々今日の大に至らしめたのである。

下新川端町の店舗には手頃な夏帶を物色してゐる多くの婦人客のなまめかしい間に、精氣滿面微笑を浮べながら謙抑な態度の彼の顏が見える。

成功とはいへないが、全く今日の私あるは。一面父の性格に省みた結果ですとは氏が常に人に語る所である。父君は執着心のない豪放な氣質が禍ひして、一つの仕事が工合が惡いと他の仕事へとよく商賣を換へをやつたから、氏は父君の性格の缺陷をよく省察して、その逆を行つた。一度かゝつた仕事は、是が非でも固守せねばやまぬ決心で、幾多襲來した苦境を切り拔けたのである。徒らに飛躍又飛躍と外面の體裁のみにとらはれて行く主義でなく、內容充實すれば次から次へと業務の擴張を計るのを商賣道の家訓としてゐる。

氏は綿密な計算的に陶冶された商人肌の頭と、健康な身體を惠まれて、ぐん〳〵と福博の一流店

界に突出して來た。現在では、年々巨額の賣上を示す、福博博多織商の指折である。

氏は大正八年太宰府に廣い地所を求めた。その隣地には縣の種禽所が設立されて居るから、氏も將來この地に上野養雞所を建てる計畫を有すると云ふ。勿論、日夜うまず商賣道に人の三倍五倍も働らいて來た氏には、老後、都會の雜音をさけた靜かな晩年の生活がしたはしいであらう。いづれ將來商店の營業は後つぎに讓り、自らは樂隱居として、時々店に來ては色々と注意し、以外は白色レグホンの輕快な動作を眺めて暮すつもりであらう。

ステップバイステップ、吾人はその適例を上野熊太郎氏に見る。

智の人櫛橋氏

▽元市會議員櫛橋岩太郎君を拉し來る。彼は博多人タイプの上乘なるもの、氣骨あつて酒脱、獨行力あつて機を捉ふるに敏、出でて市政界に馳驅すれば、其の智謀は確に黒幕の雄であるが近年政治道樂は身代を摺り減らす事を悟り、滅多な時以外は顏出しをせぬ。

△明治四十四年以後市議に三度當選油の乘つた頃は非政友の智囊として佐藤名市長を援け、隱然その懷刀として例の水道問題や何かで政友派の心膽を寒からしめたものだ。今では民政派福岡市部會の顧問格で、選擧の時など參謀に引出されるが、本人にとつては如何にも煩に堪へぬといふ達悟ぶり。政治を透して名利を求めぬ所に人物の味ひがある。

△彼は福岡生ゑぬきの人、福中を半途退學して東京に修學後、歸鄕して三圓五十錢の雇教員となり準教員、正教員と資格を得て春吉や吳服校に奉職して居たが、福中時代の友人等がドン〳〵上級學校に進むので「何糞ッ」と發奮し、發明の研究に猛烈なる意力を向けた。

△二十三歲の時以後、彼れにはいろ〳〵な發明がある、電氣自動遮斷器、火災盜難豫防器と云つた樣なもので、頭の緻密さが窺はれるが、彼れが果然打ち當つたのは廿八九歲の頃手を染めた櫛橋式机腰掛け類で、監獄の四人を四十人、自家の工場に八十人の大工を抱へてドン〳〵製造した位にその販路は擴がり、一擧にして現在の富を爲した。

△昔の「何糞ッ」が無ければ、今頃は小學校の古手として自他共に持て餘してゐたかも知れぬが猛然として其の意力を發揮した所に彼れの凡器に非ざる性格がある。此の意力は後年市政界にも發揮され非政友の陣營に櫛橋ありとなつたが、今や閑雲野鶴意を世塵と斷つて、靜かに老を養はんとするものゝ如し。こゝらが彼れの頭のよさ加減を示すものだらう。

△黒田家の家老立花屋敷あとに居をかまへて何者よりも僾されず三十數軒の貸家から上る家賃は昔の級友輩で月給取などをしてゐる連中を羨ませるものだらう。

△彼は世に謂ふ大成功家といふ程度の產ではあるまい。然し心中光風霽月で餘財身に過ぐるの境涯は「人」としての成功だ。其の家門に衆望多く常に春風の訪づるゝあるをやである。

役人生活から實業界に入り福岡市長になつた
博多取引所理事長　久世庸夫氏

◇順調な靑年時代

福岡政界の惑星その同志共に何者にも拘束せられずに、自ら抱く意見に殉じて市政界を濶歩してゐる久世庸夫氏は、確に近代的な呼吸に生きる、明るい政治家である。重厚にして而も油が乘れば口頭泡をとばす熱情を有してゐる。

因襲から拔け得ずに、古い殼を何處かにくつゝけてゐる市會議員の中に、久世氏の洒脫した風格と、開放的な明るさに接し、一抹の新鮮味を感ずるは、市民の喜びでもあり又誇りでもある。

久世氏の先祖は代々黒田侯の家臣、舊邸は城東の練兵場附近にあつた。中學は修猷館、熊本の高等學校を經て、東大獨法科明治三十三年の出身である。

熊本の五高は由來酒を好むの徒の集まる處、勉强なんかそつちのけで、チリンソバをかきこんで酒屋にかりた一升德利をぶらさげて寮に歸つては寢がけに一杯貴樣やれと云ふ調子であつた。

こんな級友に誘はれて、久世氏は酒に親しみはしても、決して蠻カラ組ではなかつた。むしろ板つけと稱する敎科書と首引した善良なる優等生組であつたらしい。東大では既に在學中大藏省入りが約束されてゐたので、卒業と共に大藏省屬官になりその後高文をパスして高等官正八位に列せられたわけである。大藏省は今も昔もかはりなく、官界の有爲の材の集まる所であり、大藏畑の人でなくては現代では首相株はつとまらぬと云はれてゐる程だから、久世氏の官界入りは門出榮えある性質のものであつた。

◇大藏省の役人から保險會社に入る

法學士樣の切れた時代若い大學出て間もなく廣島稅務管理局（現在は監督局と稱してゐる）の次席になつて地方下り、暫くして沖繩の管理局長になつて三ケ月母堂を伴はず蛇皮線の歌を聞いたがすぐ呼び歸されて、本省入りをした。圭角ある人物が官界の空氣に慊らないのは、今も昔も變りは

ない。當時明治三十五六年の大藏省には頭の方に古參連が頑張つてゐた。他省の若手がぐん〳〵拔擢されるのに、こゝではそんな模樣も見えなかつた。當時若槻氏や濱口氏なども、高利の金に苦しみながら、大藏省の役人をつとめて居た頃である。

片岡直溫氏の令孃の現夫人と結婚したのはこの大藏省の役人時代であつた。官界方面でも將來を囑望されてゐた一證左である。

しかし上がつかえてゐたし千や千四五百の收入では役人生活も樂ではない、しかも事業熱が一方に勃興しつゝある時代であつたから、久世氏はふらりと役人生活を去つて、實業界入を試みた。

當時片岡前商相は日本生命保險の社長をしてゐた關係上、其處の支配人の位置を占めた。しかし間もなく大藏省では老人組がとつと後進の道を開いたので役人を續けてゐた方が現在幸福(?)であつたかも知れぬなど、久世氏は微笑することがある。生命保險に關係してゐたのは滿十五ケ年丁度引退したのが大正八年である。

◇福岡市政と久世氏

其の時福岡市長が空席であり、鄕黨出身の適當の人物を物色してゐた折で、直に久世氏に白羽の矢が立ち、福岡に引張つてこられたのである。現在の邸宅は當時求められたものである。

氏が民政黨に近づきになつたのはその舅直溫氏との關係である市長の任期をさつぱり勤めあけると、すぐ市會に打つて出で議長の椅子を占め、又一方博多取引所の理事長に就任し、現在第二期を務めてゐる。

昭和三年春の衆議院の總選擧には、民政黨に據つて立候補した。しかし吉安、八尋が馳せ參ずる中野派と、王丸氏が支持する河波氏あり、池見、木原の諸氏を擁する久世派との三者の間に越ゆべからざる感情の溝が出來てしまつた。中野氏の專橫を好まざるの徒も、いつか久世氏の許に集まり來つて、猛運動をつゞけたが、久世氏は何分福岡にきづき得た根據が牢として拔くべからずといふ程度のものでなく、不幸落選の已むなきに至つた。

民政黨では極力久世氏を慰撫して久世氏を復黨せしめたことは周知の事實である。しかし中野氏の意志によつて動く民政黨の黨議に服して行かねばならぬことは、久世氏としては出來得べきことではない。要するに三頭政治の結末は、他の二人が一人の前にひざまづくより他仕方がない。それ

が不快であれば、決然立つて自己の信念の命ずるまゝに従つて、行動するの態度に出づるのみである。

氏をめぐる青年達は、大民黨を組織して、久世氏をその顧問に戴き、活動を開始した。政黨政治が結局に於て少數の専制以外にあり得ないのは理論を超越したる事實である。しからば圓熟したる確たる意見の所有者が、自らと志を同じくする者と共に意見を異にする者に對して立つといふことばしか有るべきである。

特に市の自治體に於ける政黨臭の誇示に就ては、民政と久世氏の意見は正反對にあり、黨よりも何よりも仕事の成就に重心を置いてゐるのが久世氏だから、正に氷炭相容れざるも甚しいと云はねばならぬ。久世氏と民政黨の絶縁は要するに時の問題である。

氏の好酒癖は隨分有名である。それは學生時代からのもので現在では極力酒を避けてビールにしてゐると聞く。毎朝微温湯に一時間位ひたつて下男に體を摩察してもらひゆつくりと湯殿で十何種の新聞に目を通す奇習がある。氏は毛の着物を極度にいむから、自然と皮膚のたんれんに、この溫浴をはじめたと。

久世氏はやはり國家の選良ならずんば默し得ぬ何者かゞある筈である。市長時代と現在にはその對人態度に雲泥の差があるとよく氏を知る人は云ふ。政友、民政に屬して居ない者が集まれば中野宮川と鼎立して勢力を獲得することは困難であらうか。まして何者にも拘束せられることを好まない、青年の群は、常に自由の立場にあるに於てをやである。氏は四年春の市會改選後、政民提携の奇現象の所産として議長の椅子を去り、平議員の閑地に就いた、徐ろに今後を劃策するに適するでらう。

無給の丁稚から書籍店として
大成功した

積文館主　八木外茂雄氏

山積する書籍の中に沒頭する學者の生活が、必ずしも現代人の理想であるとは限らないが、世の指導原理が、かれ等が並べる細字の羅列の中から生れ出ることは、否み得ない實際である。書は然し如何なる種類のものでも學究のみの必要品ではない。ルソーの民約論は僅かに明治初期にほんの三四の先覺者と中江兆民によつて讀破せられたに過ぎまい。しかし今その民約論に比すべきマルクス、エンゲルス全集の如き、工場にハンマーにぎる二十代の青年に、限りなく讀まれてゐる。文化の傳波、こゝにひそかに思ひを至す時、書籍商の力がそのかげに大ひに働いてゐることを見逃すことはできない。福岡は九州文化の中心で、數へ來れば市內書籍商數は實に枚擧にいとまない程であるが、東中洲積文館、中島金文堂支店、呉服町の丸善はあたかも王侯の如く群小に臨んで居る。東中洲の盛り場に四時人が店頭に一ぱい集まつてゐる積文館が、如何にして今日に至つたかを檢討すれば盡きざる事業成功秘訣の妙味が湧いてゐる。積文館主八木外茂雄氏は、徹頭徹尾體による活動の人である。努力と書籍業經營に興味と趣味を感じ得る人である。然も金錢の支拂について當今の商人に類を見ざる潔癖を有してゐる。氏の成功のかげには以上の三者と元子夫人の內助が語られねばならぬ。

◇大阪積善館の丁稚に入る

八木氏は加賀百萬石の城下金澤御徒町の生れ、小學校は此の地で終へて、大阪商業學校に學び、卒業後クラスメートが銀行官廳會社に就職して新らしい洋服を誇るのに氏は心に期する處あり、大阪積善館に無給の丁稚として入つた。當時積善館は出版部小賣部があり廣島、博多に支店を有してゐた。氏の性質と勤勉の風を見込んだ主人は、氏をえらんで將來書籍業者に最も有望なる福岡の支店詰たらしめたのである。當時の支店長は本店主人の弟で次は現東京市において出版業者間に羽振を利かしてゐる辻木氏現大阪積善館支配人津倉氏この三代の支店長に仕へる內八木氏は庶務主任、支店長代理、津倉氏が福岡を去ると八木氏は支店長としてその後を襲つた。この頃の積善館は現今

の金文堂の家である。

◇事業を中心とする夫婦愛

既に氏は福岡中の得意間に絶大の好評を受けてゐた。本店の方では勿論その精勤振が知られて居る。この頃福岡高等小學校長の媒介によつて樋口甚三郎氏の令妹元子さんと結婚し洲崎に居を構へた。この頃月俸二十圓であつた。金額から見れば銀行あたりの給仕よりも少いが、價値から云へば現今の二百圓に相當するだらう。その後本店の積善館は事業變更をなし、出版専門の株式會社となつた。故に小賣部の廢止となり、博多支店を閉鎖するの止むなきに至つた。こゝに於て支店の店舗は久留米の菊竹金文堂に賣り、商品及顧客は八木氏が引受て代價は年賦償還をすることに約束した。當時東中洲に於て、九州各縣の聯合共進會がすんで電車が開通したが、まだ繁華だと云ふ程度に至つて居なかつた。この電車通りに劇場の背景などに綸筆を取つて居た前田と云ふ人の家を現九州劇場の深田氏を介して買收し書店を開き舊主の名の積善の積を取り積文館と改稱したのが現今の店舗である。

この積文館初期の活動ほど、事業を中心とする夫婦愛の發露を、如實に示すものはない。八木氏は朝となく夕となく博多福岡の隅々までも外交に出づれば、元子夫人は店頭に立つて多くの店員を指圖し、客に接する又親切を極めて、積文館の人氣はいやが上に高くなり、繁昌は日々に見へてきた。遂に大正十一年を以て完全に積善館に對する年賦の義務を終了した。大正十二年の正月は始めて一本立のすが〲しい初日の出が八木氏に拜せられた譯である。琴瑟相和する夫妻の奮闘振りは、雜誌現代に發表されて美名一躍國中にうたはるゝに至つた。

◇中洲大火の灰燼の中に甦る

天がこのまゝに幸運を八木氏にめぐんだならば、八木氏の平常を描出すべき好材料が消失するであらう。この數年來の夫妻の努力が報ひられて自らの店舗であるとの輝かしい希望に包まれた積文館は、その正月の十二日の所謂中洲の大火に見舞はるゝの悲惨事が勃發したのである。松粟屋に火がうつた頃、積文館では荷物を現在の本興座の處に運んで居たが電車通をへだてゝ居ること故類燒の心配はない。火の子を注意して居れば大丈夫だと、考へて、再び家に運んで家人は二階に上がつて

火の子を專心注意して居た。しかるに松葉屋から飛んで來た火のついた反物が中央亭の窓から屋內に入り盛んに燃えあかり當時塀一重であつた積文館に火が吹き込んで來た。家人が氣付いた頃は既に階下は火の海になつて居た。實に箸一本も殘さぬ丸燒けに主人夫妻店員涙にくれて呆然として火柱のたをれるのをながめた。この大火は久世市長の英斷による水道ホースの使用により、玉川と電話局に食ひとめられたが。煙る燒野に半世、一世、尙數代の努力を灰燼に歸せしめた人々は、一月の寒空に如何なる感慨を抱いたか。聞くもの同情の涙禁ずる能はないものであらう。積文館の八木氏は、大火の後カフエーロンドンに假事務所を西中洲の大同生命の處に事務室を置き東京、大阪、九州各地の書店に電報を飛ばし書籍の註文をなし、燒け跡をかたづけ殘煙のなかに、のみと槌の音を響かした。二日後には積文館のみが孤然として五間に八間の店を開いた。一週間の後には各地の仕入先より送りきたつた書籍は、八阪運輸の倉庫に一杯になつたと云ふ。中洲の昔日を偲んでこの燒野を見舞つた人々は、煙の中に逸早く甦生の產聲をあげた積文館の姿を見出して、一種言ひしれぬ喜びと、元氣を與へられて、別れし愛人に會ふ如きなつかしみを抱きながら書籍店に立入つた。當時の新聞紙は筆をそろへて八木氏の機敏さ、平常の用意を譽めたゝへたものである。

◇八木氏の日常生活

こゝに八木氏の日頃の生活が明かになつてくる。卽ち店員の小西長吉氏の如き年來の御恩に報ずべきは今日であると、俸給を辭退して身體の奉仕を申いで、他の店員も之にならつた。夫妻は唯感泣するのみだつた。八木氏は日常の生活に於て決して店員と食を異にする事がなかつた。小僧の野菜も八木氏の膳も何等差異がなかつた。特別に珍味が八木氏のみに與へられると頗る不機嫌であると云ふ。

八木氏は蓄財に長じた人であつた。無駄が生活から一切はぶかれて居た。仕入先きに對する支拂は最もよく、日本出版協會は日本全國に於ける支拂の綺麗な四書店の隨一に積文館をあげて居る。一本の注文電報で、倉庫一杯の書籍が送つてくる處に如何に出版業者間に氏が絕大の信用を有するかゞ判る。

自らこの中洲の大火の災害を被つた年の九月が東京の大震災の時であつた。仕入れ先の出版業者は着のみ着のまゝで燒き出された。かつては堂々たる紳士が、印刹天で集金に來福する者日々四五

人を下らない八木氏はこれ等の不幸な人々に痛く同情し、支拂を完全にすまし、尙多分の見舞金を添加した。氏は自ら丸焼けにあひながら他に物質的の同情が出來たのに、日頃如何に多くの貯蓄をして居たかゞ判る。

その後今日に至るまで、業務は日々に盛になるばかりである。庶務部の小西氏は二十年勤續佐藤つると云ふ人も十八年、他に十年勤續の人が三人ある。販賣部は八木氏夫人元子さんの令兄樋口甚三郎氏が腕を振るひ、大學方面及び館內書籍整理は八木氏長女茂子さんの養子八木勳氏が擔當して居る。

勳氏は朝倉郡甘木の產で年小にして小店員に入りこゝで腕を磨いた人、八木氏は仕入れ經濟に專心し陣容愈々と、なつて、その將來は期して待つべきのみである。前述せる如く八木氏は別に趣味と云ふほどのものはない。しかし加賀の產加賀は金春流の謠の本場である。この方面ではやはり鄉土の影響は爭はれず、氏は觀世流の堂に入つて居ると云ふ。現在は福岡縣書籍商の組合長を勤めて居る、尙、氏を石部金石と稱するものもあるが、氏の奮鬪の跡を知らぬ、又性格を知らぬ人の云ふ言であつて一旦氏の信用を得れば親子の及ばぬ處がある。

懸賞に入選し世界的な藝術寫眞師になつた
藝術家　安本江陽氏

◇先天的に寫眞が好き

福岡が生んだ藝術寫眞家は安本江陽氏を擧ぐればそれで充分である。何事も苦行によつてのみむくひらるゝとは云ふものゝ藝術のみは先天的に豐かなる才分を抱いて居なければ駄目である。英國ロンドンの萬國寫眞サロンに幾囘となく入選し獨逸の寫眞雜誌などは氏の手になる日本風景風俗が安本の名の下に紹介されてゐる。燈臺元暗し藏本町の三階層の關西きつての大寫眞館主が當の本人である事はほかの方面にはあまり多く知られてゐない。

佛國のエブロニスが寫眞を發見して昭和二年が百年に當つてゐる。其の間機械技術方面に驚嘆すべき長足の發展を示してゐる。然し現今では機械の時代は去つた。技術の時代も去つた。最後にカ

メラ握る人の頭の時代がきたと云はれてゐる。

シヤツターを握る一瞬の技術者の心意と焦點が問題であつて、ウニリトレンズの使用によるほんやりとした寫眞が藝術的であると許せられたのも過去の夢になつてしまつた。

安本氏は學校時代より寫眞はすきであつた。然し未だ今日あるを胸に描いた事はなかつた。明治四十三年今日の縣廳の附近で共進會が開催せられた事があつた。丁度その時自然すきの安本氏は郊外を散歩した。ふと見ると農家の小屋の前に一老人が草鞋を編んでゐた。陽光を浴びた老顔にはもう幾筋か藁を動かせば、一足の草鞋が出來る。出來あがれば晩の燗前にありつけるぞ、と云ふ喜びは白髪の二本にゆるんだ瞼にもあらはれてゐる。これを撮りたい慾望が強く氏に動いた、氏は一散に家に歸りカメラを持ちだして何しらぬ顔で斷りなしに二三枚パチリとやつた。

原像して見てその中に安本氏の其の時の氣分にぴつたりあつたものが一枚あつた。其の一枚を共進會のアマチアの寫眞展覽會に出品した。結果は一等當選の銀牌を受けた。恐らくこれが氏の寫眞界に乘出した一大動機であらう。更に氏をして寫眞に自信を持つに至らしめた事がある。それは英國インペリアル會社主催の日本風俗寫眞展覽會が東京に開かれて、氏は東公園の龜山銅像の高所より瞰下の運動會を取つて、出品して二等の純金牌を獲得した。この後愈々寫眞で一生を立やうと四圍の反對をかへり見ず、大正二年小さい寫眞館を開業した。

◇開業當時豆腐屋を羨む

天才も世に認められないでは仕方がない。八日間來客がなく全く落膽してラツパ吹いて行商する豆腐屋を羨やましがつたり、二十錢の金策を附近の駄菓子屋に申込んだりした時代が續いた。寫眞業では遊廓と同樣注文を取りあるくわけにゆかぬ。積極的の營業法としては出張するより他に良法がない。氏は自轉車を月賦で買つてカメラを後にむすび付けて志免方面の堰の竣工を振りだしに出張を始めた。

氏は哲人の風格を有してゐる靜かな笑ひをたゝへると何人にも無限の親しみを覺へしめる長所があるこの人格とその腕は一度氏の手をわづらはしたものに、忘れ難い印象を與へて、すぐ顧客になつてしまふ。この故にか出張が度びかさなるに從つて店に訪ねる客も多くなつた。

反面氏の技術への精進は益々嚴を加へて行つた。

藝術家　安本江陽氏

◇「蟲の聲」寫眞サロンに入選

華やかではあるが深味が乏しい米國の斯界の傾向にあき足らず、研究は英國の流派に行つた。然しそれは我が帝展派と同じく上品にしとやかであるが、尚滿足が出來ない。そして深刻な獨逸の作風に魅せられて行つた。

毎年英國のロンドンに始めて人物の「蟲の聲」と題して出品した。堂々世界一流に互して當選の榮を擔つた斯界に、世界に尚世界的なるが故に日本的になつて福岡に安本ありの名を普ねく知らしめたのである。名ある新進はその名作ご自信するものを萬國サロンに出品するが、入選するものは實に小數である。其後氏の作は幾囘となく入選した。

◇氏の信念と生活ぶり

、曾て氏の身邊からいつの間にか遠ざかつた親族も事毎に氏の家に訪づれてくる様になつた。門生は氏の敎化に感じて一心同體になつて働き大正十二年には一萬六千圓で隣接した敷地を求め、今日の三階の建物を一ヶ月で竣工せしめた。一方氏自らの運動のため又門生の爲の警固にテニスコートを設けるに至つた。

氏は今日ある原因に門生の衷心よりの協力を數へてゐる。門生の中に自ら飛びこんで自ら範を示さねばならぬと力說する。

氏は今日尚午前四時には起床するそして一通り必ず門生の其始日むべき仕事に自ら手をつける。午後は早く床につく。それは一面に夜遊びにさそはるゝ機會を作らぬためでもあらうが、早朝の仕事に關する都合によるのであらう。門生は絕對單獨外出禁止である。然し主人自らが單獨に外出する事がない。映畫にも觀劇にも必ず門生の內の一人か家族の人を伴ふのが常である。現在九人を養成してゐる。然し尚困窮に育ち寫眞界に身を立て樣と云ふ固い決心のある少年があればいつでも世話したい意嚮がある。

氏は腕の圓熟ご共に、物質的にも豐かになつて現今では押しに押されぬ斯界の成功家である。然し些少も其成功を誇る色が見えない。安本氏のスタジオをくゞる人は態度服裝が如何に貧弱な人にも堂々たる風采の人ご異ならず極めて親切に遇せらるゝここに、非常に愉快な感情を抱くに相違ない。

氏は全ての人は成功の機會を惠まれてゐると信じてゐる、今日は布衣を纒ふてもいつか錦衣を着けうべき將來があると信じてゐる。氏が若くしてカメラをすてゝ豆腐屋を始め樣とした過去を回想し、現在を比較するならば、この信念の湧きゝたつた所以が明かである。しかし又氏がカメラ藝術に精進する結果である事が强く動いてゐる事が知られる。

◇カメラの奥に苦惱する心

印畫に現るゝ世界は、有が儘の自然の姿であらねばならぬ。自然の心が滲みでなくてはならぬ。何者によつてこの情趣が表現する事が出來やう。作者が自然に參する心境の所有者でなくてはならぬ。何者にもいつも敬虔な精神の所有者でなくて、自然の琴線にどうして觸れる事が出來やう。

氏の思想態度は究竟この自然に敬虔なる心の反響である。

信仰がなければ駄目ですとは、氏の言葉である。信仰とは單に佛像下にひざまづくのではあるまい。又は神の名を唱える事のみではない。何者にも亂されず。何人の前にも何者の前にもカメラを通じて中心を掴み得る不動の信念であらう。

一般は不景氣と悲鳴をあげてゐる時安本氏の事業はぐん〳〵延んで行つた。取引所及大商店は兎角、一般では努力如何がすなはち景氣不景氣のバロメーターとは氏の一の信條である。氏の生活は終始一律に寫眞業を中心とした勤勞主義である。早朝より就寢迄、何時何分より何時迄は、何處ゝ何時から何時迄が在宅と時間割の如く働かねばならぬ。寸暇もない。顧客の處に出張撮影しては次の約束の時間に支障が出來ると仕事を終了しないでも歸らねばならぬ事が屢々ある。又僅かな寫眞料の收入がある仕事でも時間の都合では、より高い金額を拂つて自動車で飛んでゆかねばならぬ時がある。しかしこんな事は事業のみを心願さする氏には何でもない事であらう。

又いつかサロン出品の爲め「春の雨」と題する作品に沒頭した。

雨の夜、京都の輕いデカタン氣分にひたつた三條大橋の橋側の燈光が細雨にあたる明るさを表さんとしたのである。早朝に乾板に向つた時どうしてもそれより受くる印象にその氣分が表はれてゐない。現はそうと努力しても又その鉛筆の動かした方がない。幾夜も幾夜も雨の日に街頭に當時の氣分を探し求めた。しかしその感情は再び氏の胸に歸らぬ者の樣であつた。未完成の作品の前にながく立つて氏は苦悶せざるを得なかつた。

或夜ふと眼がさむるゝ外に雨の音がほつ〳〵と聞えてゐる。或豫感にふれて跳ね起きた氏は、窓を開いた。冷たい徴雨が霧の様に氏の頰に觸れる。時計を見れば二時である。氏は直に外に出た。不思議に街燈と云ふ街燈は皆撮影當時の氣分が出てゐる。銀行のにも交番所のにも電光を受くる微粒の雨が輕い愉快さに躍つてゐた。氏は直にスタヂオに歸つてその夜その作品を完成した。

一枚の印畫にかく苦心が拂はれてこそ、今日の安本氏が有得たのであらう。この仕事熱心な氏は家の事特に財政に對しては極めて無頓着である。一切は夫人の任務で稅務署のお役人が調査に來て月末の帳尻をして何月は何程の收入になつて居ますよとの話。安本氏の方でそうですかと返事する有樣である。稅務署の語る處では關西で寫眞業者間に安本氏程營業收益稅を納めるものはないとの話である。

氏の顧客方面は帝國大學で一年間一萬二三千枚に及ぶ醫學。上の解剖寫眞など學術的なのも多く氏の手によるものである。次は商人縣廳などの役所筋である三階には二つのスタヂオを有し氣が向けば一方に應接室に設計したスタヂオで藝術味豐かな寫眞を作る。恐らく一つの寫眞館で二つのスタヂオを有する處は他館にあるまい。

氏の技術と人格の現れは、福岡縣民の等しく光榮とする主基齋田行事の撮影を多數の運動者あつたにかゝはらず我關せず焉とした態度を持して居た氏に宮內省より下命あつたことに見る事が出來る。氏は遂に精根の限りを盡し、藝術の香り高い主基齋田記念寫眞帖を完成し宮中を始め關係諸官廳に納め名寫眞師の名を擅にした。氏は現に東京寫眞硏究會員全九州寫眞聯盟常任委員、日本光畫協會同人福岡光影會代表であり、全關西寫眞組合副會長二回を務め斯道發展に努力してゐることも大である。

氏は藝術の奧堂にカメラを持つていそしむことを永遠に續けるであらう、我々が氏を有することはやはり一つの大きな誇りである。

九州持下りから全國的な名織家になつた
博多織元　松居元右衛門氏

古へに宗室宗湛らの傑商を生んだ博多は、博多小女郎涙枕の悲しき物語りを殘したまゝ、藩政に變り以來筑紫の一港に過ぎず、進取の氣風は何處かへ消去つて博多の地質其のものゝ如く、雨降れば直に乾き風吹けば砂塵とぶ博多氣風が、いつの間にか去つた。そして活躍の範圍も漸次に縮少せられて行つた。

關東震災の報至つたとき、災害と直接交渉を持つた博多人が何人あつたろうか。一人は太田淸藏氏、もう一人それは博多織商界をリードしてゐる松居元右衛門氏であつた。再び新博多人の風格が甦りつゝある。活舞臺を廣く國中に求むるの太田氏は旣に紹介した、今は松居氏の人物を想ひたい。

◇近州と松居家

松居織工場の先代、松居元右衛門氏に、現在の博多織界に覇權を樹立し、松居の第一歩が始まつてゐる。もつと遡るならば遠き先祖の陰德に今日盛運の基があるかも知れない。

松居家は近江の出、琵琶湖畔は京洛に近い故に、諸大名の臺所と稱せられた。苛斂誅求にさいなまれてゐた近江人は、天秤棒を相手にして、天下足跡至らぬ處なき迄に行商し、以て一つの生活の安全辨を見出だした。松居の家は代々近江神崎郡北五個庄町大字龍田の住、遠い祖先は油屋行商をやつて、一日道に落ちて居た十兩近くの金額の入つた財布を拾つた。その人は財布を天秤棒の一端に結び付けて、失つた持主をさがし求めた。落し主は姫路の旅僧、諸所で集めた寺院建立のための寄附金の一部分が、この財布であつた。出會つた二人は大津の宿に來つて。松居氏は內を改めて僧に渡し、度々の僧の申出にかゝはらず、固く謝禮金を辭した。僧は益々松居氏の高潔な風格を喜び金員を以て謝禮するの無意義を知り、子孫繁昌のために永代經を以て氏の好意に報ゆる事にした。其の後にも松居家からは後代小學讀本に讀まれた典型的な敎養ある義理固い計數的な風格近江商人を出してゐる。

◇先代元右衛門氏

先代元右衛門氏の時代松居家は呉服商を營なんだ。九州持下りと稱して京阪地方の流行品を買つて博多に來り、歸りには博多織を買入れて又京阪地方に賣さばき、自然博多織の風趣を博多人以上に覺知し精通して居た。然るに明治十年の役に、兵の屯所が博多に設けられた。その土產物を見込んで粗製濫造は其の極に達して、筑前博多が粗惡品の代名詞の如くなつて、戰端をさまるや、さきの需要は著しく減じ、斯業者は販路狹塞の極に陷りて、その儘すゝめば博多織の名が全く世人に顧みられざるにいたるに非ざるかと憂へられた。松居氏は自ら親める博多織の名聲挽回の爲めに、博多人を鞭韃して品質の改善と弊害の矯正を絕叫して、明治十六年の十月自ら機業家として、博多に斯業改良の旗を高く揭げた。

創業以來所謂他國者の爲め、同業者の白眼の中に、よりよく染色、意匠に天才的な獨創的な改良を加へ、幾多の人材を各地に派し、長をとりつゝ、我が缺點をのぞき、博多織の面目を一新し、永遠の策を立て完全に博多織界の指導者になつた。

機業は然し危險率が高い。五年目每に恐慌が襲つた。しかし無事にその難關を切り拔け職工と共に働らき食を共にし、所謂旦那氣分を微塵も藏せず、ある時は庭に角力をし職工操縱の妙を極め七里和尙の法話を以て荒める職工を柔らげた。松居の土臺を最早拔くべからざる强固なものとして、安心の出來る順調な業務の發展の道を辿らしめた。繁昌の五年を送つて、明治三十一年將來の家運の隆盛を信じつゝ瞑目した。

◇當代名織家に伍す

當主元右衛門氏は當時二十三歲。幼名は常次郎と稱し、明治九年の生れ、明治十六年より先代と共に博多に下り、小學校に學び、二十三年福岡高等小學校を卒業し、後京都市安井金三郎氏の經營するオリエンタルホールに學び、明治二十六年英漢數の學科を修め、後福岡市にあつて先代を助けてゐた。

先代が他界すると、世人は松居の最後が來たと云ひふらした。當主は先述せる如く僅かに二十三歲、一種の輕視の眼を以て松居に對する者も出づるに至つた。しかれども店內職工、當主皆協力一

致血の滲む忍耐の結果を以て松居の土臺には微動だに起らなかつた。

織物に對する熱心は、その製作品にて超然と他を抜いた。

名聲次第に加はり、明治三十三年には滋賀縣報徳會長に僉され、三十八年には博多織同業組合長に選ばれ、大正二年以來博多商業會議所議員の公職を奉して、福岡市商工業發展に盡瘁した。

其他實業關係の公職は指を屈するにいとまない程である。

西陣足利桐生などの機業地の、明治大正を通じて松居と肩をならべて來た名織家は多く破産し、又は代變つて唯獨り松居のみが博多に名織家の名を擅にしてゐるのは、一つの偉觀であるが、松居氏に取つてはその僚友の敗亡に、一種の物の哀れを感ぜずには居られまい。しかし近江商人の强味は、この點に遺憾なく發揮せられてゐる。即ち名織家の沒落が、小賣商卸商に販路の實權を握られ、販賣人に製造家が押へられてゐる事に原因するを看取して、自らの采配する販賣網を張つた。

今其の陣容を見るに、

本　店　福岡市春吉第一工場　　福岡市住吉蓑島第二工場

販賣所　福岡市東中洲

東京支店　日本橋區新材木町　店員十名

京都支店　京都市東洞院御池　店員二十四名

大阪支店　大阪市東區木町　店員三十二名

が中心となつてゐる。

◇博多織界をリードす

外部の擴張と共に、内部にも現代的な科學的組織を採用して、完全に分業化してゐる。即ち明治十六年の創業以來、二十五年明治四十一年にして、個人營業は松居元右衛門、豊三郎、庄治郎三氏の合名會社となり、大正八年には、松居家一族及び使用人の出資による株式組織に變更し、勞資協調の模範を示した。

意匠部、染色部、撚糸工場、力織機部の整然たるものあり、特に意匠部ばあく迄博多織の古典趣味を捨てず、又中央の流行に後れず、しかも博多織の模範として獨創的な趣味を出して、他の追從を絶對に許さない。意匠部の中樞をなす菅善三郎氏はフランスに留學せる事あり。博多織の流行柄か春

博多織元　松居元右衛門氏

吉の松居の意匠部に發する事は痛快である。

明治三十年十七萬二千六百八十三圓の生産高を示してゐた松居は、昭和二年に於いてはその十倍百八十七萬二千八百七圓の高額の賣上げを示した。

聖上始め各皇族殿下の福岡に御立寄りがあれば、必ず何等の交渉が松居氏との間に生ずる。九重の奥深き宮居に、各宮家に、松居の丸帶、袴地、男帶を献じ御買上げの光榮に浴せし事今日迄六十七回、各地に開催された博覧會、共進會に於いて受賞する八十九回に及ぶ。

常に盛況は續かない。大正九年のパニックにば松居、紙與、木梨と大打撃をうけた筆頭にあげられ、大正十二年の正月には松葉屋の大火あり、その九月には關東の大震災あつて東京支店の全滅があり。重ね重ねの不幸が見舞つた。若し松居氏が普通の腕の人であつたら、遠い昔、その名は或は世人に忘れられてゐたかも知れぬ。しかし事實は正に反對で、止まる處を知らず事業は發展して、松居の全國屈指の名機屋の隨一たるに何等變化もない。

◇松居を守る人々

當主元右衛門氏は東京大阪京都から松居全部を統御して、各地を巡り席の温まる間なく、次弟豐三郎氏は自ら創設した福岡最初のデパート松葉屋の燒失後、柳河に書籍商を營み、三弟庄次郎氏は春吉の本店に四十年勤續の中村支配人のたすけを得共に參謀本部格で福岡の店を總支配してゐる、庄次郎氏は本年商工會議所議員に選ばれ常議員になつた。元右衛門氏の令息與一氏は高商を經て京大經濟部を卒業し松居の各部を二ケ月づゝ實務見習しかたはら大學院に席を置いてゐる。從業員二百九十名四十年以上勤續一名（中村支配人）三十年以上三名、二十五年以上は一、二十年以上七名、十五年以上一、十年以上二十七名、五年以上五十四名を數へて居り、この事實を以て見るに、事務員職工が如何に優遇されて居るか、窺ひ知ることが出來る。

支配人中村新太郎氏は近江の人當主と同年生れ長らく京都支店にあり古代織物の蒐集を以て知られてゐる。古代織物よりは最近博多物産に加はり名譽嘖々たる涼しを發案し、その名付親である。氏のもう一つ松居に對し、又染色界に對する大貢献は漆染色による防水作用の發見である。

漆染色により將來に於いて、博多織は防水作用あり、博多涼しはあせしまずと云ふが其の特性に數へらるゝ日がくるであらう。中村氏がこれを發見した動機は、三十六七年前にある。色彩に一種

博多織元　松居元右衛門氏

の滋味を出さんとして、染料に漆の使用を思ひ立つたが、遂に成功しなかつた。然しこの希望は一日も氏の腦裡から消えなかつた。一昨年八月九大應用化學の織田博士に謀り、その學理を借り五年前發見せられたウルシ分解を應用し、中村氏の經驗を加へ染色法を完備し遂に、滋味を出す以上に防水作用ある事を發見しその程度はゴム引や藥品を使用するよりも、最も完全なるを知り、專賣特許をうけた。その製品が廣く用ひらるゝに至れば片袖濡れても悋氣するなゝどの歌がこの世界から消えうせるご許されてゐる。

曠古の御大典を迎へた昨年は松居工場では四つの獻上品を製作した。縣よりは齋國模型の被ひ六尺五寸に八尺五寸の織物が其の一、市獻上の衝立使用色三百八十種紋紙十三萬八千、晝夜兼行して百二十餘日をついやし、製作を終えたのが其の二、貴族院議員麻生太吉氏の獻上の六尺平方のテーブル掛けがその三、福岡村町長の獻上のアルバム表紙がその四である。又多年斯界に盡瘁せる功績により御大典に際して、かしこきあたりより綠綬褒章下賜の恩命に浴した。元右衞門氏及び一家從業員一同聖恩に感激し、將來益々斯界の發達に努力せんことを決心した。

皇室御用を務むるは、我職人の最大の名譽と信ずる處である。今傳統的な博多織界を代表して、稍もすれば人絹に壓せられんとする機界をば、生絹の風格を强調することによつて防ぎ、大衆的にゆきづまらんとすれば、博多涼し防水布を發見して、局面打破をはかりしが如く、將來においても吾人は博多織の進歩發展を多く、松居工場の活動に期待するものである。

三つの信條を以て躍進する
三井物產　松本榮五郎氏

◇春の若草の樣な生ひ立

本書に於て多くの場合、身を艱苦の內に起して、運命を開拓していつた人を紹介して來た。松杉が酷寒の中に尙青く梅が白雪を被りながら春光にあつて綻びそこに始めて天地微笑む時節がくる樣に、本書に於ても亦立志傳中の中に春の若草の樣にすい〳〵のびて立身の道をたどつた人の跡を見るのは、又曲折ある古松の中に杉の大木を見出す如く、一種の興味なきものでもない。こゝにその代表として松本榮五郎氏を紹介せんとするものである。

松本榮五郎氏は、明治二十一年六月二十四日に生れた。所は糸島郡周船寺である。嚴父は松本俊良と稱して家は代々福岡の藩臣である。榮五郎氏は俊良氏の五男である。糸島は又山紫水明幼時を自然と共に送らしめて英才を育むに最適の地である。氏の小學校代は平穩であつた。近隣の兒童と共に、村の敎師の元に通ひ何等他と異つた處はなかつた。明治三十四年三月、氏は福岡の中學修猷館に入學したのである。

明治三十九年三月中學を卒業し熊本の第五高等學校に學んだ。熊本は又男性的な氣分を養ふにふさはしい森の都である。日露戰の直後は、國民が戰勝の榮に醉痴れた時代である。然し若い學徒は決してそうではなかつた。愈々展開されてくる日本の將來が、如何なる姿を以て現はるゝが、充分明かに見きはめがついたに相違ない。

當時は法科萬能官吏の天下であつた。龍南の寮に又下宿に、靜かに勉學にいそしんだ氏は、友人が皆法律科を希望した時、經濟科入學を以つて目的とした。三年の高校生活を終つて、氏は直に東大の經濟科に入學したのである。實業時代の黎明期に、氏がこの科をえらんだのは、やはり一種の達見に相違ない。

五高は明治四十五年卒業、東京帝大入學は大正元年七月大正五年が卒業である。

◇三井物産入社と其の活動

當時內務省が法科の秀才を集めてゐた樣に、三井物産は經濟方面の新智識を集めたのである。歐洲の大戰が酣はな時である。

三井物産はエム、ビー、ケイの社旗の元に、南阿に南米に歐洲に北米に印度に支那に、世界の一流大會社を後に瞠若たらしめて。華々しい活動を續けてゐたのだ。三井家の利益の七割を物産が稼いだと言はれたのもこの時代である。北米テキサスの綿の總買ひ占めや、ジャバの砂糖を鈴木と共に買占めてファストイズベストを信條とするヤンキーをアツと言はせた事もある。

この時代三井物産に色々のつでをたどつて職を求むる者新法學士が百五十名餘もあつた。然も十五名を採用するのである。松本氏は名譽ある十五名の內に入つたのである。

勿論今日の如く滿鐵三名の採用に三百名の志願者があるのに比すれば、隨分樂の樣ではあるが當時の學士はいくらあつても足りない時代に十倍の志願者が集まるなど異數であつたに相違ない。

氏は本社詰にされた。

先述した樣に歐洲戰亂裡の三井物産の活動は全世界的であつたが、軍需品中の金物の部が物産に創設せられた。

製鐵業は國內至る處に起り小川の底の古釘さへも金になる時代であつた。古物屋の鐵屑も綺麗になつて貨車は赤錆を運んだ。

松本氏は物産の銅鐵銑鐵の輸出入部に勤務する事になつた。勿論初めに機敏である三井は、事を終ふるに又敏である。金物部の銅鐵銑鐵部の活動が戰後迄續いたか否か豫想するに餘りがある。

大正十二年の關東大震災の翌年の四月歐洲視察の旅に出る樣三井物産より命ぜられた。先づ戰後經營にせはしい佛獨英國の狀態を見て又歸路エジプト、印度までの足跡をのこして、つひやした年月約二歳大正十五年四月歸朝した。そして本社の文書課兼秘書役として一步一步と昇進の階梯をふんで行つて、現在に及ぶのである。

◇氏の生活三信條

松本氏は本年四二歳實業家としての手腕活動が發揮されるのはむしろ今後にある事は明白であ

る。三井系では由來福岡縣人はその昇進にめぐまれてゐる。松本氏の將來も必ず花々しい事業か約束されてゐるであろう。然し順調にのぞんでゆく背面の理由には、又かくあらしめる理想信念がなくてはならぬ。三井入社以來既に十四ヶ年實に氏はその間三つの信條を守つて一貫した。

A、忠孝愛國の精神に立つこと

B、至誠努力

C、向上進歩を念んとすること

この三つの信條は又青年全部の信條であるべき筈である。今の人々は個人主義の攝取によつて而も未だ洗練されざるが故に職務に對してもそれが出て我儘となるのである。責任觀念もなく、まして使用人と被使用人との思想の相違によつて、愈々職務に對する誠意がなくなつてきつゝあるのである。この時に當つて至誠努力で與へられた仕事を完全にやつてのける事は又必要中の必要である。

第一の忠孝愛國については又何をか云はんやである。

向上進歩を念とする事が大切である事は又喋々を要しまい。科學が日進月歩の發展をとげてゐるからには、それは日常生活の能率增進に取入れられねばならぬ。

人生が創造の進化の過程である以上、進歩しない生活は又人生に無價値であろう。進歩を重んじてこそ、希望があり、前途があり、熱情があり、活動が生じてくるのである。松本氏は五高時代强出會を組織した。卽ち何事にも强く出る主義の會である。プッシング、ツーゼ、フロンドだ進取の精神勇敢なる氣慨を以つて、事に當るべきである。と云ふのだ。この主義を氏は今日尙繼續孜々として止まないのである。

朗らかな春の日に雲雀が空高く囀づつてゐる時、黄色の十字花で地上を飾る菜種の徑のすいすいさと健康さを今氏の過去に感ずる事が出來る。憂鬱な暗い陰を一つものぞく事が出來ない。かゝる人生の斷片も又萬人生活に一種の糧とならない事はない筈である。

連綿たる十代の老舗をうけ
家名を全日本にあげた

鑄造家　深見平次郎氏

◇格式博多商人の唯一者

　十代の間、一軒の老舗が繁昌一方で續いたと云ふ事は奇跡の一つである。博多上土居町の街路をへだてゝ相對峙する福博鑄造界の二傑物は、言をまたず深見に磯野である深見はその事業の由來する處遠く、慶長三年に遡るべきである。即ち三百有餘年前深見兵庫の創業し當代平次郎氏に至る十代間福岡藩主の御用鑄物師であつた。

　空手一代にして巨萬を作るものも少くない。又幾代の間に累積された祖先の汗のしずくを半代に空費する者も少くない。しかし十代の間小曲折はと角、隆々として家業の盛運に向ふ者は實に指を屈すべき少數である。老舗尙榮ゆるところに何者かそれを然らしむべき理由が存してゐなければならない。

　深見商店三百年の歴史を顧み當代平次郎氏の性格を察する時、同店今日あるの所が明白になつてくる。

　深見平次郎氏は今年七十一歳住吉の別邸に風鶴を友として、悠々晩年を送つてゐる。着實、謙讓、質素の諸徳を持し然も博多子としての意義と誇りを、東京大阪に於ける商業取引社交に失しなかつたことは、博多が生み出した日本的な豪商宗湛らの風格をしのばれて、奥ゆかしさの一しほ勝るを覺えしめる。風貌は貴公子然として、而も東京商人の堅實と叡智と、大阪商人の機敏とを、溫厚の徳につゝんで居る處、舊幕時代の格式町人らしと許される所以であらう。

◇深見家の祖先

　氏は釜惣瀨戸惣右衛門氏の二男に生れ、實父は福岡藩立花彈正執權時代御用達商人年行司を數年務めた。深見家は前述せる如く世々福岡藩の御用鑄物師であつた。その祖先は川口妙行寺の興禎翁の墓誌によれば、深見家の中世の祖、深谷兵庫は後深見五郎右衛門重畠と改め、承應三年黑田忠之公が

薨ぜられると、田中榮濱等と四人殉死した。この重畠の三男の保右衛門氏が、上土居町に來住した事が知れる。天明元年に五代の祖の甚兵衛氏は、博多の津釜屋座師であつた。故に慶應二年迄藩主の命に依つて各種の大砲及軍器を作つたことはおびたゞしい數にのぼるか、途中寛政六年に鑄造した長崎港備付の二十貫目砲は、口徑一尺長さ三間重量二千貫で當時の國中同業者の實に驚嘆したものであつた。この後九州諸藩からの大砲及軍器の注文殺倒し、藩主の黒田侯も餘程自慢にしたらしく、しば〳〵現場にきて、事業上種々の有益なる特典を與へて居た。八代甚平氏九代即ち當主平次郎氏の養父の同名平次郎氏の代には福岡の鑄物師として名聲九州に喧へられて居た。深見家は元來五百石の歴々の武士でその家風がよく馳致されて居た。

◇平次郎氏と犂

當代平次郎氏は安政六年八月十六日生。瀬戸家からこの深見家に養子に來つたのは、四歳の頃で一方深見家傳來の家庭敎育により、他方當時唯一の敎育機關である寺子屋に四書五經の素讀をお定まりの様に敎へられた。始め下西町岩崎七太夫、後濱口町の某漢籍の師匠に學んだ。書籍の學問が實世にあまり役に立たないのは今も昔も餘り相違はない。善惡の人々の間にもまれ、賢愚鋭鈍に伍して天禀ある者は漸次光をましてくる。氏は傳來の職業の鑄物に精進し續けたのは勿論である。即ち十二三歳頃より大家の後ごりでありながら早朝に起きて、七時から職工の中にまじつて、家業の如何なる細部までも實地に研究せしめられたのである。仕事に一通りの自信がつくと氏は先づ農具犂先の改良に熱中した。各農科大學農事試驗所等には苦心になれる改良犂の見本を送附し參考資料とし需用者には殆ど原價にて供給し、尚研究改善を圖ることをやめない。深耕が有利なることが判明して、福岡式牛馬犂法が深耕に有益なる事が一般に認めらるゝや深見製品の需用區域は擴大してほとんど全國に行はるゝようになつた。

明治二十年頃は釜山、仁川、京城平壤に既製品を送つて、販路を開拓せんとしたが豫期の成績を擧けることができず、明治二十九年、三十九年、四十一年の三度渡鮮して鋭意馬耕犂使用を奬勵しその成績がよく漸次需用を増加して居る。現在では日犂本界の覇王と稱せらるゝ深見犂新朝福號大朝號、大朝プラオ號など、ほとんど全鮮に販賣せられて居る。臺灣には神農號賓來プラオ等の右轉式乾濕田兩用の犂を發賣し、總督府及製糖會社から奬勵せられて臺灣最適の好評を受て居る。

國内に於いて

　使用輕快で勞を省くこと

　耕幅及變轉自在なる事

　價格の他と比較のできぬほど安い事

のために深見犂先、豐光號、大正號、太陽號、永光號は年々莫大の賣行を示し「深耕は增收の基」を標語としての目的に添ふよう今日の完全を以てしても尙倦まず日夜研究を怠つて居ない。

◇鑄造部の活躍

かたはら深見の金物部では、祖先傳來の、原料の精選技術の精巧形態の優美なるを以てなる博多釜、及び工學博士平賀義美氏の證明により明治二十八年より創製して居る琺瑯引かなどめは、九州中國、鮮滿地方に好評を得て居る。山二しるしの改良バケツ、名聲高き博多鋏これは職工不足のために豫定製出量には達せず職工の養成からやつて發展の途を計畫して居る。又神社佛閣に於ける高麗犬用水盤、金燈籠銅馬、鳥居、梵鐘の製造にも時の要求と進歩した技術を練磨した結果、評判は益々高くなり、殊に日露戰役以後は急に記念牌及銅像の、各種記念物の注文が激增して、美術彫刻品鑄造工場を新設して居る。福岡を談ずるの徒、福岡を訪れる者知らぬもののない西公園の平野國臣の銅像及粕屋郡篠栗の弘法大師の銅像、大分縣日田郡日高町の五島上人の像の如き最も著明なるもの、一二三にして、小さいものに至つては實に枚擧にいとまない。其の他近くには一丈二尺の加藤司書の立像三井郡富の壽の本家の富安猶三郎氏の七尺の立像を作つて尙三四製作中の銅像もある。

◇平次郎氏と職工

深見今日の大を致した大原因の中にその職工養成の方針を數ふべきであると信ずる。即ち創業以來三百年十代の間連々として所謂家付職工として從事するものが十中八九と聞いては現代の世態と考へ合せて一驚に値する。十二三歲頃より徒弟として養成され、老ひて六十歲に至れば之を養ひ、未だ職工不滿の聲を聞かない。博多の一角に世の識者の常に腦裡に描く勞資協調のユートピヤが、出現してゐるのは、實に注目するに値することだ。

鑄造家　深見平次郎氏

人を使ふば難中の難である。個人主義の中に主從の觀念が消滅し、怠惰を唯一の武器として雇ひ主への不滿をはらす現代人をかくも美はしく、かくもつゝまやしかに、操縦する所、累代の溫情積善の餘德の然らしむる所である點もあらうが、實に又、當代平次郞氏が現世に渦卷く思想の根底を看破し、職工を餓に泣かしむる事なく、老後病氣に對する不安の念をなからしめた事、及最後に人間は感情の動物で水でも火でも動かし得ぬ人物も、淚あり情けある一言で動かし得る事を、よく體得してゐる結果である。

◇深見の現在

現在本店の鑄造部は上土居町九番地諸金物卸販賣部博多上土居町東角、バケツ工場大乘寺前町八番地農具製作所を博多驛裏明治町度器製作工場下厨子町を有してゐる。

又時勢の進運に伴ひ從來の際物鎔解法に一大改良を施し、昭和三年二月より、電氣應用電熱鎔鑛爐を新設し、之れが鎔解方法を專心研究の結果愈々完全なる方法を發見し、益々事業の發展に熱心に精勵してゐる。

一方臺灣の臺中には昭和四年四月より深見鋤分工場を設置して、その製品の販路は廣く臺灣全島南洋に及んでゐる。

◇平次郞氏とその名譽

業務擴張は年々止む處を知らず、維新以來各地に開催せらるゝ博覽會共進會品評會に出品し明治三十一年四月第二回及び第三回第四回と度を重ね五二會全國品評會に於て、宮內省より御用品として御買上の榮を蒙つてより、以來各等の賞牌を受領せるもの言葉の通り數へつくせぬ程である。實に同店の名譽とするは明治四十四年十一月及び大正五年十一月の福岡平原に行はれた陸軍特別大演習に御行幸の折深見製品の農具は天覽の榮を辱ふした事である。昭和三年三月主基齋田耕作御用品として宮內省より深耕犂及藁切器御買上の光榮を蒙つた。

平次郞氏は公職として福岡市名譽參事會員、博多商工會議所副會頭、東消防組頭、博多財產區會議員、內國勸業博覽會審查員、市會議員にあげられた事は數回、福岡市第三學區議員、福岡稅務所

鑄造家　深見平次郞氏

管内所得税調査委員、他色々の審査委員理事四十回、しかも立派に衆望に報ひた處氏の面目がある。その社會に功勞ある事天聽に達し先に功勞綠綬章を下賜の名譽に浴した。又金盃、銀盃、木盃感謝狀賞狀等おびたゞしい數を社會事業につくせるかどにより受て居る氏は現在博多櫛田神社西公園光雲神社の信徒總代をつとめてゐる。

氏の嗜好は書畫骨董が第一で茶も花にも趣味はあり、煙草は全く用ひず酒はお銚子一本位だと云ふ。謡曲は長く小供の時からの修業の結果玄人の域に達して居る。しかも成人の後は中土居町船津權平氏に喜多流の奥義の秘傳を受たとか云ふ。氏は昨秋御大典に際し福岡市に於ける大饗宴に召かれ天盃下賜の恩命に浴した。

現在百八十名の店員職工の敬仰を受つゝ十一代目の父親の業を繼ぐべく家務を取つて居る平次郎氏長男深見平一郎氏は本年二十九歳明治大學商科の出。老舗は永遠に老舗たるを以て滿足すべきに非ず。新進の智識と科學的商策を以て我が國農具改上の上に又家勢をいやが上に高くせんための將來の活動は實に多く平一郎の右肩にかゝつてゐる。深見は今後優良なる農具機械の九州發賣元として大活躍を續けてゆくであらう。

波瀾萬丈の半生を經て成功し
精神界にも活動する

帝國興信所長
日本魂社長

後藤武夫氏

◇司法宮を志して上京

漱石はその著三四郎中に「迷へる羊」なる言葉を以て青年を現した。胸に血潮の高鳴りを感じながら、然も野心勃々として禁じ難きものあるにかゝはらず。昭和の青年は尙明治末期のそれの如く「迷へる羊」の狀態を續けてゆく。昭和維新は聲高く叫ばれた。然し笛吹けど人躍らず、何等の餘韻をのこさず暗の中の花火線香のやうにきえ去ろうとしてゐる。

昭和青年の甦生の途か何れの方面に開拓さるゝであろうか。何處に高くさゝぐべき目標が存してゐるのか。セコンドの刻みと共に青年はもだえてゐる。然も尙依然として「迷へる羊」群からのがれる事は出來ない。

帝國興信所長　後藤武夫氏

この青年の群に聲高らかに叫びかける人がある、日本魂社長としてよりよく世人に知られてゐる後藤武夫氏その人である。

氏は明治三年八月十八日久留米莊島町に生れた。嚴父は增藏と稱して肥後が生める維新時の名儒橫井小楠の門下である。郡學務委員郡參事會員郡會議長に推薦されて鄕人の尊敬の的となつた人である。

明治十一年に筑紫郡日佐村にうつり、明治十三年に那珂小學校が新築せらるゝや、こゝに入學し明治十六年には井尻高等小學校へ入學し、こゝは在學一年にして退き縣立福岡中學に入る事になつた。

中學時代から家から徒歩で二里の道を每日かよつて一度も遲刻しなかつた。當時の同級生には、平田學氏や高田直屹氏や東京貯蓄銀行大阪支店長山崎弘氏や日本鑛銅所奧村千吉氏、小豆島醬油組合幹事の藤野茂氏や電氣化學工業會社專務の縣左吉氏がある。

この頃氏の一家は貧窮の極にあつたらしい。辨當は粟飯か麥飯お菜には味噌や、らつきようが普通であつた。又一圓の和英辭書を買ふのが大分困難であつたと云ふ。この頃の中學は一級から八級迄で都合四年間の修業年間であつたが、丁度卒業まぎはになつて尋常中學制が施行せらるゝ事になつたので、尙氏は一年學校に止まらねばならぬはめに立至つたのである。故に氏は後事を竹馬の友平田學氏に託して、明治二十年四月司法官たらんとして金十圓を懷にして上京する事にした。

◇放浪時代と教師時代

上京後は高等中學入學の志望で東京英語學校に入學したが、脚氣病におそはれて病氣靜養をしなくてはならなかつた。又惡友と會飲し十八の若い血氣にはやつて鄕土の父の血の出る思ひの送金を廓の一夜に費すなど、恍惚として都の酒色に誘惑さるゝ生活の第一歩をふみ出した。

東京の生活がわをかけて大袈裟に鄕里に報ぜられて、嚴父は立腹して送金の途をたつた。やむなく東海道を膝栗毛で大阪よりは船路によつて歸鄕して、父母に已の始末を謝し、名譽恢復のつもりで熊本の高等中學に入る事にした。

然し入學試驗には不合格であつた。この後又川上音次郎氏の壯士芝居や中江兆民や、板垣退助の民權自由の風潮に魅せられて、所謂壯士に共鳴し政客を以て任じ、放浪時代がおとづれてきた。

前橋で料理屋奉行したり、東京で車夫の仲間入りしたり、ドン底生活も引續いてゐる。九州駒の名で吉原の奉公男の中に羽ぶりをきかせたのもこの時代である。

然し又氏は多分に彈力を有してゐた。喜惡兩途の分岐路に立つて、尙更生の輝きを求むる心情は滅じてゐなかつた。

放浪のたびが終ると、小學先生といふあたらしい生活が始まつた。卽ち母校井尻高等小學校に教鞭を取つてゐたのである。この頃、福岡市西港町六番地の青柳武平氏の長女玉江と結婚した。

この時代に水平運動を試み又郡議を草鞋ばきで歷訪して遂に井尻同窓會を作つた。

明治二十七年那珂川ほとりの小學の先生ではあまんじ得ず、七月遂に意を決して、氏は上阪した後三ケ年間の關西法律學校の大阪の苦學時代がはじまる。

夫人も間もなく上阪されてゐる。或は天滿天神前に露天商人となり或は月給八圓の看守となつて悲慘なる生活苦と戰ひ、且學問のために精進しなくてはならなかつた。

勤務から學校へ學校から勤務への三年が續いてゐる。

◇帝國興信所を起す

明治三十年大阪の苦學の三年を送つて鄕里に歸つた氏は、直に福岡日日新聞に入社し、毎日商工會議所や市役所や縣廳警察に種取りに步いたが、やがて小倉の支局長に轉じた。この福日時代にかの平田學氏は丸州日報に居て共に水魚の交を續けてゐたがために同僚に誤解されて政敵に通ずるものと揶揄されたこともあつた。

小倉の記者生活も幾多の思ひ出を殘して、三十二年の春淺い一月末に終へてゐる。靑天を負ふて雄躍する大鵬の志を學びたかつた氏には、小倉の天地は餘りに狹すぎた。三度の上京を決行したのである。

益民館の法律事務員や、帝國商業興信社には入つたが、社會の裏面の醜惡さに活きる悲哀を實感せざるを得なかつた。

卽ち僞善家賣物の横行する社會に一種の戰慄を禁じ得なかつたのであるが、この中に暢氣に無關心に濁流に棹さすことは氏には出來なかつたのである。

帝國興信所長　後藤武夫氏

獨力經營だ、大正直大勉强の大旆をふりかざして遂に帝國興信所を創立したのである。

調査勸誘給仕小使兼所長と一切の仕事を自らやつてのけた。創業時代の苦しみはあつた。

氏は徹頭徹尾積極的の事業經營をした。大銀行、會社を片はしから歴訪した又財界亘頭も同じである。午前八時半には出勤し、午後四時半には退所して、年中寧日なく至誠奉公第一主義を取つて業務に熱中した。

然るに氏の露も身に覺えのない委託金費消及馬蹄事件について、未決監に收容されたことがあつた。直に無罪なることがわかつて釋放はされたが、そのために仕事の遂行に一大頓挫を來せるは覆ふべからざることである。

四面楚歌の中に帝國經濟雜誌に主力を集中して、頽勢を挽回すべく一快戰を試みんとした。

◇日本魂社と文章報國

血の出る樣に苦心して全國を遊說して漸く出來あがつた資本金四萬圓の株式會社帝國興信所は明治三十八年十二月創立されてゐる。

日露の役後一般に事業熱が勃興して來た。勢ひ興信事業も一般に其の必要を認められて來た。然し成績は依然としてかんばしくない。遂に四十一年會社は解散されて、名實共に又帝國興信所は氏個人の所有に歸した。

間もなく鄕里の嚴父の逝去あり、心頭一新して東京南小田原町に新事務所を設けて、發展に又發展四十二年には創立十週年記念園遊會を開催する程に勇躍邁進したのである。

現在に於いて帝國興信所は支所五十八ケ所を有してゐる。從業員約一千名本日全國は云ふに及はず、海外の各重要都市にも殆ど皆設置されてゐる。

帝國興信所の基礎は既に確立するし、且つ財政に相當の餘裕は生ずる程度に進んだことを顧みた氏は、今この餘力を以て國家奉仕に一身を捧げることは決して不可でないと固く信じた。

外國文明の物質的の文明輸入はよしとしてその功利主義自由平等の思潮に國民は皆侵毒されてゐる。日本古來の美德は殆ど顧みられてゐない宗敎家は墮落し敎育家も腐敗してゐる內閣員の悖信代議士の汚行、實に世は百鬼橫行の巷である。この邦家の危機を救ふものは日本人として總べての理想の出發點を日本魂に求むべきである。この底の主義を全日本に宣傳し日本人總べてを日本魂化す

る外に何者もない。かく悟つて卽ち日本魂社を設立したのである。

第一着手として雜誌日本魂を發行することにした、こゝに氏が早くよりの文章經國に對する宿志實現の第一步である。

氏は常に日本魂の誌上日本魂とは何ぞと闡明し又同時に其の使命について研究した。

◇外遊の旅情

大正六年には支那への視察をなし諸外國の侵入に泣く四億の民の現狀に深く省みる處があつた。卽ち眠れる獅子はやがて蹶起するであらう。然し餘りに現實主義にとらはれ過ぎてはゐないだろうか。國家永遠の策が抛擲されてゐはしないか。今の少年の國民敎育を盛ならしむれば少くとも四五十年後の民國は我國と同一レベルに達するであろう。支那を救ふは國民教育の振興だ共に日本が盛になるのも國民敎育の振興だ。

支那から歸つた氏は益々興信機關を擴張し、就中日本魂社の事業の主義主張の徹底の必要を感じた。大正九年には鵬程萬里の外遊の途に就いた。この年東京聯合靑年團の組織がなつて氏はその特別委員であるの關係上、特に諸外國の靑少年敎育視察をなすやう市長田尻博士より囑託せられてゐる。

レモンの香高い南國の愛國詩人ダヌンチオ氏とフユーメに於いて會見し、又倫敦に於いては市長就任式の大雜沓裡に新市長ロールに會見し、東京市を咄嗟に代表して威儀堂々たる中に儀式に參加した。

萬里無涯の大陸に雪が見られる頃米國に渡つた。グランドキヤニオンの大自然の調和の妙趣と造化の神祕にその莊嚴にその靜寂さに赤い斑土に白い雪、滿腔に溢るゝ詩趣を喜び忘れ難き思ひ出を殘した。歸朝後氏は歐洲の天地を徘徊してゐた一つの怪物が日本を襲來するに至つた事を痛感した。國民敎化を徹底せしむるは又焦眉の急を要するものである。

氏はまづ都市の敎化團體を糾合して漸次に全國に及ぼし多數團體の精神的結成によつて、一大聯合體を作り相互に理解し努力して全國に所謂敎化體をはらんとした。

これ日本魂社の事業の外延の擴張である。

大正十一年十二月このための初會合が芝公園の紅葉館で行はれた。こゝに於て大日本敎化團聯盟

帝國興信所長　後藤武夫氏

が組織せられんとする趣旨書及原則書が起草せられたのである。

大正十二年四月聯盟の發會式が擧行せられてゐる。

◇教化事業に晩年捧ぐ

氏も大正十二年九月一日の大震火災にはほとんど物質上には無一文になつてしまつた。然し火災後家人の用心の一萬圓の公債によつて、急速に木挽町一丁目にバラックを作り三年間善謀善戰をつゞけた。

大正十五年春には帝都復興の魁として京橋區櫻橋南側の舊事務所跡の新建築に着手した。卽ち建築設計は工學博士後藤功一氏、工事請負者清水組、五階建地上五十四尺六寸で同年十月三日この建物の上棟式が行はれた。

本年後藤氏は六十歳である滿頭の白髪は既に雪の様に白い。鹿を中原に爭ふ政治の渦中に投ずることを潔ぎよしとせず足を濁流に雪いで神聖なる敎化事業に盡さんと云ふのが心願である。昭和三年の秋の御大典に際して氏はその文化事業につくせる功によりかしこきあたりより表彰せられた。

氏の一弟の貞雄氏は陸軍歩兵大佐二弟兼三氏は海軍の少將三弟多喜藏氏は鹿兒島縣知事の榮職にある。

然し氏は家庭的にめぐまれてゐない。子女五人の中長男勇夫氏次男智夫氏の他は皆他界されてゐる。

精神界の巨人の胸中にも蒼々たる天空をおふぐ時老心又無限に寂寞を加ふるものがあろう。加ふるに此の我が日出づる國の狀態は混迷の度を益々加へてゆく。精神理想と、大宇宙の精神を融合調化する中に永遠の生命を求めんとする氏の今後に榮光あらんことを祈る。

帝國興信所長　後藤武夫氏

百姓嫌ひで東京に遊學し、學問がまぬるいとて事業家になつた

坑木材木問屋　合屋榮太郎氏

◇書讀むよりも事業をやれ

學問か？　實業か、この二つは幾多の青年に取つては、大きな合せ得べからざるを知りつゝも、倚二つながら得たくてならぬものである。二兎を追ふもの一兎も得ず。この格言の如く兩者を兼ね得る事は今日の社會は早許してくれないものである。

二つの一つ、こゝに決然たる態度を示す事は、言葉の上では易々たる事であるが其の實仲々の難事である。吾人はこゝに學問を捨てゝ、實業を選んだ痛快な人物を知つてゐる。

坑木一般材木問屋福岡市幾世町合屋榮太郎氏は博多より東北に去る三里、粕屋郡須惠村の出身である。生家には祖先幾代の間に蓄積された美田があり、富裕な農家の獨息子として氏は生れて來たのである。少年時の讀書が高じて鍬取るのに嫌氣をさして、どん／＼と東京に遊學に來てしまつた。

年少ながら學問の將來に於ける價値を豫想しながら氏は時潮に先驅し身を事業界に投ぜんと決心して、さつさと故里に舞もどつて來た。

◇成敗に對す男性的な態度

須惠には海軍採炭所がある。氏は先代の信用と財力をバツクにして、手のとゞく範圍のあらゆる事業に指を染め、それが全べて圖に當つた。

「末恐ろしい若手の手腕家だ」と將來を一般に囑望さるゝに至つた。又自らもさう信じたものである。博多灣鐵道の須惠驛前に石灰竈を作り、豐前常見より原鑛を引いて石灰を燒いてゐたのもこの頃である。

然し須惠は彼には餘りに小さい活動舞臺であつた。やがて宇美驛前に店を開き肥料、運送業、雜貨商をやり、片手に海軍採炭所に年額五六萬諸種の請負をやつた。

氏一代の思ひ出は、博多商人を尻目にかけて、滿州より汽船一隻の豆粕輸入の一番槍をつけた事であるが、これもこの頃の出來事である。

やがて日露戰役後の一般不況に見舞はれ、事業が各方面に亘つてゐた氏は殆ど致命的の打擊を受けたが、捲土重來の意氣に燃えた氏が、裸一貫六千餘圓の負債を背負つて、吉塚驛前に來つたのが明治四十五年四月二十三日であつた。氏は失敗の原因を信用の濫用に歸して、祖先の位牌の置場迄に窮するに至つたのは、實に精神的に刑務所につながるべきに相當すると觀じ、以來三年他人よりのあらゆる誹謗を、柳に風と受け流し、ひたすら蓄財に精進した。愛宕神社に禁煙の祈願を籠めたのも再起の一日も早からん爲めに外ならない。

服裝が見すぼらしいのが禍して、愛兒が學校で蟇口紛失の嫌疑を受たので、せめて小供だけには新らしい着物を着せて學校にやつてくれと夫人に泣付かれたり、夜晩く坑木山の雜木を車力に運び未だ四隣の眠深き頃、薪を割るので、町民の希望として、眠られぬから中止してもらひたい、と苦情を申込んだなどの逸話がある。然し氏は淚をのみながら斷然と所信を遂行し生活を極度に切り詰め、貯蓄を續けた。

三年の末に、この忍耐は彼に二千圓の資本を惠んだ。筑豐、相知須惠方面の炭坑の坑木の供給を引受て、親分肌の、膽玉の大きな氏の活動が再來した。やがて業務の發展につれて、博多驛裏から海岸通二丁目に移轉し來り、そして今の幾世町に至つて、今日に及んだ。

◇氏の現在

氏は善惡に超然たる一轍の人である。決斷と實行の勇猛心を多分に藏してゐる。一度信用すれば飽迄可愛がり拔く人である。明日を心配せぬ自力獨行の男である。

氏の最も得意の時代は大正七八年頃であつた。對馬、山口、中國、四國の坑木山を一手に買占めて、貝島礦業、鈴木帝國炭業、海軍採炭所の坑木納入を引受けて、博多の合屋と歌はれ、一躍三十萬圓の株式會社合屋商會を創立し自ら社長となり、功勞ある店員を重役に任じた。然し好況が頂上になると、政府は重稅を課して濫立の小會社を壓迫し始めた。これと同時に又不況來の聲が漸次高まり、氏は先手を打つて一朝にして會社を解散して萬全の策を講じた。氏の人を使ふや、親に勝る慈悲を以てし、又秋霜の如く冷かにその誤をさとす事がある。然し使用人一同は、氏と一身同體、何れ

が主人やら判らない程粉骨砕身する。戸畑の支店長には長女よし子さんの婿養子武専出の統三郎氏が活動してゐる。本店は氏の長男英一氏次男小彌太氏が活躍してゐる。自らは總支配格である。前前回市會議員に打つて出たが潔癖が祟つて不幸落選して以來、商工會議所議員、市議員に立候補をすゝめられたが、常に自重した。然し博多築港發展期成會の幹部として猛烈な促進運動を試みた。現在幾世町電軍通に合屋商會材木倉庫が大きく建せられ米材其の他が山積してゐる。吾人は鐵の如き強き意志の、事業に必要なるの生きた例を、合屋氏の場合に發見することが出來たではないか。今や氏に事業訓練を受けた舊店員は市内を始め各地に獨立事業を起し、又經營して當時の恩顧を感謝しつゝ慈父として出入且文通して居る者數多いのである。

外國製の一葉の寫眞を見て發奮して
洋行し腕をみがいた

寫眞師　後藤千代次氏

◇マアリウの寫眞

太陽の沒する處を知らぬ海の國のプリンスオブウエルスが、日出づる國にさらばして、鹿兒島を抜錨したのは大正十一年頃だ。そのスポーツマンらしい英姿は、我青年の心に深い印象を今尚のこしてゐる。この最後の日本永別の日の寫眞は、永遠の記念として宮中深く藏されてゐる。この記念寫眞を撮つた日本的否世界的な肖像寫眞師界の第一流の技術者が福岡にゐる事を聞いて、我々は一種の誇を感ぜずには居られない。その人こそは後藤千代次氏である。

後藤千代次氏は伴天連に名高い天草富岡町の産で、雲か山かと、山陽をして歌はしめた天草灘の潮を、産水に使つたのが明治八年六月である。祖先は天草八十八ケ村の紺屋の元締で、苗字帶刀を

許されてゐた。氏の曾祖父に當る後藤定八郎翁の如き、一徹を以て界隈にその名を馳せた人である。或る時富岡町とその隣村の志岐とが、兩者の中間にあるわかめの産地志岐崎の領有爭ひをした。代官はその名によつて志岐崎は志岐村所有とのさばきをした。富岡町中一人もそれに異議を申得る人が居なかつたのに、定八郎翁は病を押して代官所に出掛け、歴史を省みず名稱のみによる判決が不當である事をなじり、富岡海岸に長崎濱とあるがこれは長崎領かと逆問して、遂に代官をして前言を取けさしめた事があり、遂に志岐岬を志岐村領とならしめなかつた。翁が歿すると志岐村では一村擧つて餅をついて祝つたと云ふ話がある。

少年時代は、その曾祖父が北畫をよくしたが故に、日本畫を學んだ。後寫眞を手本にして、キリスト文化の廢墟の地に肖像畫を獨習した。これが氏の今日の運命の振り出しである。即ち滿二十歳になつて、當時寫眞術の中心地だつた長崎にきて、龜寫眞館に入門した。

當時長崎には寫眞術の元祖上野彦馬氏があつて、名人の名を擅にした時代であつた。總て斯界の門生は上野氏の右に出づる事を以て目標としてゐた。何處からとなく龜寫眞館では一枚の外國製の肖像寫眞を手に入れた。その採光法、皮膚の光、表情、骨相など入神の技に達し、一同しばし唖默

して驚歎した。氏の心中にその一葉の寫眞に署名してある米國桑港アマソウと呼ぶ人に、師事したい望みが強くやき付られたのはこの時である。

◇あこがれの米國へ渡る

熱望押へ難く、明治三十二年六月桑港を訪ねた。然し夢の間も忘れなかつたアマソウ寫眞館は、祝融の見舞つた跡で、氏が知り得たのは曾てこんな家があつたと云ふ言葉に過ぎなかつた。然し幸ひな事にはアマソウの技師だつた、エギシをスタンホールドと呼ぶ米國太平洋岸第一の寫眞館に尋ね出した事だつた。こゝに靜かに修正臺を前にして技を練つた。四ケ月後には早くもミスターゴトーの名は桑港寫眞師界にしられバンダイク寫眞館（英國人經營）の主任に聘せられてゐる。

明治三十四年寫眞師の新智識を修めて故國の地を踏んだ。慕はしの長崎は港灣改修當時で、富豪連の土地思惑買のため地價は法外に騰貴しやむなく佐世保に開業しその技術を一般に問ふ事にした。

プラヂナ寫眞その變色せざる事、鮮明なる事、デリケートな處迄表現出來る事など、南は支那よ

り北海道の斯界の人の羨望の的となつた。これは勿論後藤氏が我國に將來したもので、後藤のプラチナ寫眞は各地方のスタヂオのサンプルになつたものである。

若い海軍士官は家郷の父母に思ひ人にその、凜々しい短劍姿をうつして送る事が無上の喜びである。水兵も同樣である。彼等は名人後藤氏を得ていやが上に喜んだ。それは彼等が父母思ふ孝心か友情か愛情か手紙よりも言葉よりも雄辯に、後藤氏の手による寫眞の顏によつて語られるからである。

上村大將や山本中將、故加藤友三郎大將や島村、八代、財部の諸將星盡く喜んで後藤氏のスタヂオに立つた。御附武官の山本信二郎少將も尉官時代盛にその美男振りを後藤氏にとらしめたものである。

この時代の氏の門人に今水茶屋に開業してゐる、縣下否九州切つての肖像寫眞師界の一流だと稱せらるゝ杉瀨氏がある。

日露戰爭中蔚山沖の海戰すんで後氏は上村艦隊の旗艦にカメラを以て幕僚として乘組んだ事もある。

歐洲大戰の幕がきつておろされると白金は天井知らずの高價を示し、品物は拂低し米國では一時使用禁止をした。如何にプラチナ使用により立派な寫眞か出來ても、原料が高くては營業上成算がとれない。世界一般の寫眞師は正に方向轉換の必要にせまられてゐる。プラチナ寫眞の後藤氏も途方にくれて思案投首の態であつた。結局は又大正七年一月技術本場紐育にこゝろざすより他に方法はない。

◇再び渡米し紐育へ

海軍に知已が多ければ世界何處に遊んでも不自由はない。佐世保時代の知已船越少將籔少佐山本主計少佐などと一緒の旅行が出來紐育には與倉機關大佐がゐた。

氏は紐育に着すると同時にその朝ブロードウエイに貸室を見出たし、荷物を取り紐育市中の寫眞師を巡訪して、ブラドリー氏の家に週三十五弗で働らくことにした。此處はウエルサイユの媾和の花形ウイルソンが最も愛顧した寫眞館で歷代の大統領も多く此の館を利用した。氏の修正になる寫眞が白亞館に飾られてゐる筈だ。併し研究の關係上、クリスマスの後世界一のホワイト館寫眞館に

入つた。氏がプラドーリに別れたい旨を述べるとプラドーリはアーと双手を擧げて落膽した。

ホワイトは市内に數ケ所の支店を有し、職人百人を使用してゐる。客は紐育一流の家庭が多く、氏は特に念入物だけを受持つた一人にて六百弗を寫眞代に拂ふ客があつたと云ふ。

腕愈々磨かれてプラチナを使用せずに、昔日の成績とほゞ同等の結果を得る樣になつて歸朝した。大正十一年には宮内省より電報があり、鹿兒島にゆき英皇太子と東郷元帥との最後の別離の記念寫眞を取つた。大正十五年海軍の大演習の折海軍省の招きにより旗艦陸奥に乘りくみ、皇太子殿下の御動靜を謹寫する大役を申つかつたが、不幸にも大正天皇の病重くならせられ遂目的を遂げる事が出來なかつた。

佐世保に於ける玉屋との關係及び、福岡ビルヂング時代の福岡キネマ商會との關係で玉屋の寫眞部を開設したのが、福岡進出の第一步である。

◇氏の修正の信條

氏は所謂世の寫眞師ではない。役者の粉飾するが如く、全然死せる人形化する修正を心より嫌がる。解剖學を頭にいれて骨相を中心として、顏面皮膚の中に美を見だすのである。眞情を探し求めて、その發露をさまたげるものを細きペンシルの先でのけるのである、彫刻家が大理石塊の中に塑像を見出す樣に肖像の中に生命を求めるのである。故に金と時間に無頓着である。念入れる事が氏の最大の武器である。終始一貫創作的態度を持してゐる。修正の二流は美しくするためにその人を殺し、一流は生すために醜を排するのである。肖像畵は人格の表現たるべきである。要するに自然に親切である事が最も寫眞師に必要であると彼は力說する。

全國的に肖像寫眞師として有名になり得た原因は此處にある。現在顧客は福岡市内郡部の智識階級及び上流階級に多い。世には先人の悲哀がある。本格肖像寫眞に對して世人の理解がいづこ迄進んでゐるだらうか。先進國と同一レベルに迄進めるために、尙努力すべき事が幾多殘されてゐる筈だ。

歐米の婦人は自らの皺一つ抹殺されて居ても、不平を述べる。まして自分にあらざるものが自分らしく自分の姿を借りてゐるならば、承知する事は有りこなしだ。本然の自分を見出す事は現代人の最もつとめる處である。あらゆる方面に全人格を表現せんとしてゐる時である。正に後藤氏の時

代が來た。

他の寫眞館の製作もの、と後藤氏の作品を比較すれば、其處に明かに時代のへだたりを、寫眞界にも見出す事が出來る。

氏は最近天神町電車通りに堂々たるスタヂオを新設した。そして日々繁昌してゐる。

純博多人の格式を代表する
その生涯と爲人

博多三元老の一　遠藤甚藏氏

◇一昔し前の博多

五十有餘年の公生活を送つて、年古りた庭木の手入れと、骨董、刀劍の趣味生活にひたり、向變り行世相の弱點に鋭どき觀察を怠らず、靜かに老體を養つて居る、遠藤甚藏翁は深見、故下澤の二氏と共に格式博多人の標本であり、博多三元老の一人者である。

翁の今日に至る、實に順風を負ふ帆船の如く、其意氣鞏固に由來する漸次の進步あつて何等の奇もなく綺もなく大河の如き凡々の緩流の連續が氏の生涯の特色である。翁は餘りに正直だつた。翁に清濁併せ呑むの宏量があつたら、如何にその略傳が賑やかであつたろうと遠慮ない評をなす人がある。然し翁を育んだ時代そのものを顧みるならば、特に博多に於ける當時の境遇は翁以上の性格

を生ぜしめ得なかつた事がわかる。

福岡市内には晝も一人歩きが恐ろしい程の籔があり、矢倉門あたりは一面畑で中洲には菜の花に蝶々が飜々としてゐた。博多福岡部は中島橋と水車橋と二つで接續され、橋口町には牢屋があつた頃である。箱崎放生會に博多商家の姉妹二人が揃の紺絣の衣裳を着けたと云ふので、ひどいとがめを受け、町人の絹物織御免の許しが出るのが頗る面倒であつた。川端通は今でこそ博多の盛場であるが、當時は片側町の青物市場であつたのである。全べてつゝましく質素である事が生活の標語であり、博多には八疊の座敷より廣いのはなく、まして木立、置石に趣味を有する家などは探してもなかつた、しかも部屋などは黑色に塗つた、當時博多の名物として

一(市)は川端(當時は青物市場)

二(荷)は茶仲(荷物問屋)

三(産)はりうせい(産の醫者)

四(詩)は龜井(漢學の先生)

五(碁)は松永

六(錄)は美作

七(質)は立石(質舗)

八(鉢)は皿山(陶器産地)

九(句)は漂風(俳諧師)

十(塔)は松原崇福寺

と歌はれてゐた時代であつた。この時代風潮に最も順當に育つて來たのが翁である。翁の性格がこゝに淵源してゐる。

◇博多財産區會と氏

尙翁の祖先は松永家、花遁翁は氏の祖父で、この人は賴山陽、梁川星巖、廣瀨淡窓と親交があつて當時博多隨一の篤學者で詩文に好みがあつたと云ふ。父母に仕ふる至孝、他に對しては親切仁慈自家召使に對して懇切、一世に賴る處なき孤兒貧兒を引取つて養育したのが前後二十二人であつたと記されてゐる、その篤志善行を賞せられたのは享保三年で花遁翁の二十歳の時であつた。其の後藩

博多三元老の一　遠藤甚藏氏

より賞を受くる前後十三回に及んだと、その學識德行兩方面に於てやはり博多商家中の傑物であつた。近く昭和帝の卽位の大禮の行はるゝや贈從五位の恩命に浴した。

花逋翁の孫である翁は、嘉永六年六月十九日の生れで十八歳の時遠藤家の養嗣子となつた。遠藤家も舊藩中は御用聞き町人で苗氏御免の年行司役であつた。甚藏翁は習字を最初赤間町の淺田氏に就き後には下西町岩崎氏に轉じ、漢籍は上市小路の岩永に通つた。勿論四書五經の素讀の範圍を出なかつた事は當時の商家としては已むを得ないであつたろう。

氏が博多の備米世話係を拜命したのは明治十四年であつたこれが後貯蓄金穀となり二十九年貯蓄委員に擧げられその全部の主宰を委託せらるゝや、米穀を全部賣却し二萬圓を得て依つて各種の公債證書を買ひ、高額面と小額面との取替による替貨を得、又は鐵道國有の問題起るや九鐵株を七十圓にて百株買込、これが九十六圓八十錢に騰貴して利益ばかり三千圓近く得た。これに溫良篤實の翁にその商機を見るに敏捷なる所の商家育ちの一面が遺憾なく發揮されてゐる。

又鐵直官營の風說愈々確實となるや、この貯蓄金を以て市長と謀つて鐵道株二百買入れの件を福岡市會に提案した。今日と比較して隨分風變りである。

◇務めし公職の數百八十九

翁の謹嚴であつた例として、よく新茶屋遊廓事件がもち出される。翁は遠藤家に入るや堅く一夫一婦主義を取つた。酒も煙草ものまず所謂品行方正で、近所の若者は、惡童が金佛組に對してよく試みる手練を繰返して窃かに相謀つて翁（勿論其の頃は血氣の靑年である）を新茶屋遊廓の某樓に伴れこんだ。散財の末一同一泊と評議一定した。氏は朋友交際の道に背くをいとつてか一先づ娼妓の部屋に落付き、茶を一口呑んでさつさと歸つてしまつた。こゝに又氏の面目が活躍してゐる。

翁は理財に長け、謹嚴しかも博多人にはめづらしく責任觀念强く、物事をきばりきばり區切りを付けて行く處に事務家の半面を有してゐるから、その公職にある五十有餘年、名譽職其他に當選する事昭和三年の今日迄百八十九回である。卽ち明治九年什長拜命、所得稅調査委員に當選する事前後六回市制以前は區會議員、學區會議員市制以來滿二十二年間は繼續的に市會議員をつとめ其間市會議長、副議長、縣會議員、學區會議長、博多商業會議所議員、特別議員、福岡所得稅調査委員長、筑紫銀行專務取締役、博多土木會社長、櫛田神社保存備金總代、氏子總代、光雲神社信徒總代、日

博多三元老の一　遠藤甚藏氏

本赤十字社福岡支部常議員、博多濱部四十六ケ町衛生委員長、日本同仁會評議員、福岡市繁榮期成會長、福岡縣質屋業聯合會長、博多灣築港株式會社取締役、其他正直に數へて行つたら百八十九、勿論長壽ではあるがこの間これだけの仕事をやつてのけた精力絶倫には、何人も一驚を喫しないわけにはゆくまい。

翁は近々委員になりたい連中が自薦運動を試みるのを嘲笑してゐる。翁を縣會議員にあげやうと近隣の人が話を進めて居た。これを聞いた翁は親族一同と共に推薦者に辭退したが、自分の意志で自分の適當と信ずる人を入れるのだから勝手にさしてくれと選擧民に返事されて困却した事があつた。市會でも政黨的色彩が薄弱で市としての事業は甚だやりよかつたと追憶してゐる。翁の市會議長時代に始めて福岡に電車が出來、現中洲の處に共進會が開かれた。それが現今繁榮の基をなしてゐる。

◇有名な家寶の蒙古兜

家業は云はずとしれた質屋業舊柳町に遊廓があつた時代その遊客の質入れに毎夜三時頃まで寝られなかつた程のいそがしさであつた。

然し醫大建築と共に遊廓は現在の新柳町に移轉して、他方博多港はさびれ濱の現在には昔の繁盛のおもかげだに偲ぶ事が出來なくなつた。翁には子三人長男の甚一郎氏が業をつぎ醫學書などを主として營業されてゐる模樣である。

この遠藤家を述ぶるに當つて逸してはならぬのは即ち蒙古兜である。これは實に國寶に値し元來甚藏翁の祖先松永家のものであつたと云ふ。文人、墨客、好事家等の訪つれるもの多く、古くは賴山陽、廣瀨旭荘、中島窓陰、菊地五山、梁川星巖、らの兜に題するの詩文があり近くは有栖川、小松賀陽の諸宮殿下を始め伊藤始め伊東、東鄕の諸將星、內閣諸公、有名なる人々の書墨優に一百を越へ蒙古兜を中心にして一つの博物館ができ、又編纂すれば一卷の書ともなるであらう　今上陛下の未だ皇太子におはす頃福岡黑田別邸にてこの兜を御覽になり、畫家に命じて寫生せしめ獻上ある樣御沙汰あつたから、直に寫し畫を額にして、翁は二人の孫を伴ない宮中に參殿して一萬匹の賞を得て歸つたと聞く。

翁の公共事業に盡力するは祖父花遁翁の血による事が多いが金盃、銀盃、木盃、賞狀、記念品等

を受領する事は百十五である。

世は移り人は浮薄に流れて、誠實なき風潮が瀰滿してゐる。衷心公事に奉じてきた翁の目を以てすれば現代は救ふべからざる邪道に陷つてゐるであらう。表面綺羅を飾つて心中常に貧しき青年連も亦愍むべき羊のむれであらう。翁は公生涯の中の數多き經驗の中から、寶玉を集めて敎訓集を上梓し博多將來の運命を擔ふ青少年に贈ろうと、靜かなる折古代めいた置石木立の間に又は楣間の高士の扁額に疲れては老眼を轉じつゝ筆を運んでゐる。

朝鮮の稅關吏、蒙古貿易商より
轉じて自動車で成功した

實業家　江島廉太郎氏

◇韓國官吏になる

一國文明の高低進度は其の有する自動車數によつて明示されるといふは學者の說である。

交通運輸上の重要なる役割を演ずる自動車は、以前有産階級卽ちブルジョアーの所有に限られ發展してゐたが歐洲大戰後世界の經濟界の中心が米國に移動し、同時に自動車界も米國の大量生産による安値によつて一般に普及され民衆化され現在では我全國津々浦々迄も乘合の利用されない處はなく圓タクなども早や家庭語となつてしまつてゐる。

この自動車界を背景にして活動するのは又實業人として興味つきざる處なるべく、又成功者が出でゝもよい筈である。こゝに東京にて花々しく活動を續けてゐる江島廉太郎氏に就て述べて見た

いと思ふ。

江島氏は市外箱崎町の海と松葉のオゾンの香ほり高い處に生れた。氏の父茂逸翁學識高く子弟教育に功勞あり、實業方面としては十七銀行の創立に盡し、福岡商工會の書記長として商業會議所の設置に功あり明治四十五年七月二十五日病死した。今は地藏松原に記念碑が殘つて居る。氏は小學校時代には平田學氏、大熊淺次郎氏の教へを受けたことがある。中學修猷館に入學したが一年の後退學し東京の海城中學の前身海星豫備學校に入學し卒業後早稻田の政治經濟部に學んだが中途退學して日露の戰役に出征した。歸國後又關西大學に入學してゐる。

卒業後大阪の稅關を振出しに官吏の生活が幾年か送られた。其の後韓國政府の依賴により稅關事務調査のために全鮮を行脚し、遂に仁川の稅關に七年間止まつた。

大正四年に官吏生活を打切つた。そして滿蒙貿易の有利なる事に着眼し蒙古に一店舖を張つて獨立經營を始めた。然し貿易商は有利である半面に、最も資金を要する事業である。江島氏は故に蒙古の貿易を中止して金主を求めて大阪に來た。

◇日新自動車會社を起す

當時大阪に長瀨といふ人が居た。手廣く歐洲貿易をして羽振りをきかせてゐた。江島氏はこゝの社員として働く事にし、支那部に入つた。そして店主に建言して支那各地に支店を開設せしめ自らその事務の處理に當つた。又自動車の有望を見て機械部を創設してその輸入をやることにしたが、自動車輸入は非常にむづかしいことでその難局に當る人がなかつたので自らその衝にあたり自動車部をも受持つた。

間もなくこの自動車部は大阪島商店と合併して資本金五十萬圓の日新自動車會社を起し、その東京支店長として活動する事になつた。現團男爵家執事の村島丈夫氏の如き當時の日新自動車の社員である。

◇英國製の高級車に着目す

實業家　江島廉太郎氏

一時日本にはフォードの黄金時代があつた。玆に面白い現象は買價及ひ料金の低廉なるよりも實

質本位の時代に進んで來たのである。米國品が美麗にして値の安いに反し歐洲品所謂英國製が日本の國土地勢に適しそのライトカーは實用的であるために上流の自家用に米國品よりずつと歡迎されたのである。卽ち着物でいへば米國製は安いお召、英國製は結城紬の如き感があるのである。又戰後英國は着々として經濟界も安定しつゝあるのだ。が江島氏は此處に着眼して日英自動車商會を設立して日本の斯界に飛躍せんとした。卽ちロンドンルーツ株式會社ション、アイ、ソーニクロフト株式會社の了解を得て、合資會社の形式をとり英國製の自動車及び自動自轉車の日本一手販賣に從事したのである。

中にノルスロイス號の如き世界に於ける最高級車にして價格は五萬圓乃至六萬圓で恐れ多くも、陛下の御乘用車として御買上の光榮に接してゐる。支配人には霞ケ關海軍飛行隊の敎官飛行少佐英人シー、エイチ、チエスター、スミス氏が居り社員としてはスペインの副領事のジエムス、ブラナス氏があり、江島氏は卽ちその代表社員であつた。

◇三轉してゼネラル會社の代理店に

然し英國の高級車を購入し得る階級はおのづから制限がある。民衆化といふことは廣い購買層をうる必要上いかなる方面にも必要である。デパートの三越にしろ松屋にしろ主なる顧客は中階以下の大衆である。雜誌界にもその傾向が顯著になつてきた講談社の飛躍などその一好例である。自動車界もその趨勢にもれることは出來ない。まして米國に於ける自動車技術は遂に低廉にして高級車を產出するに至つた、ゼネラルモータースの出現がそれである。

ゼネラルモーター會社は八億八千五百弗の大資本を擁して昨年十月より九月まで二億四千五十八萬弗約五億の利益をあげたと稱せられてゐる。この會社は大阪に日本ゼネラルモーター會社を設立して自動車を分解して輸入し、大阪工場にて組立てをするのである。同工場では乘合及びトラックの製造をやつてゐるが四月より九月迄に一萬臺を產出し平均一ケ月千六百六十臺以上の賣行を示してゐる。その外型の上品さと、このましい價格と、日本人すきのする車體は、この自動車の將來を約束してゐるかの如く思はれた。

江島氏は心中深く決する處があり、自動車販賣を行ふとすればこの車にかぎると見て日本ゼネラルモーターの東京モータース商會を設立して現在に至つたのである。シボレ號などその代表的製品

であるがその賣ゆきはすばらしい。その修理業もやつて居る。社員九十六名は早朝より夜おそくまで猛活動をつゞけて居る。昨年十一月の如き御大典を前にひかへて百六十臺を賣上げ、現在は毎月約二百五六十臺を賣あげる盛況である。

◇東京モータスを設立

東京モータースも今や昇天旭日の勢ひとも許することが出來るであらう。即ち東京赤坂區溜池の三角になつた百四十坪の土地の六十年間の地上用權を五萬九千圓で買入れて、近々地下共七階建延坪九百二十坪工費四十萬圓の現代的事務所の設計がなつて居る。

東京モータースは五十萬圓の資本金である。

芝浦には百六十坪二萬圓の土地を購入し一萬圓を投じてサービスステイシオン工場を設立して修理方面の仕事をなして居る。

自動車界が今後如何なる變轉を見せて發展するかそれは未知數である。然し國内の道路網が自動車の通行をその第一の條件として、改修新設せられて居るのを見ると、乘客が時間觀念の發達すると ゝもに貨物運輸に動力用工用作用として尚多分の發展の餘地を有して居ることは明白である。

二圓三圓の日給取りが毎日自動車で工場役所事務所に通勤することは或は遠い未來の夢物語りに過ぎないかも知れぬ。併し郊外の小さい煙草屋の婆さんも圓タクで驛から店先に横づけせしむることは茶飯事である。山の材木が馬車よりもトラツクで、トラツクターで運ばれることは益々多くなるであらう。フオードから英國物へ英國物から又ゼネラルモーターの製品へ江島氏はこの變轉に先じて常に又變轉して來た。時勢に敏感な氏は今後も常に觀察を怠らないであらう。

丁度江島氏は今が最も事業に面白い時であり、又狀態である。事務所に出て數多い訪問客に必ず面會し決して不快の念を抱かしめない。外人と自由に英語をあやつり紳商としての品格を有している。いづれの方面にもあれ福岡の先輩の活動の樣を見るのは吾人に限りない喜悅の感を與へるものである。江島氏の場合事業成功の裏に時勢を見るべき力が必要であることが知られるのである。

活版所の小僧から呉服商に轉じ
再度の火災に屈せず成功した
三笠屋　赤間安兵衛氏

◇笠野屋に入る

玆にまた立志傳中の人、三笠屋呉服店赤間安兵衛氏に就て話らんとす。

氏は宗像郡津屋崎町字大石の生れ併もその誕生日が明治十三年十二月十二日と云ふ奇しき數字の羅例である。嚴父は源太郎氏で農業のかたはら田舍相手に日用品雜貨店を開いて居た。徒らに雌伏をなせば凡流に惰す。氏は蓬藁の中に埋もるを欲せず、東郷高等小學を一年半にして退き、商業見習の希みを抱く内に芦屋町の森活版所に奉公口を探しあてた。しかし少年の志しは活版業にはなかつた。約半才にして博多笠野屋呉服店に見習となつたのである。

當時笠野屋主は先代藤井伍平氏で店員は約十名位であつた。この頃朝は七時から夜は十二時一時迄顧客に接し、三年間は雜巾がけからランプの掃除迄し、年俸は縞の着物と外に二圓をもらつて居た。伸びんとするものちゞむのたとへで、この二圓を一寸も使はなかつた。實家に歸る折も當時の十八錢の氣車賃を節約してテクで七里の道をあるいて貯蓄して居た。

◇野簾をわける

笠野屋の名支配人と氏が稱せられたのは二十五歳からで、時は笠野屋の黄金時代であつた。獨立へ、自營へ、伸びんとするものゝ當然の歸着である。明治四十二年、十六年間辛苦を共にした主人同僚とわかれて、氏は麴屋町に間口二間の表を間借しのれんをわけてもらひ笠野屋博多織店を開いた。この時には既に主人より慰勞金としてもらつた二百圓獨立經營に成功すれば條件付で百圓やるの一札及び貯蓄千圓餘を有して居た。當時齡は三十の働き盛り夫婦と丁稚一人の小店であつた。

自然は飽迄いたずらをこのむ。四十三年二月の火災に半生の努力の結果は一瞬にして灰燼に歸してしまつた。しかも氏は九洲沖繩八縣聯合共進會出品準備の爲め留守中の出來事である。失心した樣に氏は燒跡に立つた。一層のこと米國に稼ぎに出様と決心したが、氏の手腕を知る親族知己はこ

れに賛成せぬ。五百圓を借金して共進會期中に東中洲電車通角の表間を借、又博多織店を開き、ぐい〳〵利益を揚げ、博多綱場町に移つゝた。火災の際の借金はまもなく返濟し、商勢漸く盛ならんこしつゝある時再度の祝融に見舞れた。博多デパートの最初の笠野屋呉服店の四階層の建物と共に丸焼になり川端町に移轉した。それで赤間氏は舊主家の許しを受け博多織商を廢して呉服店を開業した。

◇努力遂に報ひらる

打續く好況に惠まれて、大正十年春支店を現在の西側向へ開設した。併し本家の笠野屋よりの、交渉により人氣を博せる笠野屋を改稱し、主家に義理立して三笠屋呉服店として立つたのである。現在本店は間口三間半、支店も三間半、綱場町の中央に位し本店は呉服專門、支店は綿布部、店員十八名年賣上三十數萬圓であり、支配人は赤間六三郎氏で二十年間同店に勤務し呉服商組合より表彰を受た、六三郎氏は夫婦の外子供四人と共に店内に居住して居る。

他の店員にても功勞者には嫁を配して現在六三郎氏の外に二夫婦主人を加へて主従四夫婦が三笠屋に仲むつまじく兄弟より尙したしく、爭いの聲一つだにもれる事なく、家族的に寢食を共にして居るのは實に近隣羨望の的になつて居る。

赤間安兵衞氏が今日あるのは蔭に大きな信仰の力が動いて居る。高野山に二回參詣し高野管長の來福の折の如き、白衣信仰姿で貝島太市氏等と共にとつた記念寫眞を見るに氏が如何に信仰の人であるかゞ知られる。

大正十三年には博多財産區會議員に選擧され、又同財産區會の解散に盡力し櫛田神社境内の博多會館建設に盡し、大正十四年には博商運輸株式會社を創立し取締役に就任し、一驛一店主義にて合同後は、博多合同運送株式會社の監査役、又昭和三年春佛敎青年會館に中央幼稚園を友人四人と寄附をして設置し、また商工會議所議員、市會議員に推選されし事數回あつたが固く辭して家業に餘念なかつたか昭和四年度の商工會議所議員選擧には四圍に推されて立候補し美事當選した。氏は今五十歳既に市内有數の呉服店主たり福岡市呉服商組合の役員の一人である。克苦報ひられずとは現在青年の一般の信念である。今三十有年の氏の苦鬪と青年等の行績を比較し反省するならば、そこに現代に巣食ふ遊惰の病菌を發見するであらう。

桶屋の弟子から福博有數な
旅館の主人になつた

高島屋先代　故　木原喜造氏

◇桶屋から宿屋

成功した事業の裏には必ず豪快なる人物の苦心と躍動がある。

福博で有數な旅館海容館及び高島屋の礎をきずいた木原喜造翁の芳はしい略傳をこゝに物する。

今を去る三十六年前、日清戰爭の當時、博多の人の口のはに牢屋の町（今の福岡橋口町）の高島屋を見たかの、「フデーガツテ五階建だ」といふ驚嘆の語があつた。正に當時福岡第一の建物で、市民全體をアツといはせたもの。

續いて停車場の新道に第二高島屋が四階建、第三高島屋が五階建、この高層建築とゝもに木原氏の名も遠近に高くなつな。八十歳の高齡で大正十年秋に物故したこの翁に今もいろ〳〵の思ひ出話が傳はる。

元來木原家は由緒深い家柄で、中興の祖は木原七郎兵衛吉次といひ、豐臣家で木匠頭となり、後德川家康の江戸城築城の際の棟梁を承はり、四百四十石取、現在東京市外大森の木原山はその邸宅跡であるといふ。その末孫博多に來住して中島濱新地に居り、零落久しきに及んだ。喜造翁は、木原家からの嫁入先である材木町の辻安次の三男に生れ、母方の木原家を繼いだものである。而してその生活苦行は嘉穗方面の桶屋の弟子に住こんだことからはじまる。年期あけて博多に歸り、濱新地桶屋を開業、これから木原家再興にとりかゝつた、貯蓄も出來て明治の時代に入り、人の來往もしげくなり慧敏の氏が目をつけたのが宿屋營業である。

◇宿屋の本支店すべて大當り

福岡牢屋町の黑田家の家老高田ドンの邸跡を買つて最初は二階建の宿屋を開業し、嫁として厨子町の安武家よりふさ女をむかへ、女房に宿屋まかせ、自分は相變らず粕屋方面に桶の輪替にあるいたとは、なか〳〵凡人のまねも及ばぬこと、男まさりのお房さん下女相手に切つてまはしたから、

近在は言ふに及ばず唐津伊萬里方面からまで千客萬來、泊り時分表には草鞋の山をきづく有様の繁昌ぶりであつた。喜造翁の各村よりの賃金は、盆と節季に米でくる始末で高島屋の表庭は俵の山をなした盛観だつたと云ふ。

西南戰爭の際もシコタマ儲け、資産はふへて擴張の必要に迫られて膽つ玉の太いところを示し、丁度新築祝ひの時に當時の福岡署長湯地武雄氏は海容館と命名した。一方博多驛が出來て以來、その附近の發展を見越して土地を買しめ第二第三の高島屋を建てゝ第二はお久さん第三は義妹のお花さんにまかせいづれも大當り、發祥の高島屋は實弟辻儀平氏に讓つて萬歳館となり、一家一門旅館業として人もうらやむ發展をとげたものだ。翁は桶屋やめて財産の造成管理に力を注ぎ、安い土地を買入れては材木をドン〳〵引いて貸し家建築に掛かつた。小林寺裏の貸家の如き、小林寺維持費のために地を借り、それに家を建て借地料を充てたものである、停車場附近の如き多數の貸家あるは、皆自分の腕を主として、大工を指揮して建られたものである。

◇現在の木原家一統

現在の海容館主木原喜三次氏は前名を西川保楠といひ和歌山縣井ノ口村の舊家の人で、高野山の大圓院に行儀見ならいとして上つてゐたのを凡器ならずと見込で、高野參詣の喜造翁が貰ひうけ、養女の養子に迎へた人。喜三次氏長じて今こそ市會議員、南消防組頭、前福岡市旅館組合長といふ様な肩書の紳士だが、最初二三ケ年の如きは喜造翁の試練に會ひ、雑巾がけからランプの掃除までさせられたといふ。この試練を突破して大事な婿殿となつた彼も亦我慢強い人ではある。高島館本店は女丈夫のお房さんにより基礎も出來、繁昌もしたが女房の他界後は木原喜三次氏の手によつて今日をなし、喜造翁は第二高島屋を本據とし、甥にあたる新免利助氏の二男晴雄氏を幼少より養子として身後を託することゝした。これが現在のチヤキ〳〵木原晴雄氏である。

氏は現在福岡市賃貸價格調査委員に擧げられ、今回も高點を以て博多商工會議所議員に選ばれた。前途を囑望さるゝ三十歳の青年紳士だ。市議選にも、その手腕を認むる人々が大いに慫慂したが本人は自重した。一見俳優に欲しいやうな美男子であるが、一旦口をひらけば舌端するどの雄辯家だ夫人は評判の美人で內助の功厚く氏は專ら外に飛び廻つて活動をする。

斯の如き木原家一統の平和と繁昌は總てこれ、故喜造翁が胸中の計を施こして餘さず、その人格の

高島屋先代　故木原喜造氏

餘薫に負ふ處多きは言ふ迄もない。翁や酒盃を口せず、仕事に對してはあくまで嚴勵、算盤道にかけては常人のおよびがたい天才であつた。隨つて他人に臨む場合も誠を買、奮闘を買ふ人であつた。

併し石部金吉の類でもなく、好男子晴雄氏を養子にして以來、毎年のドンタクに高島屋の挽物を押し出し、妍をあらそふたことは名物の一つとなつた位、一方信仰の念あつく、新四國には至る處木原喜造の名前あり、公益につくす寄附行爲は數へきれず、一の瀧前の翁の銅像はこの記念である。

翁の訓話に曰く『借金は負へるだけ負へ。そしての借金をかへすためにドン〳〵働け。借金がないと働きがにぶる』と。成功する人の借金哲學として、面白いではないか。

神官の次男坊から九州唯一の呉服卸商になつた
實業家　木梨久太郎氏

◇呉服商袋屋の店員見習

伊藤長、田中丸、紙與なきあとの福博呉服卸商界に孤壘を守つて年額百五十萬圓以上の商賣を續けてゐる木梨久太郎氏は奮闘主義の精粹である。然し自らの事業は豪勢ではあるが、勝者の悲哀に流石襲はれざるを得ない。强敵がほしい力一杯の競爭相手を作りたい、とは木梨氏の多年の願望である。福岡にもう二三の卸商があれば年額千萬圓程度の取引は易々たることだとは氏の持論である。

この木梨氏は粕屋郡小野村の二十八代續いた神官の出である。德望を以て福岡市會に重きをなしてゐる。その公明なる心事と一種の嚴格さを有して居るのは二十八代間の血統によることが知られ

る。

小學時代既に緻密な明敏な特質を以て同輩に傑出して居た。教師は頻と中學に入學して上の學校に進むことをすゝめたが嚴父は長男は農、次男は實業、三男は學校と深く決する處があつた。二男である木梨氏は十五の時嚴父の氣持とぴつたり合つて自ら商賣人で身を立てたいと決心した。やがて博多綱場の呉服商袋屋に商賣見習として入つた。年期十五年間の修業は氏に言はすれば實業大學であつた。袋屋は相當金が出來たので商賣なんかして多くの人を使つて居るのは面倒だと店を疊むことになつた。

木梨氏は既に二十九歳であり、腕には自信があり、心中に燃ゆる事業慾があり。下西町に十三圓の借家を見出して卸商を始めた。

全く赤手空拳の商賣の出發である。然し性來の明敏な頭腦を働かして巧みに商機を捕捉して行つた。新舖にて向年額五六萬圓の賣上をば示すことが出來る樣になつた。

この時木梨氏の念願は一年間百萬圓の賣上げのある商人にならなくてはならぬと云ふのであつた。

安く仕入れて安く賣るは、何商賣でも繁昌の秘訣であるのに違ひはない。當時他の卸商は仕入れ先に對しては買つてやるのだとの態度を取つて居たが、木梨氏はこれと反對に賣つてもろうのだ。なるだけ安く賣つて貰ふのだとの氣持で仕入れ先にあたつた。

綿密な計數的も而も放膽な商策を以て猛活動をつゞけて筑前、筑後、肥後、肥前、豊前、豊後、足跡至らぬ處なく、開業後十五年には初期の祈願の如く百萬圓を突破する年賣上を示すに至つた。

◇成功に導いた氏の二商策

氏の商策の裏を流るゝ二つの特質は

一、貸借關係あるものは親類と見る先方の繁昌はこちらの成功だと云ふので中には隨分損を見越ても得意先きを助けた。

二、唯一銀行のみと取引する。

商人は多くの資本を得る必要上、三四の銀行と取引することはめづらしくない。然し木梨氏は福岡に住友銀行の支店開設以來ずつと取引は住友のみと行つた。他行より色々と觀誘もあるが、斷然

ことはつてゐる。これなど一寸他店のまね得ぬ處である。

大正九年に財界のパニツグが襲つて大商店が枕をならべて破産すると云ふ慘狀を呈した。木梨氏にもやはりどうしても貸付金回收の見込のない得意先きが生じた。そんなのは例外として先方がたをれるのは結局自らの破滅を招くといふので、極力その回復に援助し、六十日の拂は九十日百日とまち、かたはら地盤の固定にかゝつた。不良な取引さきは一掃され十、十一、十二年と尙固定主義を以て進んだ。

不景氣といつても、もう財界は落つくべき所にきた。木梨氏は往時の積極的商策に歸つた。玉屋が不二屋の强敵を得て、かへつて客足しげく、松屋も尙賣上の增加を示して居る時。卸商界にその好敵手を見だし得ぬ木梨氏は實に寂寞の感に堪えぬであろう。「卸商の出現には極力後援したい、そして追つ追れつ花々しく戰ひながら相提携してゆきたい」との氏の心事にはたれしも同感であり、氏の語るが如くそれは福博商業の殷盛の基ひであろう。

◇公人としての氏の活動

政治が所謂政治屋の手を去つて、社會の重要な構成層に働く人物が第一線に立たねばならぬ時代がきた。商賣に無理解なもの丶施設は商人の希望を滿さない。木梨氏は既に財豊かに餘暇を有するに至つて、大正十年四月市會議員に立候補した、

(一)稅務所の對商人の課稅の公平

(二)博多海岸通の繁昌

(三)三百年の間依然たる博多本通をせめて五間幅の道路たらしめたい

の三箇條を政見として最も市民の熱望する所を見拔き又自ら熱烈にその實現を希望したるが故に美事最高點で當選の榮譽をになつた。

十四年再び立候補し最多數の高點を得て當選し、又昭和四年も最高點を以つて當選してゐる。純福博商賣人たる見地に立脚し、勇敢にその利害のために終始し、何者にもわづはらされず、邁進する市會議員を市會に物色するに第一番に指析るべきは氏であることは何人も否定し得まい。

大正八年以來現在迄は所得稅調杳委員に引續き當選し、大正十一年以來福岡吳服商組合長、同じく十一年より紙與が閉店以來九州吳服卸商組合を副組長の名を以て牛耳つてゐる。

藏本町總代は已に九年の久しきに亘つてつとめ、大正十四年は下水工事を完成せしめ、昭和二年には藏本町一帶の木煉瓦の舗裝を成就せしむる等の業績をのこし、昨年外的活動の多忙に要求せられて遂に適任者にその職をゆづつて辭退した。

福岡に於いては商工會議所が市役所を引づつてゆかねばならぬ、といふのは氏の持論である。近來會議所が漸次積極的な態度に出てゐることを喜び、尙この上に活動せしめねばならぬとの意見を持つてゐる。

◇私人としての氏の活動

藏本町現在の店舖は、大正十五年の新築、その一角に切手と煙草の販賣所あるに通行人は奇異の感に打たるゝに相違ない。これは同店の店員見習者の人物養成の場所であり、何等の干渉を受けることなく收支を店員にゆだねられてある。

氏は店員に「主人のために働らくとは思つてはいかぬ自己のために働け」と毛色の異つた教訓を與へる。同店の戰鬪員は皆小供時代から所謂木梨式に鍛えられてきた人。中尾支配人の如き二十三年勤續其の他二十年十八年といふ人が多い。現在本店店員二十一名、甘木支店は令弟東京高商出の藤井督藏氏が之を主宰し、店員九名朝倉一圓の呉服商界に雄飛してゐる。

博多幼稚園に對する氏と夫人の共同の隱れたる方面の美行は今は世人周知のことである。こゝに氏の孝心を物語る一つのエピソードがある。

木梨氏が店持ちとなると、鄕里の嚴父がよく訪ねてこられた。木梨氏は嚴父に商賣の內面の苦しいことなど露程もあかさない。開店早々父親を安心さすために、金が餘つてゐる樣な話を聞かせたすると嚴父の曰く、

「商賣人は今日派手にやつてゐても明日裸一貫にならねばならぬかも知れぬ。聞けば金廻りがよいらしいから今の內一年中家內の食ぶちの德米の取れるだけの田地を買つて置け」。といふ話、買はねば老父を折角喜ばしたのがうそになる。この約二千七百圓の金策が、木梨氏の生涯で最も苦しい思ひ出であつた。然しそのための三十俵の德米が基となり、其後漸次田地が買加へられて、現在では多額の與米が每新年小野村から運ばれてくる。

氏の隱れたるもう一つの事業は博多信用組合の樹立である。これは氏及び二三の人が中心となり

五千圓を資本金とし、八十萬圓の預金七十萬圓の貸出しのある全國に例を見ない特色ある組合を組織したものである。八年前の創立で一萬圓の頼母子講二百口を作り七十二ケ月後には二百萬圓の金が集まる筈で、規定によれば當然其の後解散すべきであるが、氏は尙組合の仕事を續けしめたいとの希望を有してゐる。今日迄貸出して囘收のできなかつたのがないのは、實に氏始め當事者に對する一般の信用をうかがひ知り得る例である。

「靑年よ野心に滿てよ」とは新渡戸博士が靑年に與へた敎訓である。

氏も人生は向上心で貫けと敎へる。飽く所を知らずに、止まることを潔よしとせず、發展の上に尙發展へと精進してゐる氏は仕事はこれからだといふ。得意の時尙虚心謙抑實力と德望を兼備し、浪費を斥しめて尙財を散ずべき所を知る。氏の將來には世人をあつといはせる素晴らしい成功が訪づれるであらう。

福岡は光輝ある將來を有する都市こゝが舞臺だ。商賣と政治への美事な氏の大刀の使ひ振りを、吾人は刮目して待つてゐる。

漂浪の商務見習から福博海運界の第一人者になつた
貿易商　北　愛　藏　氏

◇學問を斷念して商人に志す

福岡市の發展を論ずる時、話しは何時も博多築港問題に歸着するのが常である。博多港をどうにかしなくてはならぬと云ふのは數十年來の福岡市民の宿望であつた。幸ひに官民合同協力の結果、昭和四年度より、愈々築港工事に着手する事になつた。

事をこゝに至らしめた諸因の中に吾人は、博多築港期成會の活動を忘るゝ事は出來ない。この期成會の會長こそは今こゝにものせんとする北愛藏其人である。

福岡市民の築港に對する關心を強く呼び起して、幾度か上京しては當路の官廳に請願し、東西奔走して築港改修の事實化に盡力した氏の功績に何人か尊敬と感謝の念を抱かないものであろうか。

『隱れたるより顯はるるは無し』と云ふ言葉がある。北氏も現在は押しも押されぬ福博の一流の紳商である。然し氏の今日に至つたのは決して偶然の結果ではない。

北愛藏氏は明治十二年十月三日、佐賀縣杵島郡武田村字梅野に生れた。父は善平氏と云つて氏はその四男である。父君は舊藩士武術に達者で郡役所につとめてゐた。氏の八歳の頃地方銀行の破產があり、引續いて善平氏の關係してゐた武雄工業會社の失敗となり、氏の一家はその餘波をうけて隨分苦境に陷つた。氏の少年時代は實にこの苦境時代に過されたのである。

小學校を出たが勉强がしたくて仕方がなかつた。愛藏氏は親戚の山口仁平と云ふ人が、熊本の聯隊に入營してゐるのを賴つて、熊本に行き、熊本中學に入學すべく豫備校に通つた。

然し鄕里からは何一つ送つて吳れず、親達も歸鄕を强ゆるので、年若い悲しさに無理も言へず再び佐賀に歸らざるを得なかつた。村の靑年達と共に百姓になつたのだ。

田園は靑年を愚かにする。自然の懷では人間は成長する永遠の小兒である。氏はどうしても土臭い田舍の生活に愛着を感ずる事が出來なかつた。

十七歳の折遂に商人になつて身を立てやうと決心するに至つた。

◇成功を急ぐ父と子

父善平氏もどうしても家運を挽回したいと云ふ熱望を有してをり、愛藏氏は立派な商人にならうと希望に燃えた。故に鄕里の家業を長兄にまかして、父子は共に唐津に轉住した。そして丸二商店を起し、日用品の販賣をなし、善平氏は對島に鮮魚の仲買をして出た。

然し所謂『武士の商賣』でうまくゆかなかつた。或る時の如き、善平氏は對島でしこたま鰤を買ひこんだ。無鹽でもつてくれば難なく賣れるのを、鹽づけにして來た。善平氏は鹽した方が腐らぬから安全であると思つてゐたのだ。が事實は鹽をしてあるが故に仲々に賣れない。愛藏氏も鹽鰤の賣捌きにほとほと閉口したといふ。

間もなく善平氏は病氣になつたので一同は鄕里に歸つた。やがて母堂が死去され、善平氏も遂に志をとげず永眠してしまつた。

時氏は二十五歳であつた。

◇漂浪の實務研究

氏はこれを機會に又家を出て、佐世保に穀物問屋を開いたが、都合よくゆかなかつた。これから氏の漂浪の實務研究が始まる。大阪や神戸の商店を轉々して、約二ケ年間、商業實務の根本を修得した。

二十八歳田川郡の後藤寺に來て、中島德松氏の炭坑の賣勘場を經營し、又他方石炭の販賣にも手を染めた。これが氏と石炭を結んだ最初の機緣であろう。こゝは最初事業は順調に進んだ。が遂に不況のために失敗した。

二十九歳大谷炭坑で又賣勘場を開き、自らは炭坑の事務員として働らいたが、炭坑が經營難に陷り、坑夫も事務員も皆逃出し、氏ががらんとした家に獨り殘つた。

氏は轉々と場所に移るの不利をつくづくさとり、博多に本據を置かうと、決心したのは三十三歳の折りである。

卽ち地行西町に家賃拾五圓の家を借り、三井物産の販賣人となつた。當時三井物産の博多に於ける仕事は、現在の鐘紡に石炭を納めてゐた位で、この石炭も古川合名會社の石炭を（高田炭坑の産）物産の名で賣つてゐたのである。

◇福岡市に本據を置く

氏は大牟田に行つて物産の支店と種々交渉し、三井炭の博多に於ける販路開拓を依賴された。氏が今迄に習い得た全商才を發揮して、荷物の積み出しも、販路の擴張も、外交も獨りでやつてのけた。

當時福岡西新町炭坑（現福岡炭坑）は長崎の松江九十氏の所有であつた。氏はその一手販賣權を三井物産の手にをさめ、朝鮮大阪方面に販路を廣めた。當時福岡炭坑の粉炭のストックは山をなして其の上には草が被ひ繁つてゐたが、氏の奮鬪でこの貯炭は一掃され、全部金にかはつた。

大正元年頃一萬數千圓の利益を得た氏は、斯界に大いにその手腕を認めらるゝに至つた。

又姪濱では、ボウリングを打ち初めた。一方海岸に石炭積込場も出來たが、資金難に陷つた。氏はその四分の一の權利を五萬圓で買收し四人共同で經營する事にした。この石炭の一手販賣權も三

井物産に交渉し、三井より資金の融通を受けて經營に當り。姪濱炭坑はやがて株式會社に變更され、五十萬圓の資本金を有し今日では二百四十萬圓になつてゐる。

氏は一時姪濱炭坑から手を引いた事があつたが、現在では常務取締役として活動を續けてゐる。

◇北商店の發展

大正三年六月事務所を博多千歳町に移し、事業は益々發展した。次いで稅關前の三井物産出張所に轉じた。取引が多くなつたので、物産からは駐在員が博多に來る事になつた。故に家を二分し角を物産の事務所にし、隣りに私用にあてた。

大正八年八月、名を北商店と改稱し二十萬圓の株式組織にし二分の一拂込みで活動する事にし、り、社は殆んど全額拂込みになつてゐる。業務は、米穀、肥料、石炭の輸出入及販賣運輸業にわた現在で員十四名を數えて取引年額七十萬圓と稱せられてゐる。

氏と博多海運界とは切つて切れぬ關係にある。

明治四十三年博多人士は福岡市の今后の發展は如何なる點より見るも博多築港の改修より出發せねばならぬ事を痛切に感じた。大正十四年十二月築港流れでは、大濱晴心館に有志が集まり、築港發展期成會を創立した。これ實に北氏の力である。其後同會は猛烈なる促進運動を開始した。氏はこの會長をして又市の築成委員として幾度か上京し、當路の了解を求めた。園琢麿男の如き氏の該博なる築港論にすつかり感心して、福岡にもあんな人物が居ると感嘆これを久しくしたと傳へられてゐる。博多築港改修は昭和四年度に於いて政府の認むる所となつた。期成會の目的は八分達せられたのだ。

又一方氏は朝鄭の博多寄港を實現せしめた勳功者である。昭和二年四月、朝鄭は定期的に寄港する樣になり、博多港の貿易額は從前に比して頓みに增加した。近く復航の寄港も往航の度數と同じくなつた。かく一つ一つ博多港の繁昌の策が講ぜられてゆくが、その蔭には必ず北氏の盡力がひそんでゐる。

氏は現在北商店の代表取締役、北九州商船の取締役、姪濱礦業會社の取締役、朝鄭の博多代理店主である。本年も引續き商工會議所議員に選ばれ交通部長として活動してゐる。

博多築港と共に北氏の名も又不滅であろう。今後も築港事業で氏の盡力を俟つものが少なくない。

數理的頭腦と筑前浪人の風格を有して自動車界に活躍する

實業家　岸本重任氏

昭和二年の春、大濠のほとりに福岡市が太つ腹を見せて東亞大博覧會を開催した。殆ど全國から博多小女郎波枕の博多の港をあこがれて、福岡市へ福岡市へと見物人がおしよせて來た。九州第一の文化都市、西陲の雄都などゝ盛に氣をはいて見たか、電車は鈴なり田舍者は乘車する機會を得ない。若しこの時福博タクシーの乘合がなかつたら、福岡市はどんなに大都市としての自負心を傷けられた事であらう。巨大な下女の尻の格好の大型バスは、道路の幅員の狹い福岡にはどうしても不似合である。博愛主義の輕快な福岡市のバスは、博多人の氣性を表はして實に氣持よく一般の好評を得て居た。

◇日本生命に入社

この福博乘合自動車は福岡が生める壯年實業家岸本重任氏の經營する處であつた。不幸昭和三年の七月今川橋の車庫が失火して、一夜の中に灰燼に歸してしまつた。其の後しばらく福岡人士はかの小型バスに親しむ機會がなかつたし、御大典を期して新裝の以前より少し大型の乘合自動車が福岡に運ばれて、松の内の屠蘇きげんの訪問客もその深い湖の青綠色の肌色に、純白な線をいれた岸本氏の自動車が、今川橋から箱崎に動くのを見て、萬歲を浴せてゐた。吳服町の銀行街を電車を後に失禮してさつさと追越してゆくバスは、確に一沫の文明都市らしい景色と情調をば、福岡市に漂よはせて居る。

岸本重任氏は明治二十三年二月二十三日福岡市因幡町二十六番地岡崎英之助氏の長男に生れた。英之助氏は元黑田藩士岡山市の警察署長をやつだが、後新興の炭鑛業に手を染めて不幸失敗し、家產を傾けかけたが故に、家庭は左程裕福ではなかつた。それにしても大名尋常小學校を經て商業學校に入り直に上京して中央大學に入學、大正三年同校を卒業し、直に當時片岡直溫氏の直轄する日本生命保險會社に入社し、元福岡市長久世庸夫氏の元に契約課に勤務する事になつた。雌伏時代がこの時である。併しその手腕を認められてやがて片岡氏の秘書役となつたのである。

此の頃から氏は少々頭角を擡げて來た。青年社員連中が七人組を組織して幹部級の橫暴をこらす事を計畫し自ら弱輩を以てこの組を牛耳つた。

◇黑龍會の內田氏を助く

やがて片岡氏は日本生命を引退した。政界入りをした久世氏も片岡氏と共に日本生命を辭した。大正十二年久世氏は福岡市長として鄕里に歸ることになつたが、この裏面の策動の立役者は岸本氏であつた事は餘り知られてゐない。當時一面思想界には稀有の大變動が起つた。北なる國の怪物と稱せらるゝ主義が、神國日本の民の心根深く植付られたかと思はれた。憂國の志士は決然として立つた。併し省みれば惡思想のはびこるは所謂社會主義者と云はるゝ一部のものゝせいでなく、元兇ご目すべきものか或は自ら國政の要路に座する士の不善に由來する場合がないとは限らない。惡思想をば日本の國から根こぎにして追拂へ、要路の人物であらうと、よこしまなる奴はやつゝけろとの覇氣に燃えた。黑龍會の活動はこの產物である。卽ち野田大塊、杉山其日庵、內田良平氏等がこの主腦者であり生みの親である。三氏は岸本氏の所謂空莫としてとらへ所なく、而も正義の念に燃えて烱眼な處を見込んだ。そして黑龍會の專務理事に來らんことをすゝめた。氏は先輩の知遇に感じて直にその幕下に馳せ參じた。

ザ、イスト、エシア、レビユウ、並びに東亞時論などを主掌して大いに海外に日本を紹介した。黑龍會の事業は生命を賭してかゝらねばならぬ。大親分內田氏の片腕となつた。併し若し男子にして大志あれば、野心に燃ゆる血潮の通ふ者であれば、少くとも實業界に足を踏いれなくては滿足出來ない。

◇乘合自動車業に活躍する

自動車の黃金時代來、フオードは全く都會から姿を消した。高級車がどん／＼海外から輸入される。併し都會地に橫行する巨大なる乘合自動車の間を行く小型タクシーの必要がある。こゝに着眼した岸本氏は又深く自ら覺る處があつた。卽ち野田大塊、石丸鐵道次官、大木遠吉伯、和田豐次、鄕誠之助、內田良平、馬越恭平、喜多又藏、林市藏其の他の第一流の實業家の後援を得て、大阪小型タクシー會社の創立を見た。氏自らは專務取締役に選ばれた。しかしその後自動車界には幾多の

波瀾曲折が重ねられた。斯界の手腕家は次ぎ々々に失敗した。圓タクが出でし、半圓タクが縱横に驅馳する樣になつた。尙高級車を購入しなくては乘用者が少い、今自動車はいかゞです、儲かりますかと云へば少くともその方面に經驗ある人であれば頭を横に振る。今は自動車營業は運轉手を養ふだけだ、自動車購買費だけは結局損をすることは斯業者が續出したのを見れば明かである。

この不況時に當つて大阪小型タクシー會社は尙依然として一割二歩の配當を續けてゐる。岸本氏の手腕はこれを以てうかゞひ知る事が出來る。

一半氏は尙帝都に於いては內田氏を助けて、黑龍會の爲に活躍して居る。內田氏が京都に學校を建てゝ英才敎育をやつて居る半面にやはり岸本氏の働きがある。

我等の先輩の特色はその鄉土愛の精神である。岸本氏もこの點に於て唯にも劣らないのである。福岡市は自分の鄉土である。大福岡市交通の一助として福岡市にタクシーを經營するのは福岡縣人としての任務であると信じた。

西公園に八重櫻のこぼれ咲く昭和二年の春自ら社長として福博乘合自動車會社を起したことは今川橋の車庫が烏有に歸して車を全部消失し作秋の御大典を期して又福博乘合自動車を復活したことゝ共に先に述べた。

四十の分別盛りと云ふ言葉がある。保險會社で民政黨の藏相たりし片岡氏の下に數理的に鍛へて來た頭と、內田良平氏一味の所謂膽計るべからざる筑前浪人の風格に接してきたへて來た度胸を持つて居る。昨年末大阪自動車組合を强制組合に變更して其の副組合長として活躍して居る。又、我が國唯一の社交倶樂部である。東京交洵社の社員であり、大阪淸交社の評議員であり、其外大阪キンタク自動車會社の重役で目下資本金壹千萬圓の自動車合同計畫中である。氏の眞實の活動はむしろ今後にあるべしと思はれる。日頃氏は大阪に住む。大阪每日新聞社からちよつと入つた處の大阪小型タクシー株式會社の重役室で、事業計畫に餘念がない。典型な樂天家であることは筑前人の通有性であらう。切に氏の自愛と活動を祈つてやまぬ。

奇骨三隅氏

◇三隅雲濤君が家族移民として南米ブラジルに行くとの噂が福岡の知人間にひろがつた時、無鐵砲にも驚くと心配する者もあり、三隅がやりそうなことだと感心する者もあり、區々たる批評の中に本人は飄然告別に來り且飄然として去つた。昭和三年四月彼故國を去る。

◇彼は福日、九日の間に介在して約十年間、博多毎日を經營したが勞苦酬はれず、解散後九州評論を出し、四年前東京に去り萬朝報の經濟部長から同社の大阪支社長に轉じ、次いで編輯局長にとの交渉を斥ぞけて辭表をたゝき付け、郊外に閑居すること一年、今度の南米行はその後の鮮やかな方向轉換ぶりである。

◇彼の覇氣滿々たる資性に配するにその運命はあまりに苛虐だつた觀がある。新聞經營も政治界進出の希望も何一つ充たさるゝ所がなかつた。これも彼の性格が淡白、無執に過ぎ、緻密なる打算や、不潔なる行動に適しなかつたことに因するらしい。だが本人は半生の勞苦がゼロに歸したといつても平氣なものだ。根が樂天家だけに成敗も一向苦にならぬらしい。

◇同窓の友人仲間から七八名の代議士が出て居り、その連中が出發に際し東京で送別會も開き同じくブラジルに行くなら、その内に二三の拓植會社も出來ることだから、そのマネーヂヤーで行つたらどうかと切に勸められたさうだが「おれはあく迄移民として行き茲三四年汗と血の忍苦の生活をやり、然る後事業に手をつけるんだ」と頑張り滔々信條を批瀝して仲間を感服させたといふ位、彼れは依然たる生一本の理想家ばりだ。

◇年齒五十に近く子女五六人を有し、而も中學生のやうな元氣と抱負を持つて天涯の地に押し渡る所、月給や地位に懸命にかじりついて能事足れりとすを連中と趣むきを異にするものがある。

◇彼れは恐らくブラジルの曠野で命を終るだらう。蓋し島國日本人の墳墓の地として彼にはふさはしい所である。

獨特の宣傳で不景氣に儲け
福岡松屋の名を賣つた

吳服商　宮村吉藏氏

◇松居に入る

商賣の常軌といふのは概して好況に、もうけて不景氣ではき出すのが定理であるが。不景氣でもうけて全市の商人にうらやましがらせ記念賣出しにはその附近に市が立つまでに成功したのは、福岡橋口町の松屋の爺さんこと宮村吉藏氏である。

松屋の爺さんは今年四十九といふ盛り、明治十四年一月十六日に近江神崎郡北五箇庄の久藏氏の次男に生れた。嚴父は素朴なお百姓であるが近州は名にし負ふ商人の本場である。吉藏氏は土の香よりも算盤の球の音がその胸底に印象深かつた。義務教育を受けたばかりの十二歳の時、志をたてゝ京都に出て、博多松居博多織支店に見ならいとして入り、實社會に振ひ出された。

十七歳の時嚴父の不幸に遭ふて悲しんだが、しかしきかぬ氣の吉藏氏ば、增々奮勵して十八歳で博多の地を踏み、松居の本店に販賣係仕入れ係として十八年間勤續した。三十歳の六月一本立ちとなるべく松居の退き、橋口町（今の店）間口二間半のモスリン店を開いて、夫婦仲むつまじく商賣にいそしんだ。松居の恩を忘れぬ爲め松屋と號をつけだのである。

◇獨立開業

創業の難は倂し何事にもつきさうものである。吉藏氏は愈々開店はしたもの丶、幾度か悲境に陷つた。そして挽回の道なき如き前途を悲觀して、二度も海岸にたつて身投げしやうと決心した事があつたと云ふ。

吉藏は、その度每に死ぬ程の覺悟があれば、どんな不景氣でも切り拔けられぬ事はないさ、思ひ直しては、投水自殺を思ひ止まつた。

近州商人のきかぬ氣と、衆人にすぐれた手腕を有する氏は、やがてぐん／＼と腕をのばし始めた。小モスリン店は日々繁昌し、開業三年にして、博軌電車道の殘地三十坪を坪四十八圓五十錢で買ふた。開店當時は松居からもらつた慰勞金五百圓の資本であつたのが、三年にして千四百五十五圓の土地を買ふやうになつた。吉藏氏のやり方は成功者の多くが經驗する漸進主義である。三年每に擴張する。次の三年後又三十坪その後にも又三年後に發展し三萬五千圓の洋館をきづき、三年にして極樂寺町側に伸展して二萬圓の三階建を增築した。今では橋口側三間六合電車道側六十間二百坪の敷地になつて營業所は延坪二百五十坪のひろさであつた。家族六人の合名會社とし、公稱資本十五萬圓、店員百十數名で吳服洋服雜貨等を安く賣る店として、人に知られ一年の賣上百五十萬圓さは太りも太つたものである。

かく吉藏氏が短期に成功した蔭には二つの原因がある。一つは松屋は福岡で一番安くうる店であるといふ事を事實と宣傳とで近傍によく徹底せしめた事と、折々の大賣出しが購買者の心理とぴつたり合つてゐる事である。

安く賣るには仕入が大事である。吉藏氏は織元に行く時、途中の費用は出來るだけ節約して先方では現金を見せつけて、出來るだけ割引させる。先方でも注文の量が大きいから、倂かも現金だから思ひ切つて引く。斯て所謂松屋値段と稱する、飛切りの安値で商賣が出來る譯である。

大賣出しの結果は、時と宣傳の如何による。而かも松屋の店全體が極く大衆的雰圍氣にある。さらし五尺買ふ人も千圓の買物する人に、何等氣が後くれる必要がない様な店である事も今の成功ある一原因である。

◇松屋の爺さん

吉藏氏は今では松屋の爺で通つて居る。趣味は勤儉力行そのもの丶他にはない。戊申詔書を體現せんと次の家訓を定めた。

義を先にして利を後にせよ。
店の繁昌よりも客の便利を計れ。
利益を思ふよりも信用を重んぜよ。
賣方の心とならず買方の心となれ。
商品を賣らずに親切を賣れ。

氏は二期引續き商工會議所議員として斯界に盡瘁し、又公共事業にも力を盡し、福岡市各小學校御眞影奉安室建築に一萬五百圓、郷里の鐘樓に三千圓を寄附したなどは、その著しい例である。

されば昨年の二月紺綬褒章を授けられ大いに面目を施した。爺さんは感謝の念にあつく、勤儉力行の意志の人で、社會奉仕と三拍子揃つた紳士である。氏が如何に商才にたけて居るかは松居で經營して居た松葉屋デパートが不況に苦るしんだ際、専心努力しその難局を切り拔けた一事でも窺はれる。

松屋が三年毎に擴張することは先述した。今年も隣接地に敷地を買收し、日本館をコンクリー三階建に改築し、又橋口町側に一大增築を斷行した。尚最近春吉に松屋第三支店を開設して居る。博多部に比し、いくらか遜色ある福岡部の呉服商界に、獨り宮村氏が頑張つてどん／＼と繁昌を續けて行くのは、實に一偉觀である。そして福岡市の南玄關の天神町の九鐵の停留所はすぐ、目近にある同店の將來は期して待つべきものがあらう。

小間物屋で炭坑鐵道迄に手をだし紳商となつた事業家 故 下澤善右衞門氏

◇博多氣質商人の一人

福博の商店界には、日々他國人の勢力が伸張して、博多舊來の豪放しかも優雅な風格をそなへた商人タイプは漸次消失しつゝある。玆に福博三元老に數へられて居た故下澤善右衞門氏を偲び博多式旦那タイプを現在に甦らし偲んで見やう。

善右衞門氏は嘉永二年二月生れであつた。老境に進んでも頭に白髮を交へず、齒も强く常に年を問はるれば七八歲。若く答へて、それに何人も疑ひをいれなかつた。勿論若い氣持は活動を意味し、活動は勇壯なる精神と健康なる體を暗示する。しかも內心人を吞むの慨あり、談懷古にわたれば帆船で玄海內海を鷗と艫の音を慰さめにして大阪に仕入れにでたことが、氏の微笑を含んだ溫厚そのもの﹅口から生れてゞるが常であつた。今は氏も亡き人の數にいれて、再び博多に德川末期の商風を味はつた人を得難いのには一種の寂莫を感ぜざるを得ない。

氏は晩年住吉の別邸に茶室をきづいて、雲行に永遠を反映せしむる月光下に、蟲の音を聞き、池中の微波ゆるぐ時。茶庵の孤窓を通じて心寛やかに松籟を聞いた。實に自然に參する古哲人のおもかげをうつして心にくいまでゆかしいものである。

業は唯知らぬ者もない中間町菱屋の小間物商である。菱屋は本文の主人公善右衞門氏の先代同名の善右衞門氏の開始にかゝはる。昔日は九州一圓にわたる廣汎なる取引先を有した。この頃は即ち博多仲介商の全盛時代であつた。舊幕時代市井の民は絹布の使用を禁じられ、これで武士は漸く商人より受くる經濟上の壓迫に對する腹いせをしてゐたのである。商人はこれが故に、その不滿を煙草入や紙入の贅澤を以つて晴らした。明治維新が到來して、藩の制度が撤廢せらるゝと共に、專らにして、裝身具に手がとゞかず、以前ほど珠玉類の高價品が賣れなくなつた。が反面衣服との對照上女の髮道具等一般に贅澤になつたので隨分利益を上げたと云ふ。

卸商を續けてきたが、小間物界にも變動のあるは當然で、生活樣式の變化と共に裝身具にも又めまぐるしく形に於て質に於て移動があつた。善右衛門氏の長男善太郎氏は父にかはり、現在は善太郎氏の長男平太郎氏の代である。平太郎氏は現代的空氣を吸つて居るだけに、その商風も自ら前代に異なる處があり、博多商業界の中心地壽通り最新の小間物雜貨商を新設し、飛躍的發展を示して居る。善右衛門氏は昭和三年の四月遂に世を去つたことは同店將來の爲めに一つの悲事であつたに相違ない。

◇夥しい關係事業と公職

こゝに氏が商業外にいかに公職につとめたかを一顧するも又意義あることである。即ち明治十二年博多各町聯合會議員、十八年博多共有金穀府蓄保存總代、十九年再び博多各町聯合會議員、二十年福岡勸業會博多區町會議員福岡區所得稅調査委員、二十一年商業學校商議員、二十二年福岡區所得稅調査委員同年市制實施と同時に市會議員、二十三年五月博多財產區會議員、徵兵參事會等、二十四年博多商業會議所議員、二十九年博多財產區會議員、福岡市區改正調査委員三十五年營業稅顧問委員である。

會社方面では明治二十八年に筑豐興業鐵道株式會社の常議員に次には田川採炭株式會社重役、二十三年より四十一年までは博多築港株式會社々長に就任して居る。

受賞としては田川採炭會社より慰勞金一千圓、筑豐鐵道會社より一金貳百圓、筑豐と九州との合併には慰勞金として銀盃一組、九州鐵道國有の際は從來の功に對し二百圓の謝金を得て居る。四十一年には博多築港會社より銀盃一組金八百圓、博多電燈と福博電氣軌道株式會社合併に際しては慰勞のため銀盃一組、福岡市小間物商の愛榮組合よりは銀盃一組等、數へきたら限りもない。福岡市博多築港特別輸出入請願事件については報勞として大木盃一個を受け、明治四十四年には濟生會へ巨額の金の寄附のため大正六年の福岡縣下に於て擧行せられた特別大演習の際には特に觀兵式陪觀を許され且大饗宴に參列するの光榮に浴して居る。

◇雄心勃々たる事業振り

善右衛門氏の運動の最も大なるものを想起して見る。その隨一は炭田封鎖解除の問題である。昔

日本工業の母、筑豊炭田は海軍の御用炭として全部封鎖されて居た。しかし資本家の擡頭と工業の進展は官有炭田も封鎖のまゝにして置くことに甘んずることが出來なくなつた。遂に一市五郡の有志運動となつたが、下澤氏はやはり故人の大山與四郎氏とゝもに上京し、金子堅太郎子爵安場知事をたゝしめ、四方封鎖打破に奔走して素志漸く貫徹し、その結果が田川採炭株式會社の創立であつた。次は博多燈臺事件である。同燈臺は明治六年中村上某の創設にかゝるところであるが某は公益の觀念なく博多入津の船舶より一噸三錢の入津料を徵收するので、博多港の不評は到る處に宣傳され隨つて入船は日々に減少する。埠頭の衰微は實に著しいもので、この時下澤等の有力なる福博實業家は一齊に手に唾してたち、時の知事岸良俊介氏に迫つてさきの認可を取消さしめ、遂に一錢二厘に低下せしめた。この結果再びかゝることのない樣に荷主連の間に協成會を組織した。

田川採炭は時機尙早の故か、成績かんばしからぬものあつたが、氏は既往を悔ひ又將來を悲觀することもなかつたと云ふ。氏が晩年沫茶の泡に餘生を送つた心境は既にこの時代に源を發して居たらしい。

一面變つた處では採炭事業より方向轉換を試みて殖林事業に着手したことである。即ち鞍手郡山口縣山口山林約三町歩、嘉穗郡嘉穗村の約十町歩である。又糸島郡小富士邊田に於いては元祿寶曆開の耕地整理を行つて居る。筑紫郡八幡村野間附近にも荒地を良田に化せしめた。皿山には四町歩に溫州ミカンの栽培をなして居る。

氏の事跡をたどる時吾人には氏が一介市井の商人であつたと云ふ感は涌かない。少くとも雲を得れば昇天する龍の如く時運に乘ずれば一躍我國一流の實業家に伍し得たかも知れぬ。一性格が彷彿として眼前に去來する。しかるにこの大鵬の如き志をついだが當代平太郎氏は、時代に感ずる處あつてか、又は雌伏の爲か、他事には唯沈默を守つて、ひたすらに小間物に專念して居る。將來の成功は期して待つべきか。

松葉賣りの少年から九州屈指の
小間物問屋を築いた

明智の人　故　新免久次郎氏

◇六歳で松葉賣りに出る

「艱難は人を作る」とは好い金言だ。現今の青年は感情徒らに鋭角化し、空想に馳せやすく、やゝもすれば現實を無視し、時潮を追ひモダン人物のみふへ、思想國難來の問題となる、先代新免久次郎氏の奮闘談は實に時代の惰眠を覺すに足る注射薬である。

二十年前迄の青少年は、貧富にかゝはらず實務を研究したもので、富家の子弟は實務見習いに、貧者は家計を助けん爲めと、商賣上達の爲めに、行商に出る者が多かつた現代の如く辻占賣や不良少年はなかつたものである。明治初年博多岡部へ松葉賣をする六歳ぐらいの少年がゐた。この少年の後身が九州一の小間物問屋下西町新免本店先代新免久次郎氏であらうとは。

氏は幼名を八十吉といひ祇園町の新免久吉氏の長男に生れた。母はハマといひ、木原喜造翁の姉にあたる人で、新免家の祖先は新免七條少將則重建武年中備前美作國小房城に居城し共後關ケ原の戰に敗れ、黒田家入國こゝもに福岡に來り屋形原に住み、新免彈正左衛門則種といひ二千石の重臣になつた。世の推移と共に氏の祖父の頃より鼈甲細工製造業をはじめた。不運にも氏の幼少の頃博多は大飢饉にあひ、その上鼈甲細工の贅澤品は製造禁止になつた故に、家計はまず〳〵困窮に陥りこれを助ける爲め八十吉君は松葉賣をはじめたのである。僅か六歳の少年の「松葉ようござつしよう」の呼聲は界隈の同情の涙をそゝつた。

八十吉君の松葉賣親孝行に、お上より表彰の噂が立つたが堅くこれを辭して、家計の助けにさらに餘念なかつた。その頃國旗制定あり機を見るに早い君は日の丸の旗をつくつて小利を得、又電話のかけはじめの如き、竹筒に紙をはり、絲を通して電話の玩具をつくり、世人を驚ろかせた逸話もある。

◇小間物問屋になる

十四歳のをりには母方の里橋口町辻家當時小間物問屋高津屋へ見習として入り、晝は業務に、夜は未來の大商人を夢み、獨學大いに努めたものである。十八歳の時高津屋見習の年期を首尾よくをへ、慰勞金によつて霧不斷の香を焚く破れし自宅を改築した。西南戰爭のときは、軍需品行商で久留米方面に活躍して巨利をしめた。かく外に出づれば行商をはげみ、内にありては刻苦獨學をつゞけた。氏が二十二歳のをり祇園町綿勘の家に三井物產博多出張所が設けられた。時は其の幾多の所員應募者中より拔擢され採用後は商務にありて群輩に一頭地をぬいだ。當時の日記によれば「君は後世に置いて偉い者になるしつかりやれ」との賞辭を支店長より受けたことを記してある。

三井物產は間もなく引揚げる。氏は失望の極に達した。しかし奮起一番獨立掛町に小間物商を開店したが、集產場（現今住友銀行）ができて振るはぬので、思案中丁度佐世保に軍港築成のためにドン／＼人の乘込むのを見て、掛町の店を仕舞ひ百數十圓の金をもつて、佐世保の當時山の中へ掘立小屋を建て、露店式に小間物屋を開業（今の天滿町）した。これが計畫どほり圖にあたり、日清戰爭に大利益を得、現在の常盤町店舗を新築し、立派な店となり好都合に成功の緒についた。

氏は佐世保を支店として本店を出生地博多へ設置すべく、明治二十九年九月に、現在の下西町に間口三間奥行三十三間の土地百坪を千五百圓で買ひ當時は平屋を造作し小間物卸商を開業した。當時博多にはヒシヤ下澤氏をはじめ十五軒の小間物卸問屋があつた。新免氏は其の中に割込んだのである。艱難苦行の氏はむくひられて順風に帆をあげた樣に繁昌し三十四年二階建を新築して、新免商店の基礎は增々堅くなつた。伸び行く店を見て一安心せしが新免家十三世初代久次郎氏は三十五年十一月四十二歳を一期として歸らぬ旅路にのぼつた。

◇氏なき後の新免商店

一家のなげきはひとしほであつたが、然し基礎の出來た新免本店は何等微動だにしなかつた。後妻として土居町の眞藤家より嫁入られし現未亡人シオ子氏當時二十五歳のまつ盛りであり、遺子萬次郎氏は、當時十歳であつた。若未亡人シオ子氏は悲嘆の涙の中にもかたき決心を持て、主人なき後は店員をはげまし、自ら陣頭にたつて經營をつゞけたが、商運日々に伸びるのみであつた。一方萬次郎氏に福岡商業學校を卒業させて店をまかせ、自ら後見役となり專心家運の發展を志し、大正八年には現在の如く土地を擴張し三階建の新築を落成し、九州屈指の小間物卸問屋となり、クラブ

化粧品代理店（クラブ専門部）の外裝へきれぬだけの一流本舗の代理店となつた。

現在ではシオ子未亡人は五十有二歳家業は萬次郎氏（二代目新兎久次郎）に讓りて、社會方面に活躍し、夜間中學を創立したる如きその社會奉仕の一例である。二代目久次郎氏は本年三十有七歳青年紳士にして佐世保の支店と共に數多き店員を指揮し、增々發展に盡しつゝある。大正十四年正月博多商業會議所議員候補者へ推薦されんとしたが堅く辭して家業專心にかためたこころ、確に先代の意志をついだ非凡なこころである。今や化粧品萬能時氏に九州全土を得意として發展して行く新兎本店の多幸を思ふとゝもに、先代久次郎氏の苦心を追憶するに悲壯の感にうたれるものがある。

◇最近の發展

化粧品の新製品は日々に增加し又取引の得意先の範圍は近來著しく擴張した。故に昔日の組織其の儘では到底顧客の充分なる便宜を計る事が出來ない。愈々昭和四年四月、販賣能率の增進をはかるために本店の組織を改革する事にした。卽ち從來の資生堂部を獨立せしめて資生堂福岡販賣株式會社と稱し、博多妙樂寺町に營業所を設けた。又クラブ化粧品部も獨立し新兎クラブ商事株式會社と改稱された。共に社長は新兎久次郎氏たることは云ふ迄もない。本店では資生堂クラブ製品以外の一切を取扱ふことにした。

かくて、本店は兩會社を兩翼とし小賣販賣店に對する供給の圓滑を圖り、斯業の發展に一大飛躍を試みる準備は愈々こゝに完備した。同店今後の繁昌は又必然であらう。

坊主になれず民權運動に投じた數寄の半生をたどつた
中檢取締　信濃梅吉氏

◇中洲にこの人あり

博多は關西切つての國仲の淵叢、盡くが如き博多灣岸の風光美に配するに、不夜城をなす富金箱の國色美を以てす。九州を旅する人にしてわが博多の名をなつかしまぬはあるまい。だが時は移り物は變る。近代人がカフエー女給のコケツトリーに隨喜し、ジヤズの異國情調にカクテルを傾ける様になつては、藝者が藝を以て立てず如何がはしい風儀に流れやすくなるのも時の勢ひであるが、此の滔々たる勢ひに抗し、亡びんとする我國獨特の古典音曲と舞踊とをせめて花柳婦人の間に傳統して殘したいとの熱烈の意圖を有する國粹運動者として、わが中洲檢番取締信濃梅吉氏がある。

四檢番九百の博多藝妓、その中五百を占むる優勢の中檢を押さえてカタリともいはせず、積弊の改革斷行とともに多大の犧牲を拂ひつゝ藝道の皷吹に努めて倦まない結果は、中洲花街一帶の繁榮を來したと同時に、博多藝妓の名を天下に重からしめつゝある。曠古の御即位大禮に際し、主基地方の民謠や風俗舞を調査に來縣した宮内省の雅樂部一行は檢番階上で中檢藝妓の舞踊を觀て檢番の整頓と藝妓の藝風を賞讃したと云はれ、東京の大禮博では都下藝妓の交替演舞で人氣をつなぎ得なかつたところを、中檢から信濃氏引卒の一隊が應援に赴いて割るゝばかりの喝采を博した話しがある當時博覽會では「博多美人」と銘打つて人氣をつらんとしたのを「博多美人ではない、中檢藝妓」だと抗議してこれを改めさした如き「顔を見するにあちず、藝を見せるのだ」との氏の信條を窺はしめるものである。

◇三つ子の魂百迄

五尺に見たぬ短軀ではあるが、キビ〱した骨力、洒々落々たる胸懷、それに自ら持する處の識見もあつて一かどの頭梁の器をそなへ、花柳界の親分としてほつて置くのは惜しいとの世評を受けなるほど政治界あたりに押し出したら一方の鬪士謀將たること請合であるが、「政治など性に合ぬ一

と云つて幾多知己の推薦をことわつて機會を避けてゐるところに却て人物の床しさが仄見える。元來信濃氏は熱情漢でその前半生の起伏に徴する時、多分に政治家的な肌合がある。青年時、自由民權の思潮に動かされて殉難の途を歩した一齣の如きその風骨のかんばしきを思はせずに措かぬ。

氏は明治八年、洛西嵯峨の「西善」と云ふ由緒ある材木問屋に生れ、近隣稀なる腕白少年としてそだつた。父善四郎氏は末恐るべしとなして藥師寺と云ふ寺に預け行先は坊主にしてしまふとの親心であつたか、餓鬼大將は手兵を賄ふ必要あり、家からの仕送りの金を分捕ふとしてこばまれ、寺の納所坊主をブン毆つて寺を追はれた。而し兎も角高等小學を卒業し面倒臭い學問をやめて活社會に飛び出しその手始めに大阪朝日の京都支局に入り込んだ。巡査津田三藏が露國皇太子に斬りつけ有名な大津事件は氏か偶々大津支局に居た時突發したもので、氏はその原稿をもつて大朝本社に駈けつけたが大朝ではその時始めて輪轉機の据つけをやつてゐたと云ふ思ひ出が氏にある。

◇數奇な青年時代

薩長人にあらざる者は人にあらず。藩閥政府の要人は維新の功により、國政を壟斷して民意の蹂躙するにまかせた。が時はいつ迄も此の專制主義に味方せず、フランス革命の原動力となつたルソーやモンスキユウ等の自由民權說はいつか在野志士の間に唱導せられて、專制政府顚覆の運動は漸次擡頭した。血の氣のある青年として薩長政府が民權論者の頭に下す彈壓政策を目睹して反抗の叫びをあげずにゐる事は出來ない。十九歲の信濃氏は智恩院大學館の敎授にして、俠骨のきこえあつた高松無節といふ快人物に從ひ、關西各地の政談演說會に出て大いに藩閥攻擊の辯をふるつた。が岡山で遂に警察當局と衝突して問題を起し、時事諷刺劇を起して主義を宣傳するの巧妙なるに如かずと感じ壯士を集めて一座を組織し、自ら之をひきいて亂暴極まる政治劇を東海道から山陽道に亘つてやつて歩いたものだ。その中に民權論は勝ち民設議會も現はれて素志はむくひられたが、引つゝき舞臺上の演說や斬つた張つたの活劇に若き感激を託する事十年、劇界は轉換して政治劇が武夫浪子式になりかけたのに氣をくさらし、三十二歲の時（明治四十年）の數奇の半生に別れを告げ廣島で今の夫人を娶り、博多水茶屋に來て藝妓置屋を開いた、人身賣買的な置屋の制度を改革し一方我國固有の國粹に舞踊を保存しやうと云ふのがその動機であつたらしい。

◇斯界改革の功

氏は其の後中洲にうつゝたが、當時中洲には伴蜂郎氏あり、水茶屋に黒川清三郎氏あり、相生町に米倉藤三郎氏あり、何れも各檢番の一廓に覇を稱して一致の歩調がとれず、弊風改革など思ひも寄らなかつたのが四十三年の八縣聯合共進會頃より信濃氏は漸く表面にあらはれ、伴志賀太郎氏を中檢取締に推して之れを援け、後衆望をになつて自ら取締となり第一線に立つに至つた。氏の就任後檢番改革に現はれた事績は一二に止まらず、藝妓の風俗の改善、藝道の鼓吹等は勿論、檢番も置屋經濟の抱え主本位であつたものを藝妓本位に改めて弱き女性に安定と希望を與へ、税金の人頭税を稼ぎ高に改めしが如き、二十萬圓の貸家組合を作つて置屋の利福を圖つたが如き、その制度内容の整然として確實せる事は全國第一の稱を得るに至つた。由來此の業態にたづさはる者各種の經歴を有し、一癖も二癖もある人物がそろつてゐるのであるが、最初反抗的に出た者も氏の心事の潔白と事に當る熱誠とに服して遂に氏を以て無くてはならぬ人と仰ぐに到つたことは、氏の徳性の然らしむる所であらう。氏は博多四檢番聯合會代表は今春辭退したが福岡縣藝妓檢番聯合會長は三年以來その任にあり、縣の藝妓保健協會第一部長にも推されてゐる。

◇馥都たる俠骨

氏は本年五十五歳、人物愈々圓熟の境にある。持前の俠骨は、人との衝突の形で現はしはせぬがこまつた人に人知れず物をめぐんでその感謝を欲せず、市政界などに立ち働く者の中の清節の分子に蔭から後援して市政への間接の貢献をして知らぬ顔をしてゐたり、常人の到り得ない高き心境があることは、さすがにその過去を反映するものである。財を散すること斯の如くであるから、多くの蓄財を擁する譯ではないが、その言行悉く人より重んぜられ、卓落として光風霽月の生涯を送りつゝあることは、世の濁富を擁して世間から指彈さるゝ千萬長者以上の成功者と見るべきであらう。

中檢取締　信濃樺吉氏

小學教師から新聞記者三轉して
實業界に活躍する

昭和の俠客　平田學氏

◇讀書し過ぎる先生新聞記者になる

平田學氏は明治四年五月一日福岡須崎裏町平田作平氏の長男に生れだ。兩親は餘りゆたかでない生活をせられてゐたが、兎角小學校中學校を卒業した。多くの同窓生は夫々大望に胸をおどらせながら上の學校に向つた。平田氏は然しそれが出來ない。出來なくとも自ら持する向上心は五尺の滿身を燃し、彼等にまけない青年の意氣は、又勃然たるものがあつた。十九歲で中學卒業後直に福岡高等小學校に敎鞭を取る事にした。この時代の敎へ子の中からは廣田弘毅、富田勇太郎、齋藤延、薄拙太郎、小幡虎太郎、山下庸太郎、藤井伍平、江島廉太郎、石田敏太郎、宮川一貫、箱田龍磨の知名な諸氏が出てゐる。

先生と生徒の年齡の差が少いので、意氣投合がうまくゆく。つい惡戯の張本人に見られ平田先生と生徒が、校長の中垣安太郎氏の前に呼び出されて、說敎を受けると云ふ奇現象を呈して、先生が生徒に叱かられ方の實物手本を示すと云ふありさまであつた。

この頃氏はよく新刊を漁つた。一日校長さんに向つて、學校に何故に新刊書を備えて若い先生連を勉强せしめないかと忠告した。然し中垣氏は曰く、

「そんな必要はない。新刊書をよむ樣な人は野心勃々なる青年だ。長く小學校の先生を以てあまんずる人物でない。學校では成るたけ長く續く人が欲しい。そんな人は新刊書はよまないよ」。

氏はこの心中を深く洞察され一言の返す言葉がなかつた事を今も感心してゐる。

當時は武力腕力を誇る事が青少年間に尊ばれた。然し氏は將來に於ては學識と辯論術が必要である事を看取して、獨醒會を組織し、會長として活動した小學校先生の生活は二年にして終つて、當時中島勝義氏の主宰して居た九州日報社に入つて記者、編輯に從事した。

昔日机を並べて勉强した連中が愈々實業界に活動し始めてくる。氏自らを顧みれば雜務に雜務、勃々たる雄心やるせない境遇ではないか。日夜焦慄の時が續いた。現狀に不平滿々ではあつたが、

然し研學をおこたらず。六七年すると編輯長格に昇進した。この頃氏の嚴父が死去された、これを機會として、上京遊學の決心の臍を固めて、辭表を當時の社長平岡浩太郎氏に差しだした。平岡氏は「もう一年辛抱してくれ。そうしたら君を車にのせて遊學さしてやる」。と留任を進めた。然し固辭して社長の世話にならない事を斷言し、手元の諸道具を賣つて旅費を作り、母親、夫人、子供を橋口町にのこして單身上京した。

◇上京して苦學す

先づ專修大學に籍を置き、論理心理經濟の研究おこたりなく、又直接原書に親しむために、國民英學會に學び三年の星霜がたつた。この間自ら勉學の資をかせぎながら、尙福岡の家に月々の仕送りをして居る。語學の力もついて二六新聞がビイブルガラムと云ふ英文欄を置くと、その擔當になり三宅雪嶺氏が主掌する日本新聞で拳鬪の飜譯をのせた。兩社で六十圓位の月收があつた。

氏の勉學振は餘程鄕黨の注視を受けるやうになつた。或る時大野仁平氏が上京した。それを機會に平岡浩太郎氏はその歡迎の意味とかねて平田氏をも招宴した。平岡氏は「君は曾つて僕の世話にはならぬと云つたが、今晚は大野君の御馳走だ。遠慮なくくつてくれ」。と云つたので平田氏は始めて箸に手をつけた。又歸福すると、內海一道氏は、相生町の某料亭に氏を招待して、自分は今迄相券の藝者に月四十圓の仕送りをして居た。然し君の話を聞いてもつと金を有意義に使ひたいと思ふ。故にその藝者に相談つくで仕送りを止して、その中に二十圓を君に送りたいから是非受け取つて貰ひたい。のこり二十圓はやはり大阪に感心な青年が居るから、其處に送りたいと思ふ。との話又谷口道弘氏は一金百圓を君に送つたこの頃になると、平田氏は苦學と云ふよりむしろ樂學と稱すべき境遇に變つた。中村德太郎氏は牛肉持參で元氣をつけさせ又不自由だらうと親切に吉原に案內などしたりした。福岡の方では山下庸太郎氏が留守宅慰問に行つてやり、後顧の憂ひがない樣にした。

◇舞臺を實業界に求む

朝鮮總督府の金山尙志書記官の斡旋で京城日報の編輯長として入社する事にし、その旅費受取の爲め信濃屋に社長の伊東侃氏を訪づれ。たまたまと留守だつたので、他の客と快談數刻に及び、大い

に元氣にまかせて國家天下を論じた。隣室の客は平田學氏の聲を聞いて、「平田ではないか」と云ふ。見れば金子辰三郎氏である。團氏が世話すると云ふから三井には入らぬかと云ふ話である。當時大學卒業生は月給三十圓で三井入りしたものであつた。氏は三十五圓貰ふ事になり足らない處は團氏が補ふと云ふ親切な世話であつた。然し月給百五十圓の京城日報の方を捨て、三十五圓の三井入を選んだのは、人生意氣に感じて先輩に從つてか、そもそも將來活動の舞臺が實業界にあると睨んでか。

明治三十九年五月、三井鑛山の重役秘書を振出しに愈々實業界に入つた。大正七年六月には北海道製鐵株式會社の秘書兼庶務課長に選ばれ、八年十二月、日本製鋼と北海道製鐵と合併して北海道炭鑛汽船會社となるや、磯村事務の懇請に依り、秘書役兼人事課長として活動する事となつた。現在は此他に共立汽船會社の監査役、三井合名の囑託である。磯村氏は實に平田氏を信頼し、平田氏又よく信頼にそむかず、多くの事務は平田氏の處決する處である。會社に氏を訪づれるもの毎日三十有餘名に及ぶ。平田氏は然し如何なる人にも面會しない事は殆どないと云ふ。

◇平田氏と鄕里福岡市

平田氏は今日鄕里福岡の事になると必ず力瘤を入れて男らしい勇肌を示す。これは平田氏が世に出た最初が實に先輩の敎導鞭撻によると深く信じてゐるが故である。少くとも現在に於いて、福岡を出て上京した者で平田氏に面倒を見せないものはないと斷言してよい。氏が如何に故里のために働かんとする愛鄕心に燃えてゐるかがわかる。

現代思想の立脚點は、國家の歷史と國境を無視し民衆の血管を流るゝ偉大なる傳統の力をたち「世界人となれ先づ何者もわすれて」と主張して始めて理解され。これが渦卷いて現代の惡思想といふ姿を以て現れて居る。思想善導は今道說く人の間に呼ばれる流行語となつて居る。然るに思想善導は我等は先づ日本人たるを第一要件とし、萬人が持つ鄕土に着目し、その根强き本能たる懷鄕の情を善導するに出發すべきである。青年は唯物的制約に直面して、やゝともすれば最も淸き最も美し素朴である感情を蔑視せんとする傾向がある。これを破りうるものは唯に熱烈なる愛鄕心につながる縱橫の友情の外にはない。鄕土の雰圍氣は心情を美しくあらひ淸めて各人の胸にふかく、鄕

士こそいつも變らぬ溫容と、事毎にあたらしき感情を以て現代人をなぐさめ又はげます生命の泉だ。この信念を與ふるものである。

福岡市はこの點實にめぐまれて居る。各先輩はいづれもその好模範を示してくれる。平田氏の如き正に最も著しい例の一つである。會社に居ては激務がある。その中にあつてよく市將來の發展のために如何なる努力をもおしまない。市長問題で市會がごてついた時、後任市長に平田氏の名が稱せられ、今囘の築港運動のかげに氏が又活動した事は、萬人の記憶あたらしい事である。又團男を最もたすけてゆくべき福岡出身者は、先づ平田氏でなければならぬとの一般の定評がある。財界には團男の後光がある。その働くべき天地は洞明である。福岡市は將來に世界的都市たるべき素質を有して居ないだらうか。この福岡市と財界の關係を如何に平田氏か展開せしめてゆくか。萬人の皆注目する處で、市將來を思ふ者に取つても、又興味つきないものがある。

工業學校を出たまゝで
獨力得意先を開拓した
土木建築請負　森田彦隆氏

◇志を立て鄕關を出づ

時代は刻々にすゝむ。實業の日本が、我國の青年に愛讀された時代と共に立志傳の時代もさつた。ご所謂新人ご目さるゝ人の間に論ぜられてゐる。即ち努力する事を一種の尊敬の念を以て見る事を中止してしまつた感がある。誠心誠意事にはげむ精神がきえうせた。特に智識階級の青年間に之が甚だしい。今日の智識階級の失職、就職難の反面にこれが原因してゐるのではなからうか。英國のカーペンターが、ひばりの天高く囀づるは歌ふのか、それとも働らくのかと云つた事がある。我々が日常になす仕事に人生の目的價値と手段價値を合せしむるの重要さは「實業の日本」時代も過渡期と稱せられる今日も何等差異はないのである。

而も次の新時代の精神は所謂新意想の所有者と目せらるゝ人の間に見出されずして、實際の例が往々唯默々として語らざる人の間に見出されるのである。

今紹介せんとする森田彦隆氏の經歷に我々は寶玉の如き敎訓を得る。

森田彦隆氏は朝倉郡夜須村石櫃に產湯を使つた。明治二十一年三月二十日がその誕生日である。嚴父は卯三郎氏と云つて氏はその長男である。土地の小學校を卒業し福岡工業學校に入學し、同校卒業後明治三十八年十八歲の折靑雲の志をたて鄉關を出て上京したのである。

氏は高等工業の建築科を學ばんとしたが、當時それがなく、敎員養成所に入らんとしたが試驗期を逸してゐたので遂目的を達する事が出來なかつた、漠然として喧騷の都大路を步いて氏は同學の念抑ふる能はず、大學に進みうる。中學に何故學ばなんだとしみじみ後悔した。

◇土木請負で進まう

友人は夫々專門學校へ進んでゆく、それなら俺は實業家を希望しやう、福岡の母校で學び得た處實際仕事で修得した經驗、それに足りない所を獨學すればよいのだ、實際家として立つのみだ、氏は深く決意する處があつた。

氏は將來建築請負を以て身を立てやうと決心したのはこの時である。辰野葛西事務所に入り又は日本郵船、個人の邸宅の普請など、大小の請負工事に關係して充分の土臺を築いた。氏は太陽が出てから朝飯をくふなどの事は殆どなかつた。職人、人夫が職場に出る前に必ず氏自身は姿を現はしてゐた。彼等が歸つた後も氏は尙現場にのこつてゐた。郵船の工事の如き氏が二十一歲のをり既に六十萬圓にて責任を以てやつたのである。

當時の土工は兎角亂暴この上もなかつた。寒中と雖も眞裸で仕事をやつたものである。この元氣はいたる方面に現れる。酒をのめば拳が飛ぶ。太刀が光る。普通の者では到底この連中をまるめて手下に使ふことは出來ないものである。森田氏も早速連中の試驗臺にのせられた。若い監督の奴がなんだ少々彼等は氏に頤使さるゝを不服であつたらしい。

◇職人と懸命で早勤競爭

或る日森田氏が仕事の現場に來て見ると、すでに地面に棒杭がうつてある。何故こちらの命令を

土木建築請負　森田彦隆氏

きいてから仕事にかゝらないかと職人をせめると、ひるはあつくて朝はやくやらなくちあ仕事は出來ねえ。もつと監督ともいはれるものははやく來てもらはなくてはこまると却て不足をいはれた。翌朝五時にいつて見ると職人ば既に來てゐる。四時に來で見ると又來て棒抗がうつてある。三時に來て見るとまだ職人がはやい。森田氏はつら〳〵考へたこの荒くれ者はすねれば手がつけられないが、又反面單純さと意氣に感ずる美點を持つてゐる。將來仕事を面白くやつて行くには彼等を心服せしめねばはらぬ。こゝで彼等にまけては徒らに、彼等の嘲笑をかふのみだ。

氏も勇猛心を起してははやく出かけて行つた。職人もはやく出てくる、意地でも頑張るより他にしかたがなかつた。

工務事務所の顧問は氏が毎日の過勞のために焦悴するのを心配するの餘り、君あきらめ給へ。體では彼等にとても勝ことはないんだ、意志張ると體があぶないよ。併し氏は頑として之に應じなかつた。遂に氏の勝利の日が來た、職人たちも若いが森田氏には骨があると始めて尊敬する樣になつた。

其の後も氏は自らが監督の地位にあるからとて決して樂をしやうとは思はなかつた、苦勞も樂も共にすべきだと堅く信じた。百五十人の手下の者と汗みどろとなつて働いた。ウクークシツクに二回も取りつかれたことがあつた顏に血色なく肉も落ちてしまつた。そしてこんな仕事はよそうかと思つた。

◇働きの哲學と獨立

然し若しこゝに氏か請負業者たることを斷念してゐたらこの物語りを書く必要はなかつたであらう。働く人とともに働け。職人の働らきを父親が働くと思へ。そしたら子供の自分がどうして働かずにおられるか。働きの哲學、氏はこの信念の元に完全に部下の心服を得た。多年の經驗で腕に充分の自信を生ぜしめた。如何なる荒くれ男も一心合體して働くではないか。自分に足りないものはなにか。材料屋の信用だ。然し氏は此の間に於て此の社會に於けるあらゆる誘惑にも抵抗し正道を以つて精心精意親切に面倒を見て居た爲めに云ひ得ざる絶大の信用があつた。それは建築材料これさへあれば完全に一人前の土木建築請負業者だ。

氏の二十一歳の時故郷の嚴父は永眠された。母堂は遺産を持つて上京して來た。そして氏が母堂

の持つて來た金で家を建てることを躊躇すると、
「お前がいつ迄も借家住ひするつもりなら私は國に歸りますよ仕事をするには信用が第一です。信用をつくるためには自分の邸宅に入つてゐなければ駄目です。」
とひどく意見せられた。道理ある言葉にに成る程と思つた氏は二十二歳より二十三歳の時に掛けて東京白金今里町に現在の邸宅を作つたのである。

三十歳になれば獨立する。氏はさう決心して居た腕こともに對外的の信用が増加してくると、部下さ、材料屋がしきりに獨立をすゝめた。然し氏はじつと持ちこたへ三十歳になつて始めて獨立することにした、部下も喜び材料屋も喜んだ、そして皆氏を先生と呼んで尊敬と親しみをあらはした。

然し氏の獨立の門出は歐洲戰亂後の財界の恐怖を以て禍ひされたのだ。出鼻をくぢかれたのだから普通の人であつたら氏は立つ能はざる打撃を受けたかも知れぬ。世人は森田氏か如何なる結末になるかをあやふんだ。然し世人があやふめばあやぶむ程部下及び材料屋は一致して氏を助けて來た。そしてかほどの難關を切ぬけた。

◇得意先は全く獨力で開拓

森田氏が最も困難を感じたのは得意先を如何にして開拓するかにあつた。知己が多くなかつた氏は仕事を得る困難にぶつかつた。紳士的で遠慮勝で而も叩頭的運動に拙劣である氏は、友の紹介又は添書による得意獲得方法をとらずあくまで自力でゆく事にした。一番に公入札にゆき、落札する他の者は表面だけの仕事をする。然し氏は表裏なく誠實にやりとげる、成績はすばらしくよい、遂に指名入札をされる樣になり、次から次へと氏の信頼さるべき事が傳はつた。諸官公署及び諸會社民間の得意は殆ど氏が自分で情實による結合でなくて得たものであり、その基礎は皆人格の修養と信用である。

現在土木建築請負業森田工務所を東京市京橋區北槇町千代田信託ビルヂングに、出張所を東京府南葛飾郡金町に置き、自宅は白金今里町に構えてゐる。そして復興途上の東京市の大土木工事の戰場裡に花々しく活動してゐる。最近三菱系の中川製紙工場の二百萬圓の工事を竣工した。

森田氏は日本土木建築請負業者聯合會評議員、東京土木建築業組合常議員理事、東京芝赤坂麻布

土木建築請負　森田彦隆氏

の東京土木建築業組合第二支部長をつとめ昭和四年二月二十一日の東京市の商議戰には組合に推選され理想選擧を行ひ立看板一枚立るでなく、而も見事東京商工會議所議員に當選の榮冠を贏ち得たのである。

◇母子の情

森田氏の母堂は大正八年迄東京にあつた。氏が成功の途を一歩一歩踏みしめてゆくのを見て安心して永年住なれし郷里に歸つた、都會は靜かな田園に過半生を送つた母堂に餘りに騒々しかつたに相違ない、孝心深い子息はあるとしても友達もなく、日常の話題も母堂の過去の經驗と沒交渉な事柄が多かつた、愛した夫の靜かにねむる郷里がより母堂の心をひいたに相違ない、母堂は今七十七歳の高齢を以て衣須村に茶のみ墓参りに餘生を樂んでおられる、森田氏も毎年正月は歸省してその安否を問ひ多い時は年に三四度も訪づれるのを常としてゐる、

森田氏は母堂の寫眞を常に肌身はなさず持つてゐる、母堂も又彦隆氏の寫眞を持つてゐる、職業柄森田氏は時々立腹する事がある、その時氏は母堂の寫眞を取出してその慈悲にあふるゝ老顔を見ては、かんの蟲をじつとおさへてゐる。

現在氏は約四十名の社員を使用してゐる。出勤のおそい社員には時折り氏の青年時代の懐古談をやつてその奮起をうながす、然し若者共は今と昔は異りますよなどの返事をして氏をさびしがらせるらしい、氏は然し愛を以て部下を督勵してゆく。部下も皆一心同體になつて働いてゐる。

森田氏は本年四十二歳、今後斯業に精勵さるゝ事を信じて疑はぬ。

昭和四年七月十三日印刷
昭和四年七月廿七日發行

『事業と人』

定價金貳圓

不許複製

編者　福岡時事社編輯部

發行者　福岡市春吉土橋三百五十五番地　長野民次郎

印刷者　東京市牛込區南榎町二十二番地　古野勝吉

印制所　東京市牛込區矢來町六十二番地　泰文堂印刷所

發行所　福岡市春吉土橋　福岡時事社出版部
電話四一九八番
振替福岡一三六〇〇番

大賣捌所
東京　福岡縣人社　日本橋區南茅場町　鐵田信託ビル四階
福岡　積文館　東中洲町
金文堂　中島町

東邦電力株式會社

九州水力電氣株式會社

國民精神作興雜誌
青少年團研究機關

月刊雜誌
日本魂

主盟 後藤武夫
顧問 頭山滿

新宗教至誠教機關
東京橋區櫻橋南側 日本魂社發行

全世界調査探偵機關
資産信用調査、代理取立
結婚血統調査、結婚媒介
（資本金五十萬圓 明治三十三年創立）

株式會社 帝國興信所
所長 後藤武夫

東京本所 京橋區櫻橋南側
大阪本部 西區江戸堀南通
支所出張所 全國樞要地五十八ヶ所
聯絡地方 支那、南洋、歐米主要地

新聞界の大革新

◉ゆる／＼新聞を御覧になるのは朝より夕景!!!

時代の要求に應じ本紙は夕刊八頁を斷行し更に月極讀者には畫報進呈

毎月廿日發行
目下大好評の
大阪時事畫報
表紙十數度刷
内容舶來紙
彩色版二十頁

―月極讀者（畫報無代贈）是一ヶ月金一圓・夕刊のみは（八頁）一ヶ月金七十錢―

日本
創始
八頁夕刊
朝夕刊
十二頁

『朝刊』はニュース本位に紙面刷新『夕刊』は更に異彩ある左の諸欄を特設す

◉趣味欄　趣味娯樂の各方面に亘る報道
◉ラヂオ欄　プログラムの豫告解説頗る詳細
◉交通欄　本社獨特の本欄報道敏速確實
◉工業欄　業界嚆矢の企劃ニュース及紹介
◉婦人と家庭　本紙の特色を發揮し益々好評

大阪時事の躍進

大阪時事新報社

西日本に比肩するものなき

本邦新聞界の權威

福岡日日新聞

東京福岡間八百哩を連ぬる

電送寫眞と專用電話

月刊
雜誌

讀め！吾等の雜誌！

福岡縣人

「福岡縣人」を讀まずして福岡縣人を語るべからず。苟くも福岡縣に關係を有する人は、その家庭に、そのオフィスに、必らず一冊の福岡縣人を常備せよ。

▲縣下●事情の報導並びに評論▲縣出身名士の卓說滿載▲縣出身人物の尖端的評論▲文藝欄は郷土出身●文士每號執筆▲全國各地在住縣人の消息を詳細報導▲全國各地縣人●會合の狀況を詳細掲載▲其他福岡縣人として有益なる記事滿載!!

=一部四十錢・半年二圓三十錢・一年四圓五十錢=

發行所
東京市日本橋區南茅場町四二
織田信託ビル內
福岡縣人社
電話茅場町一五五〇
振替東京六四四三

◇讀めば郷土の事情が一目瞭然と

表も裏まで

福岡時事

◇口を開き、ペンを取れば………

大福岡建設の

發展研究となる

大福岡研究紙

購讀料（前金）
一ヶ月 參拾錢
但シ郵送料共

廣告料（一行）
普通 五拾錢
特別 一圓

發行所
福岡市春吉土橋
福岡時事新報社
電話四一九八番
振替一三六〇〇番

編輯發行印刷人 長野民次郎

終